
魔法少女リリカルなのは～平穏を望む化物。怪物とも言う～

夜風 彪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは〜平穏を望む化物。怪物とも言う〜

【Nコード】

N2506T

【作者名】

夜風 彪

【あらすじ】

「あゝ失敗した・・・転生なんてするんじゃないかなかったぜ毎日食って、寝て、食って、寝てetc」

望んでもなにのに転生しちゃった主人公 夜風 やなぎ 鈴 れい。
やる気の無さは人一倍、原作ブレイクしちゃうのか？

主人公は最強です。チートです。

文才ないけど頑張ります!!

※07月25日タイトル変えました

01話 悪魔とチートと転生（前書き）

疲れる

01話 悪魔とチートと転生

みなさん初めまして。私の名前は夜凪 鈴です。

つい先程、魔法少女リリカルなのはの世界に転生してきました。ええ、赤ちゃんですよ。

なんかテンプレよろしく真っ白い空間に行って天使の爺が……

とかじゃなくて真っ赤な炎に囲まれた場所で黒い尻尾、黒い髪、黒い羽根を生やした美人のお姉さんにです。はい。

取り敢えず、回想どうぞ

気が付くと真っ赤な炎に囲まれた空間にいた。普通なら全身が焼かれるように痛いんだが、あいにく俺はあまり痛くない。どんなに暴力を振るわれても、どんなに血を流しても、死なない限り何度でも立ち上がれる自信がある。

「ふふっ、流石ね。まあ、私が選んだんだから当然よね。あ、私、悪魔のユミよろしく」

眼の前に黒い尻尾、黒い髪、黒い羽根を生やした美人のお姉さんがあらわれた。コスプレかよ……………」

「…………コスプレ会場はここじゃないですよ？」

「コスプレじゃなわよ！」

何だと!？

「えっ…………もしかして「これは私の翼なの大空に羽ばたくの!」!とか言う最近噂の電波女?…………怖っ!」

「違っってば!!というか、初対面でいきなりそれは酷いんじゃない!?この尻尾も羽根も全部本物よ!コスプレじゃないわ!!!」

「まあ冗談はこの辺までにして、此処何処？」

若干うなだれている女性に問う?お疲れ様です。

「…………此処は地獄よ」

…………あ、あゝあれか、頭がアレな子なんだな。うんうん

「ピッピピッピ (携帯の操作音) あっ、もしもし××精神病院で
すか? 実は——」

「何やってんのよおおお!!というか携帯なんてどこから出したのよ!!しかも何で精神病院!?!つか何で電波あるの此処!?!」

「はぁ、仕方ないなあ「何が!？」うるさくて通話すら出来ない」出来なくていいわよ!!」「わかったわかった精神科はやめてやるって「じゃあ、最初から電話しないでよ」ピッピピピッピ（操作音）あつ、もしもし脳外科ですか？実はですね——」

「だからやめてって言うてるでしょおおおお!!」「はぁ、何が不満なんだよ」全てよ!!」「何故だ？」私はどこもおかしくないの!!「わたしは正常なの!!」「まったく、折角善意で病院を手配してあげようとしたのに」しなくていいわよ!!」「それ以上残念になっでどうする？」残念じゃないってば!!「さっきから——」

「もうなんでもいいッス」

あの後俺の良心をことごとく蹴っていく自称悪魔。

俺が心配する↓ツツコミが入る↓俺が心配する↓ツツコミが入る・

・The 無限ループ

もうコスプレでも電波でもどうしてもよくなったのでついさっきやっ
と終わらせた。

「で、悪魔のユミさん。何故俺を地獄に連れてきたのかが知りたいんだが？」

「はあ、やっと本題に入れた・・・取りあえず、あなた死んだから「は？」質問は後にして「・・・あいさ～」私たち悪魔はね、あなたたち人間の世界を見ることが出来るの。人間の生活は面白いから人間界をみる悪魔も多いの。・・・そんなある日私たち悪魔が人間界を見たときにあなたが映った。」

「ふーん、なんで俺？」

「ただの偶然よ。その時の映像を見ていた悪魔は多いんだけど・・・人生なんてつまらない、そう思って生きていたでしょ？退屈は嫌だけど、平穩に暮らしたい。そんな矛盾の考えとしていた。違う？」

「正解」

「で、思ったのつまらない人生が嫌なら、価値のある人生に変えてあげよう！って」

「・・・ん？　んー、このパターンって

「という訳で、あなたを転生させます。リリカルなのはの世界に行ってもらおうから、よろしく♪」

「何言ってるの？頭大丈夫・・・じゃなかったな。ごめん」

「謝られたのにすごく不快な気持ちなんだけど！？」　でもリリカルなのはの世界に行くのはマジよ」

「はあ、まあ了解。じゃ、早く送ってくれ」

「待って、特典つけてあげるから」「は？特典？」

「そうよ。じゃあ・・・」鍛えれば鍛えるだけ上がっていく身体能力」「殲滅眼」「リンカーコアはEX」「レアスキル」「気力妖力魔力」「大嘘憑き（オールフィクション）」「瞬間記憶能力」でいい？」

「あ、ああ、すげーチートだな。でも俺はアニメの二期までしか見てねえからわかんねえぞ？」

「いやいや、前世で虚刀流を完璧にマスターしてるやつが何言ってるやがりますか。あつでも、前世の記憶は消すわよ？だから転生してあなたが覚えてることは前世の漫画やアニメの知識とか私が転生させたとかだけになるわ」

「別にいいよ、毎日平和に昼寝して暮らしたら文句はない。あつでも完璧な虚刀流を使えるようになりたいから七実と七花の経験もくれ」

「わかったわ。別に好きに生きていいから、それでもいいよ？」

「マジか！！じゃあ、早速行ってくるわ！！」

「じゃあねーあ、特典は4歳までには全部覚えるようにしとくから！！あとレアスキルは自分で考えてね！！行ってらっしゃい」

「へ？＜カキーン＞」

俺が最後に覚えているのは金属バットでフルスイングした笑顔の悪

魔でした。

あつ俺が死んだ理由聞くの忘れた・・・まあ、いいや

回想終了

長かったな回想。そして、ドンマイ前世の俺（笑）

そして、現在の俺もドンマイな訳でして・・・僕捨てられちゃった♪テヘッ

おえ、キモッ！！やるんじゃないかった・・・

最初はふつうに生まれたわけですよ。それから一年間たって一歳になったんだがその時に魔眼が覚醒しちゃったわけでした、気味悪いから捨てられちゃった・・・

どないしょ？

悪魔ユミ

さっきの青年、夜風 鈴に私は嘘をついた。

彼を最初に見つけたのは私だった・・・彼には言っていないけど私には
ッ人の記憶を見る力がある。

私は彼を観察していた思った・・・生きることをやめてるようで死
を望んでいるような過ごし方をしていた彼。

だから、ちょっとした好奇心から彼の記憶を見てしまった。そして
驚愕した。

彼の生まれてからの生活は酷かった。父親は無職。母親は鈴を生ん
だ2年後に病気で死亡。

母親の死を受け入れられない父親は浴びるように酒を食らった・・・
そしてまだ幼い鈴に暴力を振るった・・・何度も何度も何度も何度も
何度も・・・。

鈴は泣けば殴られ、父親が酒を飲めば殴られ、骨が折れても病院な
んて行ける訳もなく、全身ボロボロの状態になりながら生活をして
いた。父親の食べ残りの残飯を食べ、言われるがままに酒を買い、
常に父親のご機嫌を伺いながら過ごしていた。

彼がそんな生活が続けて6年が過ぎていた。8歳になった鈴は泣く

ことを辞め、感情を自分の中に閉じ込めて鍵をして生活していた。

だが、あるとき彼がいつものように父親が寝静まったのを確認して、残飯を食べながらパソコンを起動して動画を見ているとあるアニメを見つけた。そのアニメこそが刀語。そしてそれを見終わった鈴は歓喜していた。

鍵を掛けている感情が出てくる程に顔には狂喜を覚えさせるような笑みを浮かべていた。虚刀流。剣を全く使わない剣術。

これが夜風 鈴と虚刀流との出会いだった。

彼が虚刀流に出会ってから7年たった。

彼はこの7年間、父親からの暴力に屈することなく延々と修行に明け暮れていた。刀語の本を何度も見返し、父親が寝ている時にアニメを何度もスロー再生を繰り返し、何度も同じことを繰り返す・・・
・たったそれだけのことをずっと続けていた。

私も彼の努力は純粋に凄いと感じた。あんな少ない情報しかないのにあの虚刀というものを完璧にマスターしていた。

そして、さらに1年がたった頃、ついに彼は行動を起こした。

彼が10歳を超えた辺りから父親からの暴力はさらにひどくなっていた。煙草の火を押し付けられたり、酒瓶で頭を殴られたり、家の2階から突き落したりと・・・いつ死んでもおかしくないことを父親は酒瓶片手に平然とするのだ。

私はいつ死んでもおかしくない彼をずっと見ていた。いや、途中からは応援していた。死ぬな！死ぬな！と叫んでいたのはいい思い出だ。

だから、その日彼が起こした行動はよく覚えている父親が酒を飲んでいる時に

「虚刀流『蒲公英』」

父親の身体を引き寄せながら、自分の元に引き寄せ、貫手で貫く。

父親の心臓目掛けて一突き・・・そのまま父親は絶命した。

そのあと、彼は殺した父親の隣で今まで閉じ込めていたすべての感情を出しました。

泣いて、笑って、怒って、喜んで、悔んで、楽しんで、憐れんで・・・死にました。

今までの無茶苦茶な生活の負担と狂ったように修行した疲労、そして長年の間に溜り溜まったストレスで彼は死にました。

彼が死んだ瞬間私は彼を此处に呼び出して生き返らせました。

前世の記憶を全て消して辛いことを全て消し去りました。

どうか、第2の人生では楽しく生きることが出来るように祈っています。

それでは・・・・・・・・・・もう出番ありませんよね？
(泣)

S
i
d
e

O
u
t

01話 悪魔とチートと転生（後書き）

もう出番はない！！

毎日更新とか無理あるくね？

主人公＋チート＝最強だと思う By 作者 8／22改

主人公 夜凧^{やなぎ} 鈴^{れい}

年齢 01歳～05歳

身長 130cm～140cm

趣味…鍛練（極偶に）、弱みと握ること、悪戯、家事全般、睡眠

特技好き…友人、邪魔されない空間時間、声帯模写、クレーンゲーム、開発^{いろいろ}、悪戯、食べ物全般etc…

嫌い…睡眠妨害、勉強、侮蔑迫害などの差別etc…

持っているチート

1・鍛えれば鍛える程上がっていく身体能力

2・気力妖力魔力

3・リンカーコアEX（感知されたくないから封じてる）

4・虚刀流と七実と七花の経験

5・殲滅眼^{イノ・ドゥーエ}…※この作品の中で使うのは魔法を喰らい力にすること、回復、身体能力が上がる位にしか使いません

6・瞬間記憶能力

7・レアスキル↓まだ出てない

8・大嘘憑き（オールフィクション）

?????

??????????????????

容姿…中性的な顔立ちをしている為、よく性別を間違えられる。髪は肩までのセミロング。前髪は目にかかるくらい。髪色は黒だったが真っ白に変わってしまった。瞳の色は黒。

性格…自由奔放・面倒くさがり、自分の興味の無いことには一切関わらず、逆に興味のあることには粉骨碎身の覚悟で挑み、無駄にこだわったりする。

嫌な事ですら自分の中で面白いことに変換している。人生をこれ程までに目一杯楽しんでるのはこいつくらいだろう

彼の頭の中には日本のオタク業界が誇る様々な神歌がつまっている。

そして、一度キレると手がつけられないほどに恐ろしいという面を持っており、

本気で鈴がキレたときは「世界滅びるんじゃないやね？」と言われる程だ。

主人公＋チート＝最強だと思う BY 作者 8／22改（後書き）

追加しました。また追加するかもしれません

02話 修行と実験と孤児院（前書き）

自分で書いててなんだが文才の無さとかにびっくりだよ。

この設定いるのかよ！？って書いた後に思ったもん・・・泣けてくる

02話 修行と実験と孤児院

さて、みなさん。俺は今、ある森に居る。理由はわかるかな？捨てられたからだ。

いや、俺も予想外だったぜ？ あの悪魔からもらった魔眼の能力が『伝説の勇者の伝説』で出てくる『殲滅眼』イーノ・ドゥーエだったなんてな。

眼の中心に、朱の十字の模様が浮き出ている。

この眼のこの眼の保持者は、魔法や人間、そしてそれらの中にある、魔法を生み出す力（精霊や魔力）を喰らって、自らの力に還元することができる。還元した力は、身体能力の向上という能力になって表れる

つうかよ・・・

「これからどうすればいいんだ？」

だってよお、現在の状況をまとめてみると

俺、一歳児（二足歩行可能）

今使える能力Ⅱ虚刀流・殲滅眼・鍛えればイーノ・ドゥーエ身体能力

悪魔から転生！！

知らない森の中に一人

ガサガサッ「ん？・・・」。

（っ ㇏ ㇏）ゴシゴシ

（；。㇏。）

（っ ㇏ ㇏）ゴシゴシ

（；。|，。|。㇏）…?!

（っ ㇏ ㇏）ゴシゴシゴシゴシゴシゴシゴシゴシゴシゴシ

（㇏ ㇏）

（；㇏）！！

「ぎゃああああああ」

俺は全速力で走り出した。1歳児何やってんだよ・・とかそんなこと言ってる場合じゃないんだって!! え? どうしたのかって? よくぞ聞いてくれた!! 実はな、俺は転生して既に死にそうになっている。何でか・・・だと? それは俺の後ろを見てくれればわかる!!

四足歩行でその大きな体からは想定できないような速度でこっちに近づいてくる熊がいるんだ!! 確かあれは灰色熊・・・・グリスリーかよ!! ん? ってことはここは北アメリカかよ!!

やべえって何か考えないと・・・そうだ!! って・・・

「行き止まりじゃねえかあああああああ!!」

眼の前に俺の逃げ道を遮るように立ちふさがる岩山。

考えろ! 考えろ、俺!! 殲滅眼は魔力がないから無理だ。虚刀流は1歳児の体系では無理があるし、身体能力が鍛えないと強くないから今は無理。

あれ？これ詰んだくね？

バアン！！
ドサッ

とか思ったら目の前でグリズリーが血を吹き出しながら倒れました。
ピクリとも動きません。つか、さっきの音って銃声だよね？ え、
人居んの？

「おい！ 大丈夫か！？」

「はい。ありが・・・と・・・うぎゃあああああああああ！
！！またグリズリーイイイイイ！！？！！？」

今度ばかりは泣いた。割と本気で泣いた。

「すまないな。こんな顔で・・・」

「い、いえ、すみません。助けてもらったのに悪口言っちゃって」

この助けてくれた男性は上野 誠。髪を短髪のオールバックにしていて、揉み上げから顎、鼻の下にまで黒い髭が続いており、顔のほとんども髭で隠れている。

体全体が膨れ上がっていて、何か入れているのか聞いてみたら筋肉だった。ゴリラやチンパンジーなんて目じゃない。二の腕なんて膨れすぎてはたして腕なのか疑問をもつほどだ。

誠さんは傭兵をしていて、今回はたまたまアメリカに来ていたそう
だ。

初対面の時は本当にグリズリーかと思って本当に怖かった。

「誠さんかあ」

「んあ、俺の名前がどうかしたか？」

「いや、かつこいい名前で羨ましいです」

「おお!! やっぱそう思うか? ありがとよ!! そーいやお前の

名前を聞いてなかったな」

「あつ、名前は夜風 鈴、1歳、男です。よろしくお願いします」

あつ誠さんが固まってる・・・「はぁ！？1歳！？」復活早ッ！

「はい。1歳です」「い、1歳って言葉喋れるのか！？」「俺は喋れま
すよ？」「1歳ってこんなにスタミナあるのか！？」「さぁ？あるんじ
ゃない？」「小さいとは思っていたが・・・まさか1歳とわなあ・・・
つか、男かよ女にも見えるぞ」泣いていいですか？」

まあ、確かに、1歳はふつう喋れない、走れない、俺が以上なだけ
(笑)

「まあ、それは置いとくとして、鈴、なんであんな所にいたんだ？」

まあ普通そうくるわな、「親に捨てられちゃった♪」

それからは何故か誠さんが「黙って俺について来い！」とか言い出
して「鍛えてくれるならいいですよ」とか言ったら速OK！

と言う訳で、

名前 夜風 鈴

年齢 1歳
職業 傭兵見習い

がんばります!!

と、いう訳であれから3年経ちました。

えっ? 飛ばし過ぎ? はっ関係ないね!! キングクリムゾン万万歳だね!! 作者はめんどくさがりなんだよ!

あれから3年間で現在は4歳になり、随分? めちゃくちゃ? チート? どこぞのサイヤ人なんて目じゃないくらい強くなりました。デコピンで地面に罅が入り、拳で地割れを起こし、蹴りで民家が二軒なくなりました。この身体能力で虚刀流なんて使ったらかなりヤバそうなので使うのは遠慮してます。

そう言えば、悪魔のあゝ . . . なんだっけ? ミミだっけ? 悪魔の痛い子検定第1級保持者がくれたチートが結構出てきたよ

今のところ『鍛えれば鍛えるだけ上がっていく身体能力』『殲滅眼』『リンカーコアEX』『気力妖力魔力』『瞬間記憶能力』『七実と七花の経験』『レアスキル』は覚えた。

『リンカーコアEX』と『気力妖力魔力』まだ、レアスキルは決ま
ってないからゆっくり考えていこうと思う。

つか、あの痛い子検定第1級保持者は確か4歳までにすべて使え
るようにしとくとか言ってたような気がするんだが？　まだ『大嘘
憑き（オールフィクション）』が出てないんだけどな・・・ま
あいいや気長に待とう

「おい鈴！　晩飯出来たぞお！！」　「わかったあ！　直ぐに行くよ
！！」

誠さんに呼ばれたので一旦訓練は終了。

傭兵見習いになってから俺は誠さんに付いて行って世界各地を周っ
た。傭兵ってのは金さえ払えば闘ってやるよ。みたいな職業だから
な一年くらい前から俺も戦場に出てる。もちろん人をたくさん殺し
てます。味方の皆さんから「お前の殺り方はグロすぎる」とよく言
われます。

実際はそんなにグロいことはしてない。敵さんの臓器を引っ張り出
したり、脳天締め（ブレイン・クローまたはアイアンクロー）で脳
漿（脳などを満たしている液。脳脊髄液）ブチまけさせたり・・・
あんまりグロくないよね？

「どうした？ 食べないのか？」

「食べるよ。いただきます あむっ んん、おいしく♪」
「そうか？ 俺は鈴の作ってくれる飯の方が好きだけどなあ」
「じゃあ、今度はおれが作るね！（あれ・・なんだか・・すご、く眠い・・・・）
ボタンッ・・・ZZZZZZ」

上野 誠

「・・・・・薬が効いたか？」

俺の目の前で鈴が寝ている。俺が食事に睡眠薬を混ぜたんだが・・
ちゃんと効いてるようだな

コンコンッ 「来たか・・」

ガチャッ 扉を開けると黒いスーツを着た男がいる。今回の取引相手だ。

「例の子供はどうした？」

「あそこで眠っている」

俺が指を指して答えると男もそちらを見る。

「では、この子は貰って行くぞ。これは今回の報酬だ。」

男は手に持っていたトランクを渡してきた。「確かに受け取った」

「これからもいい取引をしようじゃないか」「ふっそうだな」

「では、私はこれで失礼するよ」「ああ」

そう言って、男は車に鈴を乗せると帰って行った。

「二千万か・・・これだけあれば20年は遊んで暮らせる!! 傭兵なんてやめて遊んで暮らそう。悪く思ふなよ鈴・・・・ふふふッあっはっはっはっはっは!!」

暫くこの笑い声は続いていた。

02話 修行と実験と孤児院（後書き）

一日で二話も書く自分が凄い

03話 負の感情と実験& a m p; 結果とおっきなお友達（前書き）

自分で読んでみたら矛盾してね？
とか思ったりした作者です

03話 負の感情と実験& a m p; 結果とおっきなお友達

「んっ・・・ここは」

眩しい・・・これは、ベット？それにこれは拘束具！？

「気が付いたかい？」

「誰だ？ さっさとこれを外せ！！」

！？ 外れない！？ 俺の力でも外れないだと！？

「ふふっ探す訳ないだろう。そして、それは君の力でも外せない。君のことは誠から聞いてるからね 現に君が力を入れても外れないだろう？」

「誠さん？誠さんは！！ 此処はどこだ！？」

「ふふっ君は誠に売られたんだよ！！誠は二千万で君を僕に売った、今頃は傭兵を辞めて遊び周ってるんじゃないか？ 因みにここは研究室」

「嘘だ！！誠さんがそんなことするわけない！！」

「くくく、私はねえ、誠が作った食事に混ぜられた睡眠薬で眠った君を担いで此処に運んで来たんだよ。それに君は食べている途中に眠くならなかったのか？眠かったはずだね？ 答えは簡単♪誠が君の食事に薬を混ぜたんだよ！あははははははは」

確かにそう考えると全て当てはまる。じゃあ、本当に誠さんが？・
 ・・・・そんな・・・人の信頼を・・よくも、よくもヨクモ！！許
 さない許さない許さないユルサナイユルサナイユルサナイユルサナ
 イユルサナイ！！！！！！！！！！いつか絶対に殺してやる！！

「じゃあ、決意が固まったところで『スツ』麻痺薬だ」

「俺を……どうするつもりだ？」

「どうする？　なあに君にはこれからずっとこの研究所で実験動物になるんだ。そして、完全に冷酷な殺人人形として生きてもらうのさ！　では実験を始めようか！　！！！！」

実験が始まった。俺はベツトに鎖や強力なゴムでグルグル巻きにされて拘束されている

この実験は異常だった。自分以外の奴なら絶対に助からないだろうと思う。麻痺薬何て使っても使わなくても一緒だ。まったく意味無い。全身を何者かに食い散らかされるような痛みがどんどん、どん、どん、どんどん大きくなっていった。

「ツ！！！！」

「！！！！」

鈴は叫んだ。

喉が切れそうになるほどに、叫んだ。

だが、本当に自分が叫んだのかどうかは、わからない。

音が聞こえないのだ。

目も見えないのだ。

だからいま、何が起きているかもわからなくて。

しかし、それでも鈴は叫ぶ、叫ぶ、叫ぶ。

無理だと。もう無理だと。こんな痛みは耐えられないと。

死ぬ。

狂う。

このままじゃ異常おかしく――

が、そこで意識が消える。気絶したのだ

そんな状況が五日続いた。

五日目にはもう叫ぶのをやめた。

なにもかもあきらめて死にたかった、だが奴の顔を思い出す。痛みは消えない。



二週間経った。全てが麻痺してしまって痛みをもう感じない。だが、自分の体の中で酷く悪いことが起きているのがわかる。

意識は相変わらず不明瞭だ。

何度も、何十回も、何千回も、もう気が遠くなるほどに気絶してしまい、そして気絶するたびに一瞬、意識を取り戻す。

だが、すぐにその意識は混濁する。

何も感じない。

もう、何も感じない。

なにも――



そして三ヶ月経った。

痛みが無くなっていくのがわかる。

遠くから一人の男が現れた

「・・・しい。素晴らしい！！成功だ！！やはり、私は天才だ！！そして、夜風 鈴！！君は最高だよ！！今までの失敗作とは違う。完全冷酷な殺人人形に君ならなれる！！」

こいつ、勝手に興奮してやがる・・・どんな実験されたんだ？

「おいっ！！俺に何しやがった！！」

「ああ、君には数種類の動物達の血と細胞を体に入れた。うまくいけばその動物の力がそのまま君の力になるんだ！！どうだ、すごいと思わないかい？」

確かに凄いが・・・コイツも殺^{バラ}していいよな？

「これからも定期的に少量ずつ君の体に入れていけば完成だ！！」

さて、では付いて来たまえ。」

チッ今はコイツの言うこと聞くしかない・・・この拘束具と首輪が邪魔なんだよ！！

ご丁寧に鎖まで着けやがって俺は犬じゃねえんだよっ！！

「ああ、忘れていたよ。これも着けるんだったね」

そう言ってコイツが取り出したのは足枷しかも鎖の先に鉄の塊が付いてる。

よくドラマなんかで犯罪者たちが着けている物だ。

「貴様っ！！」

「ふはは、どんなに睨んでも今の君は全く怖くないよ。

君は売られたんだ、誠に。

それを買ったんだ、私が。

飼い主と飼い犬の関係なんだ。

いい加減諦めたまえ」

クソ野郎が！何とか逃げ出すか殺すかしねえとストレスで死にそう
だぜ。

さっきまでの痛みは大分無くなったが気分は最悪だ。

「ああ、そうだ。言い忘れていたよ。逃げようなんて考えない方がいい。

その足枷に付いている鉄の塊は一つ1トンするからね。二つ合わせで2トンだ。

いくら君でもその重りを付けたまま逃げ出すなんて不可能だからね」

奴は鎖を引っ張りながら俺を無理やり立たせる。

足枷が重過ぎんだよ！ 一步進むだけで足が壊れそうになる

ギリッ 思わず唇を深く噛む。口の端から血が出て来たのがわかる。

「さて、此処が君の部屋だ。」

冷たそうな壁、散らかってる床、畳一つ分もあるかわからない程の狭さ……

部屋じゃねえよ。部屋とか言う前に掃除しろよ。つか明らかに牢屋じゃんか

名前 夜風 鈴

性別 男

年齢 5歳（実験中に誕生日が終わった）

職業 モルモット 実験動物兼牢屋の家主

復讐とか殺りたい奴らをバラする為に一生懸命生きていきます。

という訳で、俺が研究所に拉致られて半年が過ぎた。

黒かった髪はストレスやらで真っ白になった。

この半年で俺は「おいおい、冗談はもう少し上手く言えよ」

と言われるくらい強くなりました。

まずは実験。

あれからも、ほぼ毎日少量ずつだが別種の血などを入れ続けられた。

最初程ではないが、やはり痛い。何度死にたいと願ったことか・・・

・
今ではもう実験は終わっているんだが、もう自分が人間じゃないみたいになった。

自分の意志で力を使えるようになった。

嗅覚は犬種を越え

視力は鳥類を越え

何故か頭にネコ耳が生え、語尾に「にゃん」が付き

人間なのに歯が牙に変化し

背中からは真っ赤な六枚の翼が生え

走る速度はチーターを越え

握力はゴリラやチンパンジーを超えたと自負しています。

人間以外の動物たちと話せるようになった。

十指の十爪を自由自在に伸縮出来るようになった。正直、これがあれば『忍法爪合わせ』は必要ない気がする

他にも色々あるが、まあこのぐらいでいいだろう。

なんかあのキチガイに呼ばれた

「今日、最後のテストを始める。闘技場に來たまえ。まあ、その足枷があるからゆっくりくるだがいさ」

・・・・・・おい、なんか言い出したぞこのキチガイ。

こいつ何故か俺が感情を無くしたと思っていろいろらしい。実際は俺がこいつの前では無表情でいるだけなのだが・・・・

それに、別にもう重くないぞ？ 今なら普通に歩くことは可能だ。

移動中。主人公移動中

闘技場についた・・・・・・んだが、

目の前にたっくさんのおつきなお友達・・・・・・どゆこと？（・

ω
 $\cdot$
 $\smile$
 $?$

03話 負の感情と実験& a m p; 結果とおっきなお友達（後書き）

今日はもう無理だな

04話 虐殺と破壊と「自由と平和を取り戻す!!」 (前書き)

俺って才能無いなと思う (泣

04話 虐殺と破壊と「自由と平和を取り戻す!!」

『君には此処にいる屈強な男たち1000人と殺し合いをしてもら
う!! これで君が生き残れば君は本物になれる!! 君は本物の戦闘マシーン
・ドール
人形になるんだ!!』

キチガイがおつきなお友達の後ろからマイク使って宣言している・
・・・・いや、別になれなくていいよ? つかなるきない
し。で、俺はこの屈強な肉体な持ったおっさんを皆殺しにすれば
いいんだな。オウケイ了解。

まあ、殺試合はいいんだけどよ? 何で敵さんやつこはそんなにギラつい
た目で俺を見るのかな? 俺にはその無駄に膨れ上がった筋肉よりも
貴方達の目が怖いです。

ちょっと会話を聞いてみよう。

「(部分強化 耳) ポンッ」

あゝ

ネ コ ミ ミ が 表 れ た !

そうなんだ。何故か耳を部分強化すると自分の耳じゃなくて頭にネ
コミミが表れるんだよ原因は不明でも可愛いからOK。つか俺が気
にいつてる。ネコミミサイコー!!!! 正直、ネコ大好きです。め
っちゃかわええやん!!!! まそれは置いとくか

さて、どんな会話をしてるのかな?

『あの子供を倒したら俺たちの好きにしていいいんだよな!!』

『さあ、お互いの生存権を賭けて、殺死合い始め!!』

キチガイが宣言したと同時に俺の足枷が外れ、男達の群れがこっちに走ってくる。

だが俺は『部分強化・爪』を使い、ネコ科の動物よりも鋭い爪を出す。そして、チーターなんて目じゃない速度で群れに突っ込んで、男達の間をジグザグに擦れ違いながらを殺していく。

さっきまで俺がいた場所に男達が立っている。俺は男たちが固まっていた場所にだ。お互いが走り出したので、場所が入れ替わってしまったのだ。

俺の手と爪は血で真っ赤に染まっていた。男たちはそれを見るや顔色を変え周りをみる。

もちろん周りには俺が首を飛ばしたり、切り裂いたりした奴等がいる。

その死体を確認すると全員が顔色を青くさせ、叫びながら逃げ出した。

そこからは一方的な殺戮が始まった

自分の力をフルに使って確かめるように練習（殺）していくのだ

腕を折り

足を捻じ曲げ

・・・こいつ気づいてないのか？

「さあ、こちらへきた m 「虚刀流『蒲公英』」 ガッ・・・な・・・んでえ、？」

奴の身体を自分の元に引き寄せ、貫手で心臓を貫く。俺の手は爪が伸びた状態で蒲公英使ったから凄く簡単に貫通した。

「やっぱり気づいてなかったんだな。完成作品が出来たのがそんなに嬉しかったのか？大体俺は今、足枷も拘束具もしていないんだぜ？そんな俺にノコノコと近づいて来るなんて馬鹿じゃねえのか「虚刀流『牡丹』」

腰の回転を乗せた、後方回し蹴り。口から大量の血を吐き出しながら男達の死体のそばに飛んでいく。そのままキチガイは動かなくなつた・・・絶命したのだろう。いい気味だ。

そのあと俺は無人の研究施設の中を荒らしまくった。

研究資料やデータを全て破壊し焼き捨てた。俺が実験されていた部屋や器具なんかも全て破壊した。

研究施設の中を蹂躪しまくった。キチガイと気持ちの悪いおっきな

お友達と研究施設に大量の油をまき散らした後に火を着けて、おおよそ9ヶ月ほど住んでいた炎上している施設に別れを告げた。

取り敢えず、川に行こう。返り血だかけで気持ち悪い。

あれから一か月。あの研究所のことはもの凄いニュースになっていた。人が1021人殺されていたとか、あれは人間の犯行じゃないとか、神の裁きだとか正直どうでもいい。

俺はキチガイが昔話していたことを頼りにある街へ来ていた。

「誠はアメリカの〇〇〇に住んでいる」と言っていたので来たのだ
が・・・

・・・確かに、誠さんがいたよ。俺は今その人物を目の前で見
てるからな。でもな、テレビなんだよ、誠がテレビに映ってるんだ
よ。聞いてないぞ、キチガイ野郎。誠の野郎がアメリカの大臣にな
ってるなんて・・・まあ、どうせ殺すんだから関係ないか

その日、俺は近くの服屋で子供用の服をパクツた。季節は冬、子供

用の黒いジーンズと黒いTシャツフード付きを着てる。そのあとネットカフェに行って政府にハッキングして誠の家を調べた。

12月23日クリスマス前日。え？なんで知ってるかだって？町中に飾り付けがしてあるよ。ケーキの注文とかいろいろと広告が張ってあるんだもん。

時刻は深夜1時。じゃあ、殺りにいきますか♪

主人公移動中

「デカッ」流石は金持ち。屋敷に住んでるなんてな・・・でもその金は俺を売ったのが始まりの金。

そう思うとイライラしてくる。ああ、もうすぐこの手で殺せるんだ！！

「ふふっ・・・ばさっ（フードを被る音）さあミッションスタートだ。」

「普通に屋敷の中に入れるって・・・なめられてんのか？」

そんなことを呟き、先へ進む鈴

しかし、そのまま何の障害もなく誠の寢室の前まで着いてしまった。

「・・・・・・・・」頭が痛い。誠はここ数か月でこんなに馬鹿になったのか・・・

カチャツ 扉を開けて中に入ると誠が寝ていた。

パタンツ 扉を閉めて目に進もうとすると――

「カチツ」。いきなり部屋の電気が付いたと同時に部屋の中にあるクローゼットやらベツトの下やら化粧棚の後ろやら天井やらから黒い服を着て武装している男女が表れる。

「!?(12人)・・・・・・・・・・はあ、タヌキ寝入りやめれば?上野大臣」

「ほお。気づいていたか。なら顔を見せろ。貴様が俺を狙っていることはわかっているんだ犯罪者」

・・・・・・・・・・は? 何言ってるんだこいつ?

「ふ、ふふっ、ふふふっあははははははは「何が可笑しい？」確かに、俺は犯罪者だ。だが、それはお前もだろ？知らないわけないだろう？人身売買も立派な犯罪なんだぜ？「何のことだ？」「ふーん、しらばっくれるんだ・・・じゃあ見せてあげるよ俺の顔を！ばさっ（フードを脱いだ音）これで誰かわかるか？」

俺がフードを脱ぐと周りの黒服たちが驚いている

「子供！？」「何故子供が？」「さっきの口ぶりからして大臣の知り合い？」「どういうことだ？」やはり犯罪者の招待が子供だったのが予想外だったのだろう。

「・・・・・・？」

「なんだやっぱりわからないか・・・まあ髪の色が変わってるからな。久しぶりだね、誠さん。夜風　鈴だよ♪覚えてるぅ？」

「！？」　鈴だと！？」

昔の黒い髪は疲れからくるストレスで真っ白になったからわかんないよな

「大臣、お知り合いですか？」近くにいた黒服が話を聞く。

「・・・昔、俺がまだ傭兵をしていたときに拾って育てていた子供だ。1歳〜4歳までの間に傭兵見習いとしてめんどろを見てたんだが・・・」その後金に目が眩んだ誠さんは俺がある研究所に売ったんだぜ、と思うよ？しかもその研究所でやっていることは人体実験。俺は約9ヶ月間そこで実験動物として暮らしていたのさ。何度

死にたいと思ったことか・・・あつ因みに俺、現在5歳ね。で、一か月前にその研究施設を破壊して逃げ出した訳」ちよつと待て！では、お前が殺したのか！？あれだけの数の人間を！？」

「そうだよ？それがなにか？」

鈴が軽く言ったことを本当だと悟った。

そして、この部屋にいる全員が思った『（この子は危険だと）』

この部屋にいる黒服と誠は知ってしまった・・・年齢なんて何の意味もないってことを！！現にたった5歳の年端もいらない少年が人を1000人以上も殺せる技術をもっている。

「・・・一応聞く、お前はここに何をしに来た？」

「復讐だよ。人の信頼を簡単に裏切った男への」

鈴が言うのと、誠はすぐさま床に座り頭を下げた。・・・・・・土下座だ。国の大臣が小さな少年に土下座しているのだ。

「・・・すまなかった。許してくれとは言わない・・・・・・だが、命だけは・・・命だけは助けてくれ。」

絞り出すような震えた声で頭を下げたまま命乞いをする。

それに対して鈴は

「イ・ヤ・だ☆キャハッ♪」

その言葉と同時にだった。周りに居た黒服たちが誠を鈴から逃がすように一斉に鈴を倒しにかかった。

鈴はそれを冷静に殺していく。

「うおおおおお!!」

勝てないかもしれないと頭では理解しているのにコンバットナイフで向かってくる二人の黒服。

だが、鈴に懷に入り腹に手を突っ込んで内臓を握り潰す。そして絶命

次に来たのは六人。肉弾戦で挑む為に鈴に向かって走って行く。そんな彼らを鈴は手に付いた血を舐めながら見ている。

『つつ!!』

ただそれだけの仕草なのに背中に冷たくなる感覚……勝てない。全員が思っている。

当の鈴がそんなこと知る訳もなく、一瞬で6人の目の前に移動する。

「虚刀流 『雛罌粟』^{ひなげし}」

避けようとしても鈴がそれを許すはずもなく。下方から上方へ、手首を返しての切り上げの手刀。また死んだ。

「これで8人・・・次はだあれ？」

鈴は口元を吊り上げて笑いながら首だけ動かして後ろを見る。クローゼット（2人）や誠の側（2人）からスナイパーライフルを撃ってくる4人。

さっきから何度も撃っているのに一度も当たらないことに焦っている4人と苦い顔をした誠がいる。

まずはクローゼットの方から。

俺は走りながら1人を『部分強化・牙』で形動脈を噛み千切り、もう一人は『部分強化・爪』で心臓を一突きに。

相手もかわそうとしているが、狭いクローゼットの中で身動きが取れるわけもなく

最後に残った誠の側に居る2人には『部分強化・針』自分の髪を針のように鋭くし、それを2本抜いて、超至近距離で2人の喉に投げると、まったく見えなかったのか行動を起こす前に針に当たり絶命した。

さあ、最後にメインディッシュ（誠）の時間だ。

「あ、ああ、あ・・・ああああ」

誠は涙と鼻水でぐちゃぐちゃになった顔で鈴の顔を見ながら後ずさっていく。

「大丈夫。痛いのは一瞬だけだから。」

そう言うと、誠の頭を掴んだ（ブレーン・クロー）

「脳漿ブチマケロツ！！（グシャツ）」

誠が絶命した。今回の殺した奴らの脳味噌は殲滅眼の体質のおかげでおいしくいただきました。

鈴は死体と屋敷に日を着けた後、港にいた。

さっきから街の方が騒がしい。消防車の音が聞こえるから火に気づいたのだろう。

「はぁ〜これからどうするかな〜」

誠とキチガイ男を殺すことが目的だったから、これからのこと考えてなかったなあ〜

折角、転生したのに・・・ん？あれっ？俺ってなのはの世界に転生したんだよね？・・・原作開始が三年生の9歳だから・・・やっべ日本いかなきゃ！！

裏切られたり実験されたりしたけど強くなったから別にいいんじゃない

ね？とか今頃ポジティブになってしまった

俺、人間ッス。 今から太平洋横断します。もちろん泳いで！！

今日から俺は自由だ！！ 日本に帰っても原作ブレイクはしない！！
・・・多分。俺は平穩という名の平和で普通の生活を送るんだあ
！！俺は普通の人間なんだから！！

この時、鈴は気づいていない。チート能力を貰ったり、実験を受けた人物が普通の人間じゃないってことを

名前 夜凪 鈴 やなぎ れい

性別 男

年齢 5歳

職業 自由気ままな普通の人間（笑）

一言「正直めんどくさ過ぎて死ぬわ・・・」

04話 虐殺と破壊と「自由と平和を取り戻す!!」 (後書き)

この小説は復讐物ではありません

05話 太平洋横断中に友達？が出来ました。

子供と遊ぶのは面倒だ。学校お

取り敢えず、文才のない俺は死ねばいいと思う

05話 太平洋横断中に友達？が出来ました。

子供と遊ぶのは面倒だ。学校お

・・・突然だが俺は今子供と遊んでいる・・・と言っても俺も今は子供なんだけどな。

周りでは同い年や赤ん坊、自分より一つか二つ下の子供たちが遊んでいる。しかも、何故か俺に懐いてる奴等がいる。さて、転生してから結構ハードな人生を歩んできた俺だが言いたいことがある。

・・・どうしてこうなった？

～回想～

俺はアメリカの港を出て日本に行こうとしていた。

確かアメリカから日本までは12,000キロくらい距離があるん

だっけ？ それくらいだった気がする・・・

そしてみんな気づいてるかな？俺が誠を殺した時期を・・・あれはクリスマス前日の23日つまり、翌日の今日は24日。

さて、わかると思うが・・・冬なんだよ今。んで、冬の海・太平洋横断・5歳児。・・・死ぬと思わないか？

なんか昔にあったよね。極寒の海に船が沈んでいく映画。あれタイトルなんだっけ？いや、いいんだけどね、だって寒いのが冷たいに変わって、痛いから温かいにまで変わってしまったからね・・・

まあいいや。現在、クロールで日本を目指してるんだが「多分あっちだな」って感じのめっちゃ適当に進んでるから不安でいっぱい状態です。動物がいれば普通に道を聞けるんだけど・・・

現在、朝、だいたい11時くらいだと思われる。昨日の夜から自分のスタミナフルに使って太平洋泳いでるから徹夜だ。まあ海の上なんだから徹夜もなにもないんだが・・・

で、だ。考えてみれば俺バカなんじゃねえの？と泳ぎ続けながらも真面目に考えた。方角もわからない、食料もない、そして、もし日本に着けても金がない。見事なまでにないない尽くしである。

だが、金はともかく方角がわからないのと食料が無いのは不味い。ひじょ～～に不味い。どうしたものかと考えていると自分の目にとんでもない光景が映った。

何かが跳んでいたのだ。・・・集団だった。複数の何かが跳んでいた。視力を強化しようかと考えたがメンドイからやめた

その集団は何故か俺に近づいているように見える。あれ、なんか嫌な予感がするんですが・・・？

そして、その集団が目を強化しなくても肉眼で見えた。集団じゃなくて3匹だった。数秒間、俺は固まっていたのだろう。もうほとんど近くまで来ていたのだから・・・

・・・俺、死ぬんじゃない？

えっ？ 何馬鹿なこと言ってんだよ冗談はいから先進めや、だって？ いやいや、無理じゃね？ だって海に居るのって基本魚類じゃん？ んで海で跳ねる魚類で一般的に知ってるのってトビウオくらだろ？

だがな、俺の目の前で跳んでいるのはトビウオじゃないんだ。

トビウオだったらまだよかったよ？魚って基本人間を見たら逃げ出すじゃん？　だけど・・・ね？

俺の目の前で跳ねてる3匹はな・・・

シャチなんだよ（泣）

だが、わかったことがある。シャチは基本的に非常に活発な動物だ。

んで、さっきまでののはブリーチング（海面へ自らの体を打ちつけるジャンプ）だったんだ。現在はスパイホッピング（頭部を海面に出し、辺りを見渡すための行動）をして、俺を囲むように（鈴は自分

を逃がさないようにと思っている）して周りを動いている。

（シャチの速さは：確か時速60—70km・・・逃げられる訳ないじゃん！？あれ、シャチって餌を求めて1日に100km以上も移動することがあるんだよね？）

そこで鈴の中である仮設が生まれた。

1. エサを求めて泳いでいた

←

2. そこに太平洋と言う大海原で泳いでる珍しい人間（鈴）

→普通に考えたら唯の馬鹿だ。

←

3. お腹が減った。周りのみんな（シャチ）に相談。「あそこにいる人間パクツと食っていいのかな？ちようどお腹減ってきたし・・・」
「いいんじゃないか？ どうせ人間なんだし」「そうだね。人間だものね」「「そうだそうだ」」「じゃあ、みんなで食べようよ」
「「賛成！！」」「」

←

4. 現在、鈴の逃げ道を無くす為に周りを囲む

←

5. 鈴、逃げられない。

←

6. おいしくいただけました。

←

7. 満足したシャチは次のエサを求めて泳いで行きました。・・・
・鈴がいた場所の海面は赤い色をした何かが浮かんでいた。

←

8. B A D E N D

あれ、また詰んだ？

い、いやいや！まだ希望は有るはずだ！！出来るかどうかは不明だが
けど……神様、頼む！！

……あ、俺無神論者じゃん。しかも神に見離されてる

死ぬわ……

「シャチの皆さんこんにちは」

頼むぞ！！俺のスキルよ！！

「あ、こんにちは」

「いや、何普通に挨拶してんだよ！」

「そうだよ、人間に言葉が通じるわけないじゃん！」

伝わってるーっ！！

「わかる！！ understand！！理解してる！わかるから俺の話を聞いてくれ！俺、お前たちの言葉わかるから！！」

「……本当かよ」

「本当だから！」

「……本当みたいだよ。さっきからめっちゃくちゃ必死に説明してるし」

「おお、わかってくれてありがとう。そして、俺の必死の説明＝命の危機の方式が出来上がる」

「それにしても結構余裕だね。というか僕らの言葉がわかるなんて君何者だい？」

「そう思うなら聞くがいい。俺の今までの人生を――！これを聞けばすべてがわかるぞ」

主人公 説明中

「大変だったんだね…ただ…」

「確かに同情するぜ…だが…」

「辛かったんだね…でも」

「「君（お前）ってバカだ（ね、な）」」

シャチにバカにされる人間って俺くらいだと思う W W W

「アメリカから日本までどれくらいかかると思ってるんだよ」

「しかも方角がわからないって」

「前途多難だね」

「あっはっはっは」

「「「笑ってる場合か！！」」」

ツツコミ入れるシャチも希少だと思うの W W

「いや、でもマジ死ぬわ・俺も結構がんばったと思ったのにいつまでたっても島が見えてこないんだから」

「「……………」」

この時シャチたちは思った。当たり前だが！！と、もう馬鹿を通り過ぎて呆れて何も言えない。

ズーンと落ち込む鈴。ところで説明を忘れていたが鈴は立ち泳ぎでシャチはスパイホッピングをしながら話なしている。

「「……………」ヒソヒソ」」

「おい」

「んあ？どした？」

「僕たちが日本まで送ってあげるよ」

「そーゆーこった。俺に掴まれ」

「早く行こうよー！！」

・・・・・・。D。ポカーン

「・・・・・・ハッ・・・・・・え、マジで? いいの! ?」

「いいから、早く掴まれよ」

君たちが神様に見えるよ。神なんて基本クソツタレだからな。どうでもいいがグレゴリー神父うざいよな・・・

「よし掴まったぞ」

「じゃあ、行くぞ?」

「遅いよ!! 速くしなよ!! レッツゴー!!!!」

こうして、俺とシャチたちの日本までの短い旅が始まったのである。
ん? 何で短いのかって? それはこのシャチに聞いてくれ・・・スピ
ードが以上なんだよ。普通極寒の海から上がりたての5歳児を突風
にブチ当てるとか何考えてるんだらうね?

途中からはもう突風と寒さにもなれて3匹の背中で遊んでいます。普通極寒の海から上がりたての5歳児を突風にブチ当てるとか何考えてるんだらうね？・・・寒すぎて頭が痛くなってきた（泣）

途中からはもう突風と寒さにもなれて3匹の背中で遊んでいます。3匹が横に並んで進んでるから背中を走りまわったり、アクロバティックな遊びをしたりといういろいろやったなあ・・・

3匹は言いました。「[「そんなことをした人間はお前（君が）初めてだ（よ）」」」

だろうな、もしも俺の前に誰かが同じことやってたら絶対に引くね。確信出来る

港の人の気配がない場所でお別れをする。

「うん。気を付けてね？　あまり無茶したらダメだよ？」

「まあ、いろいろとがんばれ」

「僕は貴方が本当に人間なのか確かめてみたいです」

確かに、シャチに泳いで勝ち、水中で魚たちと話せるような奴を人

間と言えるだろうか？　ありえない、の一言に尽きる。

「失敬な！俺はちゃんとした人間だ！！」

この男は自覚すらしていないようだが・・・

「まあ、お前たちも帰る時気い付けろよ？　じゃ、元気でなあ！！」

俺はあいさつを済ませ、手を振る。3匹はスパイホッピングをしてこっちを見ながら泳いで行く。そのまま肉眼で見えなくなるまで手を振り続けた。

左腕が凄く痛い・・・WWW



・ シャチ3匹と別れ、これからは平和に過ごそうと決めていた鈴は・・・

「腹、減った・・・」

死にそうだった。

もしかしたら、明日の朝刊で5歳の少年が道で倒れて死んでいた。なんて記事があるかもしれない。しかも死因は空腹です（笑）みたいな

ドサッ

鈴は近くに見つけた公園の芝生の上でぶっ倒れた。

シャチたちに日本に連れて来てもらったのはよかった・・・が！！着いてから考えたんだ。太平洋を泳いでいた時に金がないのはわかっていた。まあそれだけなら諦めがつくんだが・・・この男、計画性がまったくないのだ。金がないだけではなく、住む場所もない、これからの生活も不明・・・というかよく捕まらなかったな、よくよく考えてみたらこの男は密告者になるのだ

この男マジでアホだ

鈴は少し口をパクパクさせ

その後、鈴は空腹と長距離水泳による疲れなどで意識はブラックアウトした。

「こ・う・か・い・は・し・て・い・な・い」

本物の馬鹿だった



目が覚めると知らない天井だった。周りというか部屋全体から声が聞こえる

布団に入っているあたり寝ていたのだろう。だが、体が重く、頭上あたりがすごく臭い。

何だ？と思い頭上を見る……赤ちゃんが糞を漏らしていた。それを知るや体をマッハで起こす鈴

周りを見てみるとたくさんの子供たちが部屋の中で遊んでいた。

彼らは突然跳ね起きた鈴を見て驚いている。

鈴にとっては今そんな些細なことはどうでもよかった。「(此処はどこで何で此処にいて何故起きたに瞬間赤ん坊の糞の生産現場にいるのがわからん!!)」

頭の中でいろいろ考えてもわかるはずもなく頭を抱えて床の上を転がる鈴。

そこに「あ、起きたんだね。大丈夫？」なんか女の人を表れた。

取り敢えず何故ここにいるのかを聞いた結果

公園で俺が倒れていた↓此処は孤児院と幼稚園が合併している↓そうだ、孤児院に連れて行こう↓そして2日が立ちました↓俺、復活↑今ここ

「なるほど、納得。取り敢えず自己紹介をしてやらんこともない」

「なんでそんなに上から目線なのかわからないけど自己紹介はしてくれる？でもその前に私はこの海鳴院あきみやで働いてる秋宮あけみ 朱美です。子供たちからはあきみや先生とかあけみ先生って呼ばれてます」

仕方がない

「夜風 鈴。鈴って書いてレイと読む。現在5歳。誕生日は4月21日。親はいない生まれてすぐ捨てられた、んで幼稚園とかにも行っていない。職業ニート兼人生の冒険家」

これでいいか？とアッキーに聞く。アッキーって先生のことな

「・・・・・・・・えーと、言いたいことはたくさんあるけど・・・・・・・・ほんとに5歳？「YES」で、親に捨てられた「YES」幼稚園というか勉強をしたことがない「YES」、つうか自分以外の同年代に会うのは初めてだ・・・・・・・・」職業は・・・・・・・・で、あなた行く宛てあるの？「スルーかよ、まあいいけど。いや、行く宛てがあつたらあんなところでぶっ倒れてるわけないじゃん」まあ、確かに・・・・・・・・ちよっと待っててくれる？「ん？なんか知らんが取り敢えず了解」

そう言い残して俺を置いて部屋を出ていくアッキー

・・・・・・・・この状況をなんとかしてくれ、部屋にいるおそろく4歳くらい5歳の子供たちだろう。新しいオモチャを見つけたようなキラキラした目で俺を見てくるのだ・・・・・・・・

仕方なく子ども達と遊んであげることにした

どうしてこうなった？

回想終了

俺は周りから逃げるように部屋の隅に移動して、隅にある本棚をあさると・・・何で子供の：しかも低年齢の子供の遊び場にチェスの本があるんだよ

此処（海鳴院）はおかしい。

おそらく園長がバカなんだな、普通の幼稚園にチェスの本なんて絶対に置いてないし・・・とかなんとか言いながら自分はそのを読むのだが・・・

本人曰く「これ（チェスの本）以上にレベルの高い本がない」らしい
暫く本を読んでいると「夜風くん、ちょっと来てくれない？」ア
ツキーが帰って来た。

鈴はチェスの本を片手に部屋を出てアツキーに付いて行く

少し歩くとある部屋の前で止まった。平仮名で大きく「えんちようしつ」と書いてある。

その後、部屋の中で園長（44歳）と話した結果、此処に住みなさ

いといわれた

正直、住む場所がないから丁度良いのでお言葉に甘えることにした。

それから色々質問されたが適当にはぐらかしながら答えた

で、何故かチェスをする事になり勝ったらコーヒー買ってくれるって約束してくれたのでさっき覚えたばかりの知識を総動員して勝利を勝ち取った

それから結構頻繁に園長とチェスするのが日課になったのは後日談だ



園長とチェスをしてから二週間くらいたったころだった。園長が呼んでるとアッキーが教えてくれたので園長室に行くと

小学校はどうするのか？と聞かれた。逆に此処って小学校行けるのか？と聞くと

なんでもこの孤児院を建てたのは金持ちのおっさんらしい。んで、この孤児院の子ども達の学費などはそのおっさんが出しているらし

い。……おっさんどんな仕事やってんだ？

んで、学校を選べってことでパンフレットを沢山渡してきた

仕方なく30分かけて学校を選んだ。選んでる途中で一枚のパンフを見て数秒間固まってしまった。それを選べば俺の人生の選択肢が限られてしまう

取り敢えず選んだパンフを一枚園長に渡した。そしたらアッキーが質問してきた

うん？何処の小学校行くのかって？近場の1番頭の悪い学校だが？

何でよりによってそんな所を選んだのか？もっと頭のいいところに行かないのかだって？

んなもん、めんどくせえからに決まってるだろうが。

そんな駄目な奴を見る目でこっち見るな！

だが、ちゃんとした理由もあつたんだぞ？さっき言ったよな？一枚のパンフを見て数秒間固まってしまったって

私立聖祥大附属小学校。

パンフレットの一枚にこれがあったんだぜ？絶対嫌だ。こんな場所に行くなんてわざわざ原作に巻き込まれに行くようなもんじゃないか！

俺は平穏に暮らしたいんだよ！

そう言い残して園長室を出た

そして俺は3カ月後に俺は凄く後悔する事になる

05話 太平洋横断中に友達？が出来ました。

子供と遊ぶのは面倒だ。学校お

主人公のキャラがめっちゃくちゃすぎるのWWW

06話 人の夢と書いて儚いと読む!!

(タイトルと全く関係なくね!?)

今回は短いです。

速く原作に行きたい (笑)

06話 人の夢と書いて儚いと読む!!

(タイトルと全く関係なくね!?)

学校を選んでから一週間くらいたった

周りは子供らしく外で走り回ったり、大人しく本を読んでいる。

そんななか俺は部屋の隅に小さな机を立てて紙にあるものを書いていた。

その紙を6日間程でだいたい数百枚近く書いた辺りで大きな封筒(園長室でパクった)に入れてある住所を書いた。

その後、海鳴園を抜け出してポストイン。

ふぁゝ……珍しくで作業したせいで睡眠不足で死にそうだ……

さっさと戻って寝るか……

それは二週間後のことだった。小学校入学まで後2ヶ月を切った頃だ
海鳴園に一台の大きな車が来たのが始まりだった。

出て来たのは一人の女性。多分30代前半あたりだろう。現在、園
長と話してる。

……まあ俺には関係ないだろうと部屋に戻ろうとした時

「鈴君、君も来たまえ」

園長に止められた。

何故に？俺、基本いい子にしてるから怒られることしてないよね？

「森さんが話があるそうだよ」

森さんって誰スか？

「初めまして、私は森 藍^{あい}といいます。よろしくね、鈴君」

「あー……初めまして、夜風 鈴です」

形だけの挨拶をする

「早速だけど本題に入ってもいいかな？」

こちらとしてもその方が有り難いので頷く。

そこで、園長はわかるが、何でアッキーがいる？あんたいる意味ないだろ

若干涙目になるアッキー……知らね

「実は先日、私が勤めてる会社にある封筒が届きました。」

園長「封筒ですか？」

「ええ、中身を見るとおよそ300枚近くのA4の紙いっぱいに字が書かれていました。」

それは小説らしく、幸い字は綺麗に書かれていたので、私たちはその紙を読んでみました。

その内容はファンタジーな内容で漫画に近いものなのですが、凄い

才能を持っているのでどんな人が書いたのかと思い調べてみたら・
・」

・・・・あゝ、もしかしてあの時に書いた紙か・・・嫌な予感しかしないの巻

「5歳の少年でした」

その言葉を聞いて園長とアッキーが一斉に俺の顔を見る。

予感的中。一人暮らしたい（泣）ずっと引きこもってたい・・・

「えっともしかしてこの子が書いたんですか？」とアッキーが聞く

「封筒の裏に住所と一緒に夜風鈴と書いてありました。」と答える
藍さん

その後、愛さんは自分がある漫画会社の編集長だと名乗った。そんなで前回送った物はライトノベルとして出すそうだ。俺はへーと他人事のように考えていたのだがいきなり「小説書いてみない？あの続きが見たいという人が会社でも結構いる」と言われたので条件付きで言ったら即OKだった。

条件は、

1. 一人暮らしがしたいから見晴らしのいいマンションに住みたい。
2. 海鳴市内で書かせてもらう
3. もうすぐ学校に行くから書くのが遅くなるかもしれない

俺は念願の一人暮らしが出来る為テンションが上がりまくりだ。だってよ、俺の夢がついに実現しようとしてんだぜ？

原作に介入する事もなく、平々凡々で平穏で平和な生活を送る何て最高じゃないか！！

つか、今更なんだが何で海鳴市に来たんだろ、俺………？

原作介入する気ないのに「もうすぐ原作始まるじゃん！！早く行かないとヤバイ！！！」とか介入する気MAXの奴の言うセリフじゃん！？何してんの俺！？

介入したくないならアメリカで大人しく過ごしてれば良かったのに！！！！

「クソッ、こんな不思議出来事が満載の（海鳴）町に関わったら俺が頑張って作った『平凡？だからどうした！！平穏と平和が一番大作戦！！』が無駄になってしまう……」

『平凡？だからどうした！！平穏と平和が一番大作戦！！』とは鈴がこの孤児院に来てすぐに作ったものだ。今まで本当に面倒くさいことがあり、その他いろいろな理由があって考えた自分の人生プランだ。

『目立たず、焦らず、関わらず。常に緩く怠く人生を謳歌しろ』というテーマを持って平々凡々な平穏を望み、平和な人生を送ることを目的とした超ダメ人間的な大作戦。

だが、鈴にとっては矜持、いや自分の信念と言っても過言ではないこのくだらない大作戦。

が、この超不思議出来事が満載の（海鳴）町のせいで既に崩れかかっているのだ。

この作戦が出来て僅か2ヶ月。本当に彼は神から嫌われているようだ……

あれから一数十日経ち

引っ越しは意外と早く決まり、小学校の入学式の2日間だった。

俺は引っ越しに大賛成だが、園長とアッキーは納得していなかった。

仕方ないので孤児院に来てから集めていた園長とアッキーの個人情報
報を晒したら二人共首が千切れるくらい縦に振って、「引っ越し大
賛成!!」と叫んでいた。

アンタら親子だったんだな……しかも二人そろって同性愛者とか：
こんなのバレたら一発で頸が飛ぶぞ

孤児院を出る時は子供たちがみんな揃って見送りに来てくれた。後、
まともだと思ってた給仕のおばちゃんも……

こうして、俺は森編集長と一緒に引っ越し先へと車で向かった。

何でこの人（森）、米軍車に乗ってんの？

06話 人の夢と書いて儚いと読む!!

(タイトルと全く関係なくね!?)

最近がんばってると思うのWW

07話 小学校？いえ、魔窟です。悪魔？いえ、アホッコの登場です。俺？

引越して来たのはとても眺め綺麗なマンション。階は上階だから車やバイクの騒音の真お会いもないだろう。

俺は荷物の整理といってもあまり量はないからすぐに終わり、平和な一日を過ごしていた。夕方に箱が届いたが、学校の制服らしい。まあ入学式の日（明日）の朝に開ければいいと判断し、その日は普通に飯を食べ、普通に寝た。

あゝ、なんて素晴らしいんだろう！！普通に生活・・・最高だった！！！！！！

翌日はぐっすり眠れて、大変目覚めの良い良い一日になるだろう。

・・・・・・・・・・と思ってました。

一人暮らしを始めてから二日目。

今日は小学校の入学式なんだ。

そして、現在の俺の服装を教えてやろう。

黒い長ズボンに、白いカッターシャツ、赤いネクタイ、その上から着る白いブレザー・・・俺さ、よくよく考えたんだ。俺が選んだ学校って制服なかったよな？と・・・

それで取り敢えず制服を着てみたんだが、・・・これと似たような制服の学校をパンフで見たような気がするんだよ・・・そう、

私立聖祥大附属小学校の制服だ

それからの俺の行動は早かった。何で学校が変わったのか問い詰めないで、俺の平穩が！！まず、アッキーに連絡・・・知らないだろ？チツ、使えない！次っ園長！・・・もしもし・・・ふむふむ・・・・ブチツ・・・お前の個人情報全部ばらす！！あ”あ？やめろ・・・だど？お前のことなんか知ったことか！！ガチャツ

読者諸君。理由がわかったぞ。あのクソ爺（園長）が俺はもつといい学校に行くべきだ！！とか電話の向こうでほざいてた。んで、勝手に学校変更してやがった！！

取り敢えず、携帯（森さんに買ってもらった）で掲示板に園長の個人情報報ばらしてやった。

それから仕方なしに小学校に行き、入学式に出た。

学校が終わり、俺は速攻で帰ろうとしていた。

何故なら原作メンバーの【白い悪魔】 【金色の暴君】 【薬物兵器】の三人と同じクラスだからだ。

確か、最初の頃は三人仲良しとかじゃなかったはずだが、俺の命の危機が近づいているのがわかる。

と、いうわけで廊下を走っていると放送で校長に呼ばれた。

俺、何かしたの？



現在、俺は家に帰ってソファ―に座って今日貰った教科書を瞬間記憶能力を使って丸暗記していた。

その後、校長との会話を思い出していた。

何かあの小学校の校長が孤児院を建てたおじちゃんらしい。まあ、どうでもいいが、こっちも用があったのでそれを言うとかOKしてくれた。

1・俺だけ授業を受けても受けなくてもいいように参加自由にしてくれ。

2・俺がしてることに文句を言わせないでくれ。

と頼んだ。理由は小学生が習う事なんて全部わかると適当なことを言っておいた。

校長はかなり悩んだがたまに将棋の相手をしてくるなら。と許可さ

れた。

それでいいのか校長……

と思っただら全部暗記が終わったので寝ることにした。

プライベートは平和でいいな♪



「此処は………」

周りを見ると真っ赤な炎に囲まれた場所に来ていた

「……ああ此処か」

「ってことは……やっぱり」

「初めましてユミの姉のミュっていいます。よろしく!」

「あっ、はい。よろしく。……ユミ?……あ

あ痛い子検定第1級保持者のことか」

「あ、あはは（ドンマイ、ユミ！！）」

「んで、あれの姉がいったい何のようだ？」

「うん。要件だけどね・・・あなたチート過ぎると思わない？」

「・・・は？」

「いや、自分で考えてみてなさいよ。ユミがあげたチートがあるのに実験のおかげで部分強化とか出来るようになってるし・・・チートにも程があるでしょ！！」

「ふむ・・・（確かなな）」

「だから、何個か能力を返してもらおうと思うの」

「んゝ（別に問題ないし、いいか）了解ゝ」

「じゃあ・・・まずわ『妖力魔力気力』を返してもらおうわね、この能力って『リンカーコアEX』とかぶってるし、そして『大嘘憑き（オールフィクション）』の使用回数を五回にして、『七花の経験』をなくして・・・それでいい？」

「いいんじゃないか？（別になんでもいいし）」

「・・・ねえ、前世の記憶返して欲しい？「んゝ欲しい」じゃあ、返してあげようか？「返してくれるなら」じゃあ、あげるね「っ、・

・！？がああああああ——・・・」だ、大丈夫？「・・・問題ない」・・・辛くないの？記憶が戻ったってことは前世で受けた虐待の記憶もあったでしょう？「んゝ今の世界が楽しいからかな、あまり意識してないし、復讐はしたからどうでもいいし」・・・へえゝ割り切ってるんだ「まあな」うん。あんた、面白いわね！！」

わかったから背中をバンバン叩くのをやめてくれ。

ん？

「おいこら、アホ悪魔」

「ア、アホ！？」

「そろそろ時間みたいだぞ」

「あっほんとだ・・・またお話しましょ？」

「それはコミュニケーションか肉体言語の間違いじゃないか？」

「違うわよ！！」 凄い剣幕で怒られたWW

「あと、作者からの伝言だ。」

「何、平然とメタ発言してんのよ・・・で、なんて？」

「んんっ『お前たち姉妹の出番は今日で最後です。痛い子とアホっ子で仲良くな。それでは、ありがとうございました。』・・・じゃあな、さいなら！！」

急いでこの場を離れなきゃいけない気がして俺はログアウトした。

「作者のクソッたれがああああああああああああああああ
！！！！」

アホっ子の絶叫が響いたそうだ



08話 スキルと魔窟と3悪女とかその他いろいろ（前書き）

めっちゃ駄文だと思う。

我慢できる人だけでいいので見て下さい。

08話 スキルと魔窟と3悪女とかその他いろいろ

夢の中でアホっ子悪魔に会ってから月日は流れ、俺は小学三年生になっただ。

秘技 キンクリ（キリッ B Y 作者

この二年間で俺の知らないうちに人気作家になってたり（適当に書いたドロッドロの恋愛小説がバカ売れした。さらに俺の売上が凄いいことになっていた（笑））

自分の能力の確認をしたりしていた。あ、後いい加減レアスキルを考えるべきだと思い創ったよレアスキル。

オーグター
『全喰者』

喰らった物を力に変換し、喰えば回復も可能。喰えば喰うほど強くなる能力

例えば、フェアリーテイルの『滅竜魔法』ように食べれば回復もするし、口からブレスも出せるし、身体を武器にすることも可能。

皆さん。理解してると思いますが主人公はチートなんです。
わかってる

そして作者はバカなんです。無理やりの能力ですいません。

いつも部分強化しかしてなかったから身体の中の細胞を一気に解放してみただけだね

めっちゃすごい事になったww

もうあれだよ？チートもらわなくても最強かも！と思ったもんね。

まあ、それはまた今度と言うので、またね。

それと今頃だが、言っておくぞ？ 実はなもう原作が始まってたらしい。今朝のニュースで咲夜に近所の病院近くで車の事故か何かがあったとのこと。な？原作始まってるだろ？アニメで見た説明のまんまなんだよ。

今朝は少し早めに家を出て、アニメの場面である神社に認識不能のビデオカメラを設置した。俺が魔改造したビデオカメラはなのはが来ると電源が入るように設定してある。回収するのが楽しみだ！！

そして、俺は今日もまた学校と言う名の魔窟へ登校中だ。

何故かあの三人とは三年間ずっと一緒のクラスだった。だが、一度も話したことがない。何故なら俺の授業はサボるか寝るかの二択しかないからだ（鈴に限る）。

まあ、俺はみんなが授業受けてる間に図書室で瞬間記憶能力を駆使して読書していたり（能力を使ったら一週間で全部読破した）、校長と賭将棋したり、屋上で爆睡してたりしている。

とかなんとか説明してるうちに魔窟（学校）に着いた。

全体的に真っ白な校舎の筈なのに俺にはハッキリと真っ黒な幽々としたオーラが見える……俺の目はおかしくない。毎回思う、早く帰りたい。プライベートな空間で毎日をenjoyしたい

キンコンカーンコン

予鈴なったし、とりま教室までダッシュ。ホームルーム開始。基本的に俺はホームルームやテストには出ている。だって出なきゃ先生泣くんだぜ？小学三年生に泣かされる教師ってどうなんだよ……

もちろん、授業はサボる。

キンコーンカーンコーン

俺が屋上のベンチで寝ているとチャイムがなった。

「ああ、授業終わったんだな……ってことは昼休みか」

その後、校長室に無断進入して缶コーヒー拝借。無断進入って言うのも校長いたよ？寝てたけど（笑）

って訳でコーヒー片手に屋上へ戻る。

途中で教師にあってテストのプリントを返された。

別に要らないんだが……早く屋上行こ

屋上に戻ってベンチに寝転がる。「ガチャツ」……誰か来たのか？
ったく誰……だ……よ

・・・・神。お前はとことん俺が嫌いらしいな。俺の平穩を乱しただけでは事足りず、平和すらも無くしたいんだな・・・・なんで・・・・なんでだよ：：俺はただ：ただ平和に過ごしたいだけなのに：：平々凡々な毎日を望んだだけなのに：：

なのに：

な・ん・で！！

此処（屋上）^{オフシス}に

3大悪女『悪魔・暴君・薬姫』^{やっき}が来るんだよ！?!?!?!?

説明しよう。3大悪女とは、小学1年生の時に鈴が考えた小学生メンバーだ。未来で管理局の白い悪魔と呼ばれるようになる高町なのは。小学1年生ときから既に片鱗を現していた金色の暴君ことアリス・バニングス。偶々出た理科の実験で超笑顔で口を吊り上げながら笑って薬を混ぜてた薬物姫・省略して薬姫こと月村　すずか。

この3大悪女から話しかけられたり、接触なんてした次の日には原作介入してもおかしくない！と鈴が一方的に思っているメンバーだ。自分の平穏な生活が一瞬で灰になるとわかっているからこそ入学してから3年間今まで一度だって口を聴いたことがないのだ

俺は反射的に起きてしまった。ガバツと。だが、奴らの方へは向かない：だって怖い

しかも隣のベンチだし……（距離は1meterだけ離れている）

俺のことは気にしないでキヤイキヤイ話しながら昼食中だ。

そして俺はコーヒー缶を開け、遠い目をして（自覚なし）空を見上げ

視線を感じるが気にしない。

コーヒーを一口飲み、今の心境を呟いた。

「はぁ〜：：：地球、滅びねーかな〜」

膝に肘を立てて、大きなため息の後、割と本気で呟いた。

別に俺は生きようが死のうがどうでもいいし：：：生に対する執着心もないし：：：

なのは Side

お昼ご飯の前の最後の授業で昨日のテストが返されたの。

「アリサちゃん、97点!？」

「うわゝ、多分学年一番だね？」

「ふふん、当然よ!」

パンパン 先生が手を叩く

「はいはい。みんな、席に付きなさい。テストが返ってきたのが嬉しいのはわかるけどね」

先生がそう言うともみんなが席に着く。

「まずは、さすがアリサさん。高得点おめでとうございませう。みんな、拍手！！」

先生がアリサちゃんを誉める。そして、みんな拍手する。もちろん私やすすかちゃんも

「がんばりましたね。クラスで2位ですよ、これから頑張ってくださいね！！」

……………2位？…ええ、2位！？

キンコーンカーンコーン

そのとき授業が終わったの。アリサちゃんは先生に誰が一番なのか

聞きに行っただけど直ぐに戻ってきた。結局わからなかったみたい

そして、いつも通り屋上にアリサちゃんとすずかちゃんと一緒に行った。

屋上に着くと先客がいたの。いつも食べているベンチの隣のベンチで寝転んでたの。

でも私たちがベンチに座った瞬間、隣のベンチから物凄い勢いで寝転んでいた人物が起き上がって

私たちが見てる方向とは別の方……正面の空を見上げていた。
白髪の小学生って珍しいの

なのは達 N

鈴 R

N ↓ R →

※矢印は顔の向いてる方向です

私だけじゃなくて、アリサちゃんとすずかちゃんも今の行動に驚いている。

スッゴく速かったの……

それから、アリサちゃんがテストの一番は誰なのかと話していると

「あの子、同じクラスの夜風鈴君だよ」

すずあちゃんが思い出した様に言う。

「あの超問題児があれ？」

と、アリサちゃんと。

「うん。それにあの髪の色珍しいからね」

確かに白髪の小学生なんて珍しいね。

夜風 鈴。なんでもめんどくさいことは絶対に誰が何と言おうがやらない男の子。たとえ教師であっても何故か手を出さない。私たちの担任の先生はテストとホームルームにさえ出てくれれば問題ないと言ってるが、言ってる時はいつも若干涙目だ。クラスでも彼は学校に来てないと思われてることが多い。

「えっ!!」

すずかちゃんが隣のベンチに座ってる夜風君を見ながら驚いてたの私とアリサちゃんも続いてそちらを見ると

夜風君が缶コーヒーを飲んだの……しかもBOSSのBLACK
……苦くないのかな？と3人が同じことを思っていたその時

「はぁ………地球滅びねえかな……」

「「………」」

夜風君、凄く物騒なこと言い出したの。

その言葉に三人揃って絶句しちゃった

キンコーンカーンコーン

昼休みの終了のチャイムがなり。

さっきの事は三人共気にしないことにしたの。でも、みんな苦笑してた

放課後になって、一人は塾と言っていたので校門前で別れた。

「アリサちゃん、すずちゃん、またね!!」

「またね、なのはちゃん!!」

「バイバイ、なのは!! 終わったらメールするわ!!」

私は笑顔で2人に手を振って、走って帰った。

早くジュエルシード探さなきゃ

なのは Side Out



空も茜色に染まり、学校が終わった後、これからどうするかを考えていた。だって家に帰っても暇だし。んで、現在一人で公園の入り口に座っている。

ん？

「

」

誰かが来るようだが、どうでもいいので無視・・・したかったんだ

けど、おいでなさったのは我らが3大悪女の二名。金色の暴君と薬姫^{つぎ}でした。

隠れようにも隠れる場所がない仕方ないのでこのまま此処にしよう。どうせ通り過ぎるだろ。

と、思っていた数秒前の自分を原型が変わるまで殴りまくって殺してやりたい。

「でね、うちの犬ったら——あ」

「ん?——あ」

なんで俺の真ん前で止まるの? ああ、これが虐めか。主に神から俺に対する……ざっけんなっ!!

「ねえ」

何故か暴君が俺に声をかけてくる。ちょっと待て、今まで一度も話さないで一生懸命原作に入らない為だけに過ごしてきた3年間は……いったいなんだっただ!!

「ねえ、ちょっと、話し聞いている?」

速く立ち去ってくれ!! 何か嫌な予感がするんだよ!!

「この!! いいかg「あっ見つけた。おい、すずかー」。アリサ

ちゃん！」「あっ忍さん」

「あ、お姉ちゃん」

このツンデレ凶暴君ゴリラ女王たちが来た方向と反対の方（20mくらい）から一人の女の人が歩いてくる。

だが、俺は見た。その後ろからもうスピードで走ってくる黒い車を。その車は女の人を追い越して、俺たちの目の前で止まる。中から黒いスーツ、とサングラスをかけた男達が2人出てくる。・・・な？嫌な予感当たっただろ？

「「キヤーーーー！！」」

暴君と葉姫は悲鳴を上げた。俺？もう、メンドイからなんでもいいよ・・・

とかなんとか考えている間に3人（暴君・葉姫・俺）は車に連れ込まれた。

後ろから女の人が車を追いかけてくるが、あんたアホだろ。ただの人間が車に追いつける筈ないじゃん。俺ならともかくあんたじゃ無理だっての

まるで自分は人間じゃないと言うセリフを平然と言うこの男。だが、コイツはいまだに自分が普通の人間だと思っている。褒めて上げなくなるような素晴らしい（馬鹿な）頭脳を持っている。



車の中。攫われた子供たち。

「おお！！これが普通の車の中なんだな！！初めて乗ったぜ！！意外と快適なんだな」

前世では車に一度も乗ったことがなく、この世では森編集長の持つてる米軍車にしか乗ったことがない鈴は、普通の車に乗れたことを凄く喜んでいた。

「「「「・・・・・・」」」」

そんな鈴に呆気を取られる誘拐犯3名& a m p; 被害者2名

「なあ、おっさんたち！！何か飲み物ない？俺、学校の昼休みから何にも飲んでないんだよ！！」

さらなる言葉にすずかは内心感心していた。

（夜風君って・・・何かが凄い！！）

何かってなんだよ・・・

「うるせーぞ！！ガキは黙ってろ！！」

そんな鈴にキレる誘拐犯A。当然の反応である。

「・・・・・・・・・・」↑鈴

「チツ、ビビツて黙りやがったか。初めから大人しくしてろ」

そういつて前の席へ戻って行く。鈴とアリサ、すずかは3人が密着にし座っている体制だ。だから、鈴の呟きが聞こえた。

「平和が一番、平穏が大事。俺の人生の計画を散々乱しやがって・
・あの害虫共（誘拐犯たち）のせいで俺は貴重な時間を奪われたんだ！！八つ当たりして・・半殺し・・いや、死なんて生ぬるい！！あのクソツタレ（誘拐犯たち）を快楽（苦痛）の世界へ案内してやる・・！！！！！」

そんな呟きを真横で聞いている2人は

「・・・・・・・・すずか、誘拐犯よりあいつの方が怖いんだけど・・・・」

「うん。私もだよ・・・・」

アリサとすずかは思った。

こいつ本当にただの小学生か？



10分後

倉庫に誘拐された三人は鉄筋に縄で手を固定され、口には騒げないように猿ぐつわをされていた。

「へへへ、これで遊んで暮らせるぜ」

「結構、楽勝でしたね！・・・でもこのガキは？」

人差し指を鈴に向ける

「ああ、そいつはついでだ。その二人と一緒に居たからな」

「（ほお、俺はついででこんなめんどくさいめにあってるのか・・・ざっけんな！！コイツ等、顔面の原型変えてやる！！）」

アリサとすずかなんてどうでもいい。自分が誘拐というめんどくさいめにあってることがついでだという誘拐犯たちに怒りまくりの鈴。

誘拐犯の2人が誘拐出来たことを喜んでいた。誘拐犯は全部で3人。今の状況を理解した鈴の行動は凄かった。

縄を一瞬で切り裂いて、アリサとすずかに首刀を入れ気絶させる。

鈴の行動に驚いた誘拐犯たち3人は同時に懷に手を入れ、黒光りする物を取り出す。そう、拳銃だ。

だが、そんなものは鈴には関係なく・・・

「虚刀流『木蓮』」

相手に銃を構えさせる前に一人目の鼻っ柱に本気で飛び膝蹴りを喰らわせた。痛みで悶絶しているが、もって数秒だろう。時期に絶命を迎えるだろう・・・が、鈴はそこ男の腹に手をつ込み内臓を引っ張り出した。言うまでもなく死亡だ。

残りの二人は鈴の早すぎる動きについていけず啞然としていたが、仲間が殺されたことを知り一人は顔を青くさせながら銃を鈴に向ける。もう一人の男は拳銃片手に仲間を見捨てて逃げ出した。

「お、おい！！俺を置いて行くなっ！！」

状況が圧倒的に悪いと感じたのだろう。そう叫んだ男もそれ（逃げた男）に続き逃げ出した。

だが、鈴がそいつらを逃がす訳もなく

「逃がすかよ！！俺の平穏がお前等にせいで崩れ去ったんだ！！その分の報復を受けてもらうぞ！！・・・ん？」

そう言って鈴が見つけたのは先程殺した男の持っていた拳銃。

ニヤツ 楽しそうな顔で拳銃を拾い。逃げた誘拐犯2人を見る。まだまだ、やっと倉庫の入り口を走り過ぎたところだった。

例も2人を追いかけて走り出した。2人より圧倒的に鈴の方が早く、後10秒もしないうちに追い付くだろう。

それを確認して、鈴は走りながら拳銃を

バキベキバリガジガジ・・・・・・・・ゴクン

喰べた。

「（よしっ成功だ！！）」

鈴は指でピストルの形を作り、前に走っている1人の男の足を狙って

「バンッ♪」

撃った

「ぐあああああああ！！痛えよッ！痛えよお！！」

鈴の右手の人差し指の先が銃口になっている。

おそらく、ここから撃ったのだろう。

「（やっぱり・・・このスキルは凄いい！！喰らえば喰らうほど強くなる！！）」

一旦その男を無視して、その先を走ってる男に一瞬で詰め寄る。男

はヒツと情けない声を出し、鈴の顔を見ると顔を紫にかえ震えだした。

「あ、あああ……あああ。た、たす……たすけて、くれッ
ッ！」

今の鈴は狂ったような笑顔で震えて尻餅について命乞いする男を見下ろしている。

「安心していいよ。痛いのは一瞬だけだから。虚刀流『梅』」

その場で身体を一回転させての回し蹴り。ちょうどよく首に当たりそのまま崩れ落ちる……。死んだな。その男から銃弾だけを奪い喰らう

さて、最後は……

鈴はいまだに足の痛みに悶絶している男に近づいて行った。

「……はあ、もうめんどいからさっさと死んでくれ。」

バンッ

「さよなら」

脳天に一発。即死だ。もちろんだが、銃弾は貫っておく。そして喰らう

バクッ

「おっ、やっぱり自分の意志で戻るんだな、この拳銃」

命じれば元の手に戻るし、拳銃にもなる。便利だ。

鈴は空を見上げる。

空は真っ黒に染まり、月が出ている。倉庫の中と外に絶命した3つの死体。その死体を中心に血溜まりが出来、あたり一面が血の海だ。

「……………あ、ビデオカメラ……………早く帰ろ。」

鈴は絶命した死体をほっといて、近くの水道で血塗れになった手を洗う。制服にも返り血がついているが、仕方ないのでほっとく。洗い終えた後、まだ気絶してる2人（アリサ、すずか）を両脇に抱えて走り出す。

「（この場所ならゆっくり行っても15分で帰れるか…………）」

わかってるよ……………これが、原作フラグだって（泣）……………でも、あの場に2人置いて行って、俺がいなかったらバレるじゃん？仕方ないじゃんか！！あゝやってらんねえ

15分後

鈴はすずかの家の玄関前に居た。

時刻は23時30分過ぎ

ピンポーン

『・・・・・・・・はい、どちらさまでしょうか?』

すずかの家のチャイムを押すと、中から警戒した声が聞こえる。数人で聞いているのか

だが、なんでだ?・・・・ああ、誘拐犯だと思われてのか?

「あー、えっと、月村 すずかと同じクラスのものですが・・・・えっと、すずかさんお届けに上がりました。・・・・後ついでにアリサ・バニングスも」

『・・・・・・・・・・・・・・・・・・は!?!?』

・・・・・・・・数十秒はただだろうか?まだ出てこないんだけど・・・・

ガチャツ

「すずか!?!」「忍!?!?家を出るな、危険だ!?!」「忍お嬢様、お戻り下さい!?!」

あ、姉だ。確か忍さん。てか何で恭也さんもいるの?俺あの人苦手なんだけど・・・・。で、あのメイドさんはノエルさんだったよな・・・・まあいいか

つか、目の前にすずかを抱えた俺がいるだろ・・・・早く受け取って

くれ

「あの・・・はい、早くこの2人を受け取ってほしいんですけど・・・もう疲れたから早く帰って寝たいんですね・・・」

何驚いてんだよ、さっき同級生っていたじゃん。そう思いながらもメイドさんに2人を渡す。

「すずか!! すずか!! よかった・・・よかった・・・!!」

「さすがお嬢様!! アリサお嬢様!!」

「2人とも、無事でよかった・・・2人がいなくなったらなのはも悲しむ」

うんうん。ええ話や!!・・・さて、帰るか

「じゃあ、おつかれさまでした♪」

さっさとビデオカメラ回収して、寝るか。

「待て」

・・・無視したら・・・死ぬな、俺が

「なんですか?」

なんで、お三方揃いもそろって俺を睨んでいらっしやるの？

「君は何者だ?」「いや、その2人と同じで誘拐された仲です。」
 ・・・「いや、ホントですから。すずかさんのお姉さんは俺が2人
 と一緒に車に入れられるの見たでしょ?」ほんとうなのか、忍?」

「うん、本当よ。でも、誘拐犯たちはどうしたの？　すずかたちを助けてくれたことには感謝するけど、どうやって誘拐犯たちを退いたの？」

はあ……ノエルさんを見ても

「私もお嬢様たちと同意見です。」

もうヤダ。この人たちめんどくさい。
(泣)

「めんどいから結論だけでいいですか？」

3人が頷いたのを確認した。

「誘拐犯たちは二度と日の光を見ることはないから安心しなされ」

『?!?!?!?!?!?!?!?!?!?!』

その言葉に3人は驚愕したが、鈴の姿を見てそれが本当のことだと理解してしまった。学校指定の白い制服にはところどころに赤い染みがあり、鈴自身の白髪の前髪にも赤い染みが出来ている。

「ああ、それとその光景は刺激が強いので、二人には気絶してもらいましたから・・・何も覚えてないと思います。」

「それではみなさん。さようなら」

3人は呆然としていたが、俺は月村家と後にした。

その後、神社でビデオカメラを回収。

家にて再生。

『リリカル
マジカル
ジュエル
シード
シリアル
? ? ?
封印
!!
』

「あっはっはっはっはっは、腹が！！腹が痛え！！あは、あははははははははは！！！！！！！！は、腹が振れる！！面白過ぎる！！『リリカル♪マジカル♪ジュエルシード封印♪』ぷっあはは！！」

この日、俺は超爆笑映像と高町なのは変身Movieを手に入れた

笑

08話 スキルと魔窟と3悪女とかその他いろいろ（後書き）

ね？駄文でしょ？
（泣）

09話 平穩って何だろうね？（前書き）

頑張って書いたけど結構時間かった……

小説って難しい。そして文才の無さに全俺が泣いた

09話 平穩って何だろうね？

よう、久しぶりだな。夜風 鈴だ。現在俺はあるサッカーチームの選手として今日だけ練習試合に参加している。

「血祭だあああああああ！！！！」

鈴の絶叫があたりに響いた

何故鈴がこうなったのかというと・・・・・・・・・・

（回想）

誘拐事件から5日たった。日曜日

ニュースでは倉庫付近で死体が発見されたとか犯人は不明とかなん

とか言ってた気がする。

その間、俺は学校をサボっていた。水曜く木曜にかけて小説家の現行を書き上げ、金曜日にだらだらと家で平和な時を過ごしていた。そして昨日の土曜日は何故か森さんが家に来て握手会だ!!と言い出して、夕方まで永遠とファンの皆さんと手を握り続けた。やはりファンのみんなは俺の姿を見て驚いていたが……

そして、今日の日曜日。

めずらしく目覚めが良く、いい一日になるだろうと思い背を伸ばす。

そこで朝飯を食べようと思い冷蔵庫を開けると

「……何にもないな」

という訳で開店時間にちょうどいいように家を出て、商店街へとダッシュで向かう。

さっさと買い物を買わせて帰ろうと思いレジで会計をすませているとクジ引きの券をもらった。

ものは試しと言うことでやってみると……当たった。

しかも2等……。温泉旅館の一泊二日の無料券3枚だとさ……。まあ貰っておこう。

こうして、買い物袋を片手に掴んで歩き出した。

暫く歩いて、河原横を通った。俺がいる場所のしたではサッカーの練習？が行われている。俺は荷物を近くに置いて緩やかな斜面に寝転がった。日がちょうどいい具合に気温を調節してくれる……。俺の意識はシャツダウン（寝た）した。

なのは Side

今日はうちのお父さん、高町 士郎さんがコーチ兼オーナーをしているサッカーチーム、ミドリエJFCの試合の日

それを私とアリサちゃん、すずかちゃんと（ユーノくんも）一緒に応援しようねって約束してたんです。

2人は前に誘拐されたこと気にもしてないのがよかったと思っています。

でも2人共誘拐された翌日にあの子……。夜風くんをよく探してい

ます。なんでも一緒に誘拐されたそうです。

一度も話したことはないけど心配です。

「さて、応援席も埋まってきたようですし、そろそろ試合を始めますか」

「ですな」

お父さんと相手の監督が試合を始めるようです。

ピピーーーー！

試合開始と同時にボールが動きだした。

「「頑張れー」」

アリサちゃんとすずかちゃんも応援頑張ってるな

「「（これってこっちの世界のスポーツなんだよね？）（へ？うん、

そうだよ。サッカーって言うの)」

私はユーノくんにサッカーを説明していると

「あっ、ボールが!!」

アリサちゃんが叫んでいたので見るとボールが斜面の方に飛んでいきました。

ゴンッ!!

.....

.....すごい音が鳴ったの...

「うわゝ、ヤバい!! 取りに行かなきゃ!!」

どうやらボールを蹴ったのはこちらのチーム子ようです。

「さっきの音…大丈夫かなあ？」

「何かにぶつかったんじゃないの？」

「もしかして、誰かに当たったんじゃない?」

私とアリサちゃんとすずかちゃんはボールが飛んでいった方を見ていました。

すると1人の人物が表れた。

アリサちゃんとすずかちゃんはその人物を見て驚いている

「あ、あいつ!」

「や、夜風くん!」?

その人物……片手にボールを鷲掴んでこちらに近付いて来ている。

その人物は、口の端から血を流し、こちらを血走った眼で睨んでいる……鈴

「ねえ……、何かめっちゃくちゃキレてない?」

「うん……。怖い」

アリサとすずかは微かだが震えていた。

「私も怖いんだけど……」

「（僕も怖い……）」

ジュエルシードで強くなった敵よりも怖い……この人は何者なんだろうか？

なのは Side out

鈴 Side

ゴンツッ!!

「ッ!!………」

俺の気持ち良い昼寝の時間は走る痛みの妨害によって強制的に

起こされてしまった。

別に痛くない。痛くないんだが、感覚はあるんだ……それに……

誰だッ!!

俺のッ……俺のッ

平穏な時間を奪った奴はああああああッ!!!!!!!!!!

殺すッ!! 半分殺すッ!! いや、四分の三殺すッ!!

そこで飛んできた物を見ると……サッカーボール……反対の方から飛んできたのか……ふふふふふふ

「俺の睡眠を邪魔した馬鹿に天誅を!!」

鈴は小説の原稿の作成や握手会などであまり眠れなく、昨日はよく眠れたんだがそれでも寝たりない……じゃあ昼寝をしよう!!と昼寝しているとところを妨害。キレるのも無理はない。

鈴が反対の斜面の下を白い髪をなびかせ、口の端から血を流し、血走った眼で睨んでいるとこちらへ近づこうとする少年がいた。鈴自身はできる限り怒りを隠しているが、その子は鈴の睨みでその場から無意識に後退していった。

そんな子に

「おい、このボールを飛ばしたのはお前か？」

（立ってる位置が斜面の上）威圧的に聞く鈴。お前は悪魔なのかと問いただしたい。

「う、うん、はっ、はいッ!!」

鈴自身もあそこで「すみません」の一言でもあれば許してもよかったのだが、少年は頭のできが残念な部類のようで謝するという選択肢すらなかったようだ。よって、判決は鈴の慈悲深い攻撃……と言っても雀の涙程度だが……

鈴の怒号にその場の全員が驚いているが、そんなものは関係ない！
！と言わんばかりに鈴は的確なコントロールでボールを蹴り飛ばし、少年に向かってゆく。

ボールは少年の胸部にあたり、また鈴の方へと飛んでくる。

それを斜面を下りながら、跳び蹴りの応用でボールを全力で蹴る。

そして、まともや少年にボールは当たる。次は顔に当たった。少年はあまりの痛さに気絶してしまった。

だが、その蹴りはこの遣り取りを見ている周りのサッカーチームのみんなと監督たちですら素晴らしいと思うような蹴りだった。

……

「ああああー！ー！ー！ー！ー！イライラするー！ー！ー！」

気絶している少年の隣に来て、意識がないのを確認するといきなり叫びだした。もちろん、鈴の頭の中に気絶している少年を助けるといふ選択肢はない。いや、選択肢そのものが存在していない。というより、選択肢がもしもあったとしても、助けるというのはいらないだろう。

流石だ……。こいつほど外道と邪道を足したような性格をしている主人公がいてもいいのだろうか？

「大丈夫か！？おい、しっかりしろ！！」

鈴が叫んでいる隣の気絶している少年の側に、気づいたら高町 士郎がいた。

「（どうでもいいか、つか、誰だよこのおっさん）あゝ……。イライラが治まसानーーー！！さっさと帰って寝るか……」

コイツは原作を覚えていないのか？凄く疑問だった……

「待ちたまえ」

「何ですか？俺、睡眠時間を邪魔されてすげーーー機嫌悪いんですけど……」

「・・・いや、確かにさっきのは謝らなかったこの子が悪かったがやり過ぎだよ。」

「・・・出来るだけ手加減はしといたぞ？」

「・・・だとしてもだ。今は試合の途中で、この子はレギュラーだ。こっちには替えの選手もいない・・・代わりに出てくれないか？見たところ年も同じくらいだし、一応君にも責任があるんだ」

「・・・（チツ、仕方ねえ）・・・わかった。さっさと終わらせて帰りたいから早く!!」

「わかった。私はこの子を向こうに連れて行くから、君はあっちのベンチに替えのユニフォームがあるからそれを着ていてくれ」

「わかった・・・」

そう言い、走って反対に行き、買い物袋を持って、ベンチに向かう。そして固まる。

「・・・・・・・・・・・・・・・・え？」

(; ッД)(ゴシゴシ

・・・・・・・・・・

ウソ——Σ（。Д。。）ノノ——ン！！！？

「ぎゃあああああああ！！出たあああああああ！！」

『何でお化けを見たみたいな反応するの（よ）ッ！？』

ベンチに居たのは3悪女。3人が一斉にそう叫ぶが、完璧にスルー。そんなものは鈴には関係ない。いま一番恐れていたことを自分から行ってしまった。そして、バツと後ろを見て……なのはを見る。

「お、おい、もももしかして……あれってお前のお父さんだったりしたり……する？」

「え、そうだけど……ってさっきの反応はどういうことなの！？」

「（……（。▽。；）ヤ……ヤバ。ヤバイヤバイヤバイヤバイバーバーバー……いいいいいい！！何で自分から原作キャラに会いに行ってるんだよ！？ああ、散歩なんてするもんじゃない……どどん平穩の道から外れていってる気がする……グスッ）」

なのはの叫びなどはスルーでうずくまって頭を抱え自分の今後の未来のことを全力で考える。ここで失敗すればさらに平和と平穩から外れてしまう恐れがある。

「君、早く着替えてくれ。後3分で試合を再開するから！」

「あ、了解」

そこで、鈴が着替えようとしたとき相手の方から言葉が聞こえた。

「あいつ女になんか言われてるぞ」「馬鹿みてゝ」「はは、ダッセー」「どーせさっきの蹴りもまぐれだろ」「やっぱりそうか、じゃあ警戒する必要もないな。どうせ弱いんだし」「あははははははははっ!！」

その言葉は鈴どころかなのは、アリサ、すずか、士郎にも聞こえていた。

なのはとすずか、士郎は無視

アリサは「何よあいつ等」

そんな中、鈴の反応は……

「ふふふ、ふふふふふふっ!！」

顔を伏せ、目元を手で隠し、口元を吊り上げて笑っていた

なのは・アリサ・すずか・士郎

『怖っ!!!』

うん。俺（作者）も怖い。

鈴が着替え終わると、相手はいまだに鈴をあざ笑っている。

それを無視しチームの奴らを集めて作戦を伝える。

「全員、一回にか言わないからよく聞け!!」

『は、はいッ!!』

レギュラーはもちろん、ベンチにいた3悪女ユウノや士郎も思った

『（威圧感パネェ）』

「ボールが回ってきたら俺に渡せ……あいつらは……ふふふ」

『チョー怖い』

またもやみんなの気持ちが一つになった

そして試合が始まる笛が鳴り、ボールが回りだす瞬間

「血祭だあああああああ！！！！」

鈴の絶叫があたりに響いた

そして冒頭に戻る

～回想 終了～

ピュッピューーーーー！！！！

試合が再開された

ボールが動き出し、相手にボールが渡ったとき

「虚刀流七の構え 『杜若』」

鈴は足を平行に前後へと配置し、膝を落として腰を曲げ、上半身を軽く前傾させる動の構え（クラウチングスタートのような体制）から駆け出す。

鈴が消え、一瞬で相手の前に現れボールを奪い、奪った相手に向けてボールを額に飛ばす

「ガッ!!」

当たった相手は倒れ、額に当たったボールは真上に高く上がる。

それと同じ高さまで軽くジャンプする鈴。周りは驚いている、もちろん士郎も

だが、鈴はそんな気にもしないでボールを相手に当てる。また上がってくる。そして当てる。

「ははははは!!」

上がる。当てる。上がる。当てる・・・・・・繰り返す

自分にボールが回ってくる度に相手の選手の顔が青くなる

ボールにフォークを掛けて男の急所を思いっきり当てたり、虚刀流

を手加減して使ったボールをまともにくらったりの……
一歩的なワンサイドゲーム

しかもその間、鈴はずっと笑っているのだ

『……………』

応援席のみんなは何も言えない。相手側のコーチも何も言えない。
ただ思っていることは早く試合が終わってほしいという切実な願い
だった

結果 11ー1

大勝利だった。だが、喜ぶ者は誰一人いなかった

試合終了

この言葉がどれほど嬉しかったかは第三者視点でしかわからないこ
とは確かだ

試合終了後、鈴の機嫌は完全に治っており、凄い上機嫌だった。

その後、士郎が勝った祝いに飯でも食うか!!という一言でさっきまでの何とも言えない空気はなくなりみんなは笑顔だ。

「さて、さっさと帰るか♪」

ガシッ

「まあ、待ちたまえ。君も一緒にどうだい？」

士郎さん笑顔がとても怖いです。てか、絶対に嫌です

「そうよ、あんたも来なさい」

「夜凧くんもきてんね」

「ぎゃあああああ!! また出たああああ!!」

『だから、なんで叫ぶの(よ)!!』

そんなの少し考えたらわかるだろ、金色の暴君よ。お前に話しかける!!俺の死というすでに完成された死亡フラグがあるのに何故自分から会わなきゃならんのだ。俺は自殺志願者ではない

「そんなの少し考えたらわかるだろ、金色の暴君よ。お前に話しかけるは俺の死というすでに完成された死亡フラグがあるのに何故自分から会わなきゃならんのだ。俺は自殺志願者ではない」

「・・・・・・・・殺すッ!!」

「うおっ!! 危なっ、いきなり何しやがる!!」

「夜風くん、気づいてないの？」

「は、何が？」

「さっき、ずっと独り言が漏れてたよ？」

「・・・・・・・・なんてこったい／＼（^▽^）／」

その後、すずかと話してるところを士郎さんから捕まえられ、俺も緑屋へと運ばれた。



現在俺たちはテーブルを囲む形で俺の左にアリサ、右にすずか、正面になのは、テーブルの上には食用フェレットと軽い料理という状況になっていた

特に左右2人の視線が・・・・・・・・ああ、平穩が恋しい・・・

どうして・・・こうなった？

「で、どうしても聞きたいことがあるんだけど・・・あの誘拐の時どうやって逃げたの？」

アリサの言葉にすずかも同意のようでコクコクと首を縦に振っている

「このフェレットの名前なんての？」

鈴はなのはに聞「ガツン」く前に頭に星が回り出し、鈴はテーブルに頭を落とした

「やっぱり・・・暴、君・・・じゃん・・・ガクッ」

「違うわよ！！てか質問に答えろー！！！！」

アリサの絶叫が響いた

その後話を誤魔化しまくってよし帰ろうと席を立つと

「あつ、そうだ。お前等この券いるか？」

鈴が出したのはクジ引きで当たった温泉旅館の一泊二日の無料券。ちょうど3枚あったので、3人に渡した。

「えっと、貰ってもいいのかな？
とすずかが問い。」

「おう、3人で行って来い。そしてさっさと俺を解放しろ。この曇天渦巻く空間から一刻も早く逃げ出したいという俺の切実な願いを聞き入れてくれ、」

ゴッ

鈴が真面目に答え、ツンデレが鉄槌が下る

「・・・私は自分のお金で行くから、これはあんたが使いなさい。」

そういつてツンデレが券を一枚返してくる。

「・・・ツンデレよ、どゆこと？何故か俺の頭の中で警報機が
凄い音を鳴らしてるんだが・・・ねえ、何で？何で？」

「誰がツンデレか！！あんた、後で絶対シバキ倒すから・・・つまり、あんたも一緒に行くのよ！！そうねえ、来週の土曜日から行くわよ。なのはとすずかもそれでいい？」

[illegible]

「失礼しました」

そのままダッシュ。部分強化で脚を強化して逃げ出した。そして、気づくと手には券が一枚握ってあった。

反射的に掴んでしまった俺が憎い。そして、数十分前のさっさと帰らなかった自分をぶん殴ってやりたい。

後ろからツンデレが何か叫んでる気がするがそんなものはどうでもいい。俺の平穏という言葉がどんどん遠くなっていくのを感じる（泣）

早く帰って寝よう。すべてを忘れよう。そして一時学校もサボろう。

その後、家に帰り、さあ寝ようとカーテンを閉めようとする、街

もうやだ・・・・・”
（／へ／＊）
”（）
ウウ、ヒツク

09話 平穩って何だろうね？（後書き）

おそらく次回はかなりのキンクリが含まれるでしょうが、それでも見てくれたら嬉しいです。

改善点などがありましたら、どうぞ指摘お願いします。

原作での主人公はこんな感じ。ほとんど変わってないのよさ〜(前書き)

投稿めんどい

原作での主人公はこんな感じ。ほとんど変わってないのよささ

夜^や凧^{なぎ} 鈴^{れい}

年齢 09歳

身長 140cm～145cm

持っているチート

1・鍛えれば鍛える程上がっていく身体能力

2・大嘘憑き（オールフィクション）回数制限5回

3・リンカーコアEX（感知されたくないから封じてる）

4・虚刀流と七実の経験（爪合わせ、足軽、怪力など）

5・殲滅眼^{イノ・ドゥーエ}・・・※この作品の中で使うのは魔法を喰らい力にすること、回復、身体能力が上がる位にしか使いません

6・瞬間記憶能力

7・全喰者^{オールイーター}

人体実験で体を改造されている為、自分の身体にある、数十～百種類の生物たちの細胞を使って体を変換や強化して闘うことが出来る。

容姿…中性的な顔立ちをしている為、よく性別を間違えられる。髪は肩までのセミロング。前髪は目にかかるくらい。髪色は黒だったが真っ白に変わってしまった。瞳の色は黒。

性格…自由奔放・面倒くさがり、自分の興味の無いことには一切関わらず、逆に興味のあることには粉骨碎身の覚悟で挑み、無駄にくだわったりする。

嫌な事ですら自分の中で面白いことに変換している。人生をこれ程までに目一杯楽しんで

いるのはこいつくらいだろう

………だが、こいつが望んでいることは平穩に生きていくこと。最近では夢になってきた。原作キャラたちと逢わないようにするつもりがたびたび遭遇してしまう。神に嫌われてるのかと考えているが、よくよく考えてみれば自業自得だ。…もともと本人はそんなことまったく思っていないが……

そして、一度キレると手がつけられないほどに恐ろしいという面を持っており、

本気で鈴がキレたときは「世界滅びるんじゃないやね？」と言われる程だ。

原作での主人公はこんな感じ。ほとんど変わってないのよさ〜(後書き)

10話は06月05日17時00分投稿予定

10話 世界はやっぱりダルいッス(前書き)

ふっ、燃え尽きたぜ

10話 世界はやっぱりダルいッス

あのサッカーの日から一週間くらいたっただろうか……

この数十日はいろいろあった。

まず、俺が持つてる携帯とパソコンを魔改造しまくって一つにした。

大きさはだいたいiPhoneより少し大きいくらいだ。

これは使う時に携帯の上にデジタル画面が出てくるし、ハッキングを軽くこなし、ネットもメールも電話も俺が思いつく限りの技術を入れていった。そして、動力源は俺の魔力だ。

これはもう、@uでもSoftBankでもDOCOMOでもない！！あえて言うなら新しい携帯。The New type。そして俺なりに機種名を考えてみたんだがRINにしてみた。電波も充電も俺の魔力次第のこの世に一つだけの携帯の出来上がりだ！

まあ、俺のリンカーコアはずっと封印していたからな、今までは出てこなかったけど……だから少しづつ携帯に魔力を送る。とりあえず充電を……

もしこんなことで魔力反応を確認されたとかになってみる、此処にあるの恐ろしき悪魔たちの神であらせられる悪魔神な・の・は・が降臨してしまう。

攻撃魔法はスターライト・ブレイカー。補助魔法はディバイン・バスター。・・・・・・あれ？どっちも殺戮魔法じゃね？

・・・・・・まあ、深く考えるのはやめよう。

てなわけで、そんなことしたら、完全な平穩の終わり。BAD E
NDに一直線しちまう。だからこそ、より慎重に慎重に・・・・慎重に・・・・慎重に・・・・

飲まず食わずで4日かけてやっと充電が終わった。これで1カ月はもつかなあ・・・・

それから飯を食べた俺は翌日まで死んだように寝ていた。



でだ、その日俺はもの凄く焦っていた。冷や汗がだらだらと流れるのがわかる。いや、マジで。比喻表現とかじゃなくて実際に冷や汗がダラッダラと流れてるんだよ。

理由を教えた方がいいよな？聞いてくれるか？

1. はい
2. YES
3. いいえ

＊注意 3を選んだ方は蒲公英の餌食です。

ありがとう。では聞いてくれ、そしてこれからのことを一緒に考えてほしい。

作者「脅しじゃね？」「蒲公英」・・・バイバイッ」 作者がログアウトしました

思い出せないんだ・・・

え？何を？って顔してるよな？

原作キャラとストーリーが思い出せないんだよ・・・

いや、全部って訳じゃないぞ？覚えてるキャラもいるし、ところどころだがストーリーも覚えてる。

だがな、一期と二期のキャラが3悪女とその家族くらいしか覚えてないし、どのキャラにエンカウトしたらダメなのかを考えないと俺の今の平穏だけじゃなく、未来の平穏までもが消えてしまうおそれがあるんだ・・・それだけは死守せねばッ！！

だからこそ焦ってる・・・登場人物が思い出せなかったらヤバいのだ。主に俺の人生の選択肢がなくなるので（The 自分勝手！）

というわけで聞いてくれてありがとう。そんじゃ！

その後も思い出そうと部屋を歩きまわりながら必死で思い出そうとしていると足を滑らせ気絶。次に鈴が起きたのは3日後のことだった。



目が覚めた次の日、そろそろ学校に行こうかな？と感じ始めた頃、

俺は前に神社に仕掛けた時のビデオカメラを取り出した。

映像再生

といっても今回はリリカル♪♪と見て爆笑するつもりはない。
今回はなのは達が使う魔法をはたして俺が使えるのかどうか・・・
という問題だ。

なんか知らんが嫌な予感がするから自衛の為に少しでもあったらい
いだろうと思っの行動だったんだが

「・・・・・・・・、何で愛と平和が信条の俺が戦いに備えてんだ？」

すんごい疑問だった・・・・・・・・

結局、魔法は使えなかった・・・・・・・・。どないしょ？やっぱ魔法
使えた方がいろいろ便利だし・・空を飛ぶにもあの真っ赤な六枚の
翼だせばいいけど・・・・自衛にやらんでしょ・・・・さて、どうす
るか・・・・・・・・



朝7時丁度に学校に来た。めっちゃ久々の登校だったので校長にあいさつだけはすませたが「一局どうじゃ？」と言われ、将棋開始。一局って言ったのに一刻になってしまった・・・。

俺の両手には賭けで貰った戦利品でいっぱいだ。缶ジュース23本・
・しかも全部りんご味。因みに両手に小型ピラミッド（りんごの缶ジュース23缶で作った）を一つづつ。他にも何か準備しとけよ・
・・

8時ちょい過ぎか・・・

ガラッ ドアを開けると

バアンッ「いい加減にきなさいよッ!!」

悪魔の机を両手で叩きつけ、悪魔を怒鳴り散らしてる暴君がいた・
・・・・え？何これ？どういう状況？

つか、悪魔に喧嘩売る君は何者!？

扉の前で立ち止まり、頭の上に？マークが舞ってる俺。この状況をどうしろと？しかも暴君はどんどん罵声を放って行く。いや、あんたマジで何者？

つか、数週間学校にいなかった俺にこの状況をどうしろと？何度でも言おう、この状況をどうしろと？

あ、俺の方に向かって来る・・・何故？

・・・私の後ろがドアだったなり。ああ、なるほど、暴君エリア移動ですか。わかります。あれでしょ？「ドスファンゴがエリア1に向かうようだよ」みたいな感じでしょ？

暴君は俺が来ていることを知らなかったんだろう。俺を見て驚いていた。俺は通路をすんなりと開けて上げ、缶ジュースを一本プレゼント。

一瞬こっちをみて

「あ、ありがと・・・／／／／」

駆けだした。

うむ、体力、スタミナ共に全回復のレアアイテム『校長のりんごジュース』をあげたかいがあるというものだ。

・・・・・・アイテム名がキモいから捨てるか

と思ったら葉姫もこっちに来た。またもや缶ジュースを一本プレゼント。

「ありがとう、夜風くん！／＼／」

暴君を追いかけていった。なるほど、ラスボスに挑むパーティは奴等2人か・・・無理だろうな。

悲しい結末を迎えることになるぞ、ラスボスが。

薬姫の使う『濃硫酸やら王水やら』の薬品攻撃と暴君の『圧倒的暴力』・・・俺、ラスボスに味方してあげようかな・・・何か不憫に思えてきた・・・ラスボスが

さて、残りの『校長のりんごジュース』はと・・・

「りんごジュース欲しい奴こっちに来ー！ーい！ー！」

教室で叫ぶとめっちゃ寄ってきた。助かった。

まあ、その日の3悪女の仲が悪かったのは俺にとっては完全なる余談だ。



学校も終わり、一時帰宅して私服に着替えた後、商店街で買い物をすませ帰り道へ歩いていると、近くのビルからオレンジ色の光が空へ上がるのが見えた。それと同時に空が暗くなり、雷が鳴り出した。

昨日の嫌な予感が今日に来るとか……鬱だ死のう……あ、リアルに一度死んだし、死に近い経験なら結構あるじゃん

でも嫌な予感はそのので近くの誰もいないような路地に隠れた。するとこの世界の色が微妙にだが変わった。

「結界張ったんだ……てか、また、巻き込まれた」「——
——」……もういや、平穩に暮らしたい。普通に生活したい……」

今、鈴はまたと言ったが、もちろん鈴は何度も巻き込まれている。家で寝ていても、買い物してても、ネコと遊んでも、本を読んでも……絶対に鈴が結界に入っているのだ。そのたびに鈴は逃げたり、隠れたり、無視したり、陰から見たりとしてきたが

「取り敢えず……逃げるか！だが顔見られたら今後の平穩が崩れてしまう……それはダメ、絶対。……あ、普通に身体を狂化（誤字に有らず）すればいいか。あれの外見ぱつと見人外だし……言って悲しくなってきた……自分で人外認定するか……」

想像したら普通にわかることだが

獣の耳や六翼や牙などが身体から生えてる人間を……最近ネコミミ以外にもウサミミも生えてきた……もう化物でいんじゃない？

「よくねえよッ！！……あれ？何か聞こえたような……電波か？」

その時、少し離れた場所で青い光が天まで上がった。

……俺の中の何かが「あっちに行つてはならないッ！」と叫んでいる。だが、俺の中で好奇心とそれを阻止しようとする何かがごちゃごちゃになった結果

俺は好奇心に負けました。

光の方へ結構近づいたとき、何やら大爆発が起きました。

俺は爆発の瞬間に近くのビルへと逃げた・・・危ねえ・・・

・・・

何かオオカミとフェレットが闘ってる・・・

あのフェレットって悪魔なのはの仲間だよな？あの淫獣の・・・じゃあ、あれか、悪魔の眷属？使い魔？どっちみち可哀想だ。

あんな悪魔の仲間なんて俺ならなつた瞬間に自殺を決意するね。だってあれだろ？言うこと聞かない奴にはO☆H☆A☆N☆A☆S☆H☆Iと言う名の肉体言語だろ？コミュニケーションなんて端っから選択肢にすらない悪魔の呪文じゃん。

だから俺はそんな選択を迫ってくる前に死を選ぶね

まあ、それはいいとしてあのオオカミ何者？そしてあの毛をもふもふして遊びたい。

おそらくは原作キャラだろうが、脇役だろうな・・・では、接触して

も良いのでは？

結論から言うと

俺はもふもふに負けた。だって動物の毛って気持ちよくね？バカにする奴は許せない。そして、早く触りたい。

俺が移動を開始しようとする、どっかで見たことあるような動物の耳を付けたお姉さんが腕の中に女の子を連れて真横に表れた。

それよりさっきのオオカミはどこさ……早く触りたいのに

「はあ……はあ、逃げ切れたのか……早くフェイトを治療しなくちゃ」

つうか俺に気づけ。でも顔は隠しとこ。懷から狐のお面を取り出す。
（口元と眼は穴が開いてます）カラスプレー持ってくれば良かったな……白い髪って珍し過ぎだし……部分強化で耳だけ出しとこ。
悪魔と淫獣の会話を聞かなきゃ、悪魔たちから見つかりかねん!!

ネコミミ発生。ネコミミ触ると気持ちいいんだけど、自分で触るのはあんまり気持ちよくない

「フェイトしっかりして!! 直ぐに治療してあげるからね!!」

フェイトなんて原作キャラにいたっけ? ……マジヤバイ。キャラがわからないからどうしようもないし……でも、目の前で死なれたら気分悪いし……はあ、しょうがない

「あのー、治療してあげようかにゃ?」

語尾がおかしいのは気にしないでくれ。ネコミミを出したらこうなっちゃうんだ……だが、後悔はしていない!! ネコミミは正義だ!!

「っ!?! 誰!?! ……狐?」

「いや、誰だって言われても・・・狐ですにゃ」

「顔は狐で、頭はネコミミ・・・変な奴だなお前。・・・さっきの言葉本当かい？」

「ん、治療してやろうかってこと？」

相手は黙って首を縦に振る。

「本当だ。てか目の前で死なれたら気分悪いからな」

「・・・じゃあ頼むよ。フェイトを助けてくれ！！凄い怪我してるんだ！！」

「わかった。じゃあこっちに來て寝かせてくれ」

そう言ってビルの中の奥へと入っていく。だって結界がなくなりそうなんだもん・・・

奥に行き、腕の中で眠る少女フェイトを下に寝かせると・・・

「（・・・・・・・・・・コイツ・・・痴女だ！！何でこんなもん着てやが

んだ!?! いや、見せたいからだよな。冷静さを失ったら負けだにや!
! 人の趣味に文句付いたらダメだにや。・・・コイツのことは痴女
と呼ぶにや。」

俺は固く決意した。

「取り敢えず、治すとするかにや。身体に溜まった疲労と傷を治せばいいにや」

そう呟くと俺は『大嘘憑き』を発動させた。疲労と傷だからあと3
回しか使えないのか・・・はあ。

「フェイト!!」

治った少女^{フェイト}を見て耳を付けた女が抱きつく。

「・・・百合かにや。ほんとこの世界は何でもありだにや・・・
はあ、さっさと帰るにや」

「待ってくれ!! あたしはアルフって言うんだ! この子はフェイト。
あたしの主人を助けてくれてありがとう!」

いや、別にどうでもいいんだがにゃ？ どうせ原作キャラでもないモブ何だろ？ じゃあ、覚えなくてもよくね？ モブとはもう会うことはないだろうし・・・雰囲気的に名前を教えろにゃ！ って話しだろ？ まあ、ペンネームならいいかにゃ

「俺はR I N。もう会うことはないと思うから覚えなくてもいいにゃ。じゃあにゃあゝ」

その場からメツチャ走った。好奇心に負けたことをめっちゃ後悔しながら・・・

そして俺がモブだと思っていた二人が実は結構話しの中心人物だと知るの少し先のことだった・・・

教訓

好奇心で動くと後々物凄く後悔する!! o t z の俺

淫獣フェレットは悪魔の仲間Ⅱ可哀想（俺なら死ぬる）

悪魔はどこまで行っても悪魔

泣きたくなる。

この世界は

善人の顔した

恐怖の人が

いっばいだ。

元の世界（前世）に帰ってえー！ー！ー！ー！！！！！！

10話 世界はやっぱりダルいッス（後書き）

次の投稿はいつになるやら……………

11話

「自分で自分の平穩を壊したかどう思うよ？」

因みに俺は絶望して

今回の話しを書いてから思ったんだけど原作キャラの口調がほとんどわからない。

後、今後の展開にどう繋げようかといろいろと不安です。

今回の駄作も読んでくれる皆様、本当に有難うございます。

そして、お気に入り登録65件有難うございますm () m

11話

「自分で自分の平穩を壊したとかどう思うよ？」

因みに俺は絶望して

あのフェイトとアルフとかいうモブキャラ達に遭った次の日の朝、俺は

「風が気持ちいいぜ〜」

空を飛んでいた。自分の身体を小鳥に変えて。

いや、最初は焦ったね。出来るかな？とか軽い気持ちでやってみたらマジで変身出来るんだもんよ。もうこの体って実用性が最強だな。マジで改造してくれた奴に感謝だね。・・・感謝するの辞めた。俺をいじったのってあのキチガイだった。感謝なんてしない。絶対。

ここんどこ毎日大変だったからな。マンションのベランダから気分転換に空の散歩（飛んで）へと繰り出したんだ。普通の散歩は危険がいっぱいなんだ。一度失敗したからな、空なら安全だ・・・よな？

気づいたら全然知らない場所を飛んでいた。

もしかして隣街まで来たのか？ま、それはそれで楽しそうだからいいか♪

って、あのマンションデカッ！！俺の住んでるマンションよりデカイぞ・・・ちよっと上から見てもよ

屋上からの街の景色に感激した。そのまま（小鳥の姿のまま）屋上に寝転がる。

「（あゝ・・・幸せ♪こんなにゆったりと平和に過ごせる日が来るなんて・・・ああゝ平穩最高！！・・・今なら神に感謝を言ってもいい気がする♪・・・俺、無神論者だった・・・マジパネエ）」

知らないうちに寝ていた件



同日、住宅街マンション屋上

「お土産はこれでよしとっ」

とある少女が手にお菓子の箱を持ってそう言う

「甘いお菓子か……。こんな物……。あの人が喜ぶのかねえ」

隣に居た、オオカミの耳を生やした女性がそう言いながら箱を取る

「わかんないけど……。こういうのは、気持ちだから……」

「ふーん……。ん？ フェイトくあそこに何かいるけど……。って小鳥みたいだね。寝てるみたいだけど」

小鳥（変身？した鈴）の横で言うアルフ

「アルフわかるの？」

「そりゃあ、あたしはオオカミだからね。動物の言葉ならわかるさ！」

「そうなんだ……。アルフもう行くよ！」

どうやら時間が来たようで、どこかへ向かう様子。

「わかったよ！」

アルフが元気よく返事をし

鈴を掴みながら

「……………どうせならコイツも連れて行くのでしょうか！」

鈴の平穩はほんの細やかな時を持ち終了となった。
鈴の辞書から平穩の文字が飛び出しかけた瞬間だった。

「次元転移 次元座標 8 7 6 C 4 4 1 9 3 3 1 2 B 6 9 9
3 5 8 3 A 1 4 1 4 7 7 9 F 3 1 2 5 開け誘いの扉 時
の庭園 テスタロッサの主の下へ」

フェイトがそう唱えるとフェイトとアルフ……………あと、小鳥姿の
鈴が黄色い光に包まれてそこから消えた。



高次空間内

『時の庭園』

そこのとある一室ではフェイトに何度も鞭を振るっているおばはんがいた。

「たったの四つ・・・これはあまりにも酷いわ」

「・・・・・・・・はい、ごめんなさい。母さん」

「いい、フェイト？あなたは私の娘。大魔道士プレシア・テストア
ツサの一人娘」

・・・・・・・・とかなんとか云々かんぬん



・ ・ ・ ・ ・ なあ、ここってどこ？目が覚めたら青い空！！とかじやなくて雷鳴渦巻く紫とか黒色の空・ ・ ・ ・ ・ もう一度言う。ここってどこ？え？俺ってマンションの屋上で平穏を噛み締めながら眠りについたよね？

・ ・ ・ ・ ・

・ ・ ・ ・ ・ 泣きたい。アニメでこんなシーンがあったの思い出してしまった・ ・ ・ ・ ・ なんで今思い出すのかな？あれ、なんだろ・ ・ ・ 目尻に熱い物が溜まってる・ ・ ・

取り敢えず、飛んで建物の中に入って行った。中に続く道を歩いていると・ ・ ・ 悲鳴？のような喘ぎ声を出してる声が・ ・ ・ 声の近くまで行くとある扉の近くに來ただけど・ ・ ・ ・ ・

近くに座って震えてるお姉さん・ ・ ・ 昨日会ったお姉さんだ・ ・ ・ たしかアルフだっけ？この姿じゃバレないよな？お姉さんに近づく

「あつ、あんた無事にこっちに來れてたんだな。よかったよ！あた

しが連れて来たのに突然居なくなつたもんだから、どうしようかと思つたよ」

そこで、鈴はキレた。

「（お前が連れて来たのかよッ！?!?!?!?!?!?）何てことしやがる
 ！！俺の平穏を奪いやがつてええ！！ざっけんな！！俺はただ昼寝
 してただけだぞ！？なのに何でこんな目にあわなきゃいけないんだ
 よ！！・・・最近平和っていうのが夢になってきた・・・・俺
 の夢は平穏に暮らすこと。それが一番だな・・・・」

アルフからしてみればずっとチュンチュンと鳴いてる小鳥がいるだけなのだが・・・

ん？声が止んだ？ちよっアルフさん！？どこに行くの！？って扉の中に入ってたけど・・・いいの？

俺も入るなり〜

何でも、フェイトだっけ？あの人何故そんなにボロボロなの？
しかも普通の痴女服がところどころ破けて痴女っぷりが増してるし

何か大丈夫とか言ってるけど・・めっちゃ傷だらけじゃん。え？
フェイトさん？何の呪文ですかそれ？

数字やらアルファベットやらが混じった言葉を言いまくっている。

ずっとフェイトさんとアルフを見てたらいきなり2人が黄色い光に包まれ……。次にその場を見ると2人は消えていた……。

あれ？あれって転移とかそんな感じの魔法？……。ん？。俺は？あれ……。あれあれあれあれ？あれー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！？！？俺は！？俺は！？俺はー！ー！？どうすんの俺！？転移何て使えないよ！ー！つか此処何処だよ！？

「何をしているの？この小鳥は……」

後ろから何か聞こえた……みんな考えてみてくれ、誰もいない広間で一羽の小鳥（俺）が翼で頭を抱えて悶絶してる姿を奇妙すぎる・

「何故小鳥なんて……」

取り敢えず質問したい。何でそんなに大胆な服着てるの？……。でもフェイトって子の方が大胆だったな……。：

って、この女の人に転移頼めばよくね？そうじゃん、俺が帰る為に協力して貰おう。そうと決まれば・

グチャッゴリッグニョッゴキッetc．．

自分の身体から気持ち悪い音が聞こえる。

女の人も何が起こってるのかわからないような顔でこちらを凝視している。

まあ、目の前にいた小鳥が突然変な音を出しながら原型を変えるのだ普通の反応．．だよな？

数秒後

「はぁ〜元に戻れたか．．．初めまして？そして貴方はだれ？」

「．．．私はプレシア・テストロッサ。大魔導師プレシア・テストロッサよ。貴方は何者？何故此处にいるのかしら？」

驚愕と警戒の表情で此方を見てくる。仕方ないやなく。つか、お面がない

「俺の名前はR I N・・・まあ、偽名だけどよろしく。いろいろあって名乗れないんだ。種族は・・・人間？小鳥姿で気持ち良く昼寝しているところをアルフに連行されたあげく此処に放置された可哀想な小学3年生。そしてプレシアさんをお願いがあったりする」

わかってると思うがR I Nとは俺の小説家としての名だ。

「何故、種族に？が付いてるのかわからないけど、・・・まあいろいろと苦労していることはわかったわ。」

・・・ガシッ

思わず手を掴んでしまった。だが、俺は悪くない。

「!？」

「グスッ、お、俺の苦勞をわかってくれたのは貴方が初めてです！」

「は？」

それから俺は一刻程使って今までの俺の人生を話した。（能力はあ

んまり話してない）泣きながら話したのは悪くないと思う。この世界に来て本当に感謝した

「――で今、此処にいるって感じですよ」

「貴方、9歳にしては凄くハードな人生を送ってるのゴホッ」

ちよっ、プレシアさん！？いきなり吐血とかどゆこと！？

「ちよっ、どったの！？」

「ゴホッ・・ツ・・ゴホッゴホ・・・ふう、もう大丈夫」

「それって病気？」

「・・・ええ、もう時間がないの。この身体も何時まで持つことか・
・」

「・・・・・」

『大嘘憑き』使えば一発で治るくね？確か後二回使えるし

・
・
・
・
・
・

「とりゃ！」

プレシアさんに近付いて、お腹に手を当て、『大嘘憑き』発動。

するとあら不思議。治っちゃった〜

「!?! 貴方、いったい何を!?! ン?」

何か違和感があるようで自分の身体に魔力を流して検査? つばいことをしているのがわかる

「ツ!?! 治ってる!?! 貴方いったい何をしたの!?!」

「俺の能力を使ったんだ。プレシアさんの病魔をなかつたことにしたんだ。『大嘘憑き』っていうんだ。現実を^{すべて}虚構^{なかつたこと}にする能力だよ。たとえ死んでいようとね。・・もつとも回数制限があるけどね、あと1回だけしか使えないけどな」

それにプレシアは反応した。

「『死』さえも!？」

プレシアが考えていること。それはアニメを見ている人ならわかる知識。もちろんアリシアを蘇らすこと……だが、鈴は記憶が曖昧でなんでプレシアがあんなに反応しているのかわかっていない。

「…………その能力は本当に死をもなかったことに出来るのね？」

「ん、まあ、できるけど……何、誰か蘇らせたいの？」

鈴の問いにプレシアは肯定する。

「ん……ちょっと話を変えるけどジュエルシードってのを見せてくれない？ フェイトとアルフが命懸けで集めてたから気になってたんだよね……」

「…………あの子たちが命懸けで…………出すわよ？」

そして、宙に4つのジュエルシードが出てきた。

鈴はその中の一つをとって眺める。碧眼の瞳を思わせる色と形状をした宝石を。

「…………綺麗な色だな」

「ええ、でもそれは一つ一つが強大な「魔力」の結晶体で、周囲の生物が抱いた願望を叶える特性を持っているの」

「へっ・・・（魔力の結晶体・・・もしかして・・・）なあ、報酬としてこのジュエルシード貰ってもいいか？」

「ジュエルシードを・・・本当に蘇らせてくれるならあげてもいいわ。でも！嘘だったら狐、貴方を――」

「ん、了解。殺していいよ。まあ、殺しても死ぬかわからないけど）
^o^（」

「じゃあ、すぐにでもお願い出来るかしら？」

今すぐねっ・・・

「いやすぐにでもやってあげたいんだけど・・・ちょっと準備があるっていうか・・・転移魔法とか使えます？」

「？ええ、使えるわよ」

「じゃあ、今から言うところに転移で送ってくれる？で、5分後にまたそこに転移の魔法でこっちに送ってくれるとありがたい。準備があるから」

「準備？」

「うん。俺、フェイトやアルフにも顔見られてないから顔を隠すお面を付けてからじゃないと後々めんどくさいことがありそうで不安で不安で・・・本当に不安で」

そう言い本当に不安そうな顔をしている鈴に、プレシアはつい先ほど話していた鈴の過去のことを思い出した。「何もしてないのに気がつくとか巻き込まれていた」とか「ただ公園に居ただけなのに何故か誘拐に巻き込まれた」など、一般では有り得ない様なことがあるっているのにも関わらず、全てが巻き込まれただ。正直言って可哀想すぎる。

そのことを思い出したプレシアは

「・・・わかったわ。じゃあ、五分後にまた発動させるわ」

意識を集中させてるようだった。やがて魔法陣が展開する。

「そこに立って行きたい場所を想像しなさい。五分後に同じ場所に魔法陣を開くわ・・・それでいいのね？」

「あいあい」

シュン、という音がした後、見慣れたマンションの部屋の中にいた。取り敢えず、フェイト達とあった時に着けていたお面を持って、昨日の晩ご飯で食べたクリームシチューを温めて、鍋ごと持って行く

ことに

そして五分後、

「ゞ（〃。ω。）ノタダイヤモンド」

「・・・巫山戯てるの？・・・あら、いい匂い」

「おう、昨日の残りが余ってたからなよかったら食うかって・・・
何食べてるんだ？」

そう、プレシアは既に何か食べていた

「フェイトからのお土産よ。せっかく我が子が持って来てくれたんだからね」

「あんたも素直じゃないね・・・ってさっさと復活させようぜ」

「・・・こっちよ、ついて来なさい」

着いたのはたくさんのカプセルがある部屋。その中央にある一番大きなカプセルに近づく。

「この子か・・・これで最後になるんだよね？まあ、いいけど『大

嘘憑き』発動〜」

まあ、結果をいうと成功した。アリシアって名らしい。プレシアさんとアリシアは親子で感動のオーラを出し、泣きながら抱きしめあっていた。で、落ち着いたところでプレシアさんからジュエルシードを4つ貰った。それとアリシアからの「貴方、誰？」って感じの視線が怖かったと言っておこう。アリシアからしたら狐のお面着けた変な奴って認識だからな・・・

まあ、プレシアさんが助けてくれたのが俺って言うてくれたから「有難うございます！」と泣きながらお礼された。俺ってこんな柄じゃないんだが・・・

「ああ、プレシアさん。持ってきたクリームシチュー食べていいから。後、フェイトとアルフだっけ？あの二人にもアリシアのことちゃんと言して4人で仲良く暮らせ」

「ええ、ありがとう。・・・でも、あの二人は管理局に目を付けられているかもしれないわね」

「管理局？・・・まあ、何かあったら俺のせいにすればいいじゃない？」

今、鈴が物凄い発言を口にした。そのことに気づいた人はどれくらいいただろうか・

めんどくさいことが大嫌いな鈴が「俺のせいにすればいい」といった。あの、自分の平和の為に友人だろうが他人だろうが悪魔だろうが踏み台にする男が自らめんどくさいことを率先するという発言をしたのだ。・・・天変地異の前触れでわなかろうか・・・？

そう思う俺はおかしくない(キリッ BY 作者

その後、話が決まっていき、プレシアさんが事件の首謀者。鈴がジュエルシードを奪っていったとかそういう話になったんだけど・・・
・それでは俺に悪いからジュエルシード集めわ私たちでやると聴かなかったたので後のことは任せた。

最後にアリシアに顔を見せてくださいとかなりマジ顔で言われた。そして断固拒否した。しつこいアリシアを尻目にプレシアさんにもう帰りたいと言うと転移の魔法陣を出してくれた。なんでも身体の調子が良好で魔法を使っても全然疲れないそうだと。

「じゃあね、アリシア、プレシアさん。フェイトにちゃんと謝れよ」

「ふふ、わかってるわ」

「うん。R I Nさんもバイバイ」

「・・・アリシアと俺は同じ年だぞ？まあ気にしないけど・・・フェイトとアルフにもよろしく言っといてくれ、RINで通じると思うから・・・じゃあな！」

マンションに帰りつき、携帯を開くと3日もたっていた。

次からは気をつけようと決意した。

ベットに入り、さあ寝ようと思い、プレシア家でのことを考えていると、自分の言った内容を思い出し、自分で自分の平和を壊していたことを知って絶望した・・・

そして最後の最後・・・意識がシャットダウンする寸前で思ったことは

「（管理局って・・・なんぞ？）」



次の日 3日ぶりの登校を果たした俺を校門で待っていたのは

禍々しい黒いオーラを出し、髪を浮かせながら目を見開き、血走った目でこっちを見ている

金色の暴君こと

アリサ・バニングス

a n d

笑顔は天使にも見えるのに手に持っている大量の注射器が全てを台無しにしている、同じく禍々しい黒いオーラを出してこちらを見ている

薬姫（薬物姫）こと

月村 すずか

が、校門の前に立っている。

一般的に見ると凄く可愛い美少女たちなのだが……

俺には降臨した風神・雷神が校門前で殺気を振り撒いてるようにか見えなかった。

その日は一日中、風神と雷神から逃げるリアル鬼ごっこだったと語って置く

ε≡ε≡ε≡ε≡ε≡、(；。○。ノアウアウ

こんな感じで走ってたな・・・

そして一言言いたい。
ひゅん

「(俺が一体何をした?)」

俺(作者)も知らないうちにフラグを立てていた件

つか、脚を部分強化した俺に追い付くとかどんだけ・・・

そう、結果を言うと俺は捕まった。

4時間目の真っ最中にな・・・俺は普通にサボってた。つか、アイツらもサボってた。「お前ら授業サボっていいのかよ!!」と質問するが鉄拳制裁で黙らされた・・・○(TへTO)　くう

まず「追いかけていた理由を教えろッ!」と叫び

2人は顔を紅くしながらかなり理不尽な理由(というか我儘)を主張してきた。

それに冷静なツツコミを入れたら、金色の拳と薬姫の注射器が火を吹いた。・・・頭にデカい瘤が出来、身体のあちこちに刺し傷が出来た・・・とだけ言っておこう

その後、捕まってからは2人とずっと腕を拘束され、無理矢理一緒に行動を共にさせられた。もちろん、授業中も・・・。しかも、何故かクラスの男連中からの死線と殺気が俺に一直線で伝わってきた・・・ここまでの苦痛は流石の俺も想定外だった。

原作キャラ2人とはぼ半日の行動するとか・・・俺の精神を殺す気なんだアイツら

終いには学校が終わった後に「家に遊びに来ない?」とか言い出す始末

・・・・・・ツ

バイバ~~~~~イヾ(・ω・)ノ”

学校の体育とかでは制御して使ってる身体能力をフルに活かし、周
囲の車を抜きその場から逃げただけ語って置く。

俺のチートの一つに『鍛えれば鍛える程上がっていく身体能力』が
あるのを覚えているだろうか？リアル鬼ごっこで逃げ続ける結果、
俺の体力、スタミナ、脚力が凄いいことになっていた

そして、次の日もリアル鬼ごっこは開催された……



鈴の日記

○月○日

平和を満喫しながら空を飛び、とあるマンションで寝ているところ
を拉致された……っばい。

目が覚めると知らない空間。雷鳴渦巻く紫とか黒色の空だった。俺

の中で平穏という文字が辞表から出て逝きかけたのはいい思い出。

『大嘘憑き』を2度使い、意気投合したプレシアさんの病気？病魔？を治した後、アリシアさん復活の儀式を行った

その後、アリシア、プレシアと共に仲良くなり、ジュエルシードを貰い受け離脱。アリシアは少しリハビリの必要があると自己判断した。足元が・・・ちよつと・・・ね

家に帰宅後、ベットに潜ると自分で「平穏をぶっ壊す発言をしていることがわかった」・・・このとき、本当に泣きかけた。

次の日 ○月○日

3日振りの登校

だけど、校門前に風神と雷神（3大悪女の2人）が降臨していたことは、いまだに忘れられません。正直、本物の風神雷神を目にしても、あそこまでの恐怖があるのかと激しく疑問でした。

その日にあった、風神雷神から逃げるリアル鬼ごっこは本当に白熱した戦いだったとここに書す

俺が口ごとえするたびにたん瘤と刺し傷が増えていったと言っておく



「ふう〜〜〜」

現在、家のベットの上でごろごろと転がっている

「プライベートだけは・・・絶対に守ってやる!!」

これだけは譲らない。何があっても・・・ネコミミ出現!!

～（||^:^）ノ☆ おやすみニヤ。

？ ただそれだけの為にネコミミを出した件（笑）

11話

「自分で自分の平穩を壊したかどうかと思うよ？」

因みに俺は絶望して

一週間に一回は更新したいと思ってる。

それに最近はDOG DAYSの二次創作を書いてみたいという気持ちが出てきて困ってる。

だから最近の水樹奈々さんのSCARLET KNIGHTにハマってます！

これからのストーリーじゃないしょ・・・？

12話 自分でもここまで意味のわからない物が書けるとは思わなかったよ P

タイトルにもあるようにここまで原作が崩壊しまくってるのは自分でもびっくりだった

見たくない人は見ないでください

本当に酷いですから・・・・・・・・

P V 62, 074アクセス

ユニーク 6, 733

お気に入り 83

ありがとうございます!!

12話 自分でもここまで意味のわからない物が書けるとは思わなかったよ P

あれから数十日程たったある日の朝、時刻は6時くらいだろう

だんだん夜が明けてきている。

そのとき俺は部屋でプレシアさんから貰った4つのジュエルシードを手に取り口の中に放り込んだ

俺の能力の『殲滅眼』で魔法攻撃などは吸収出来、レアスキルの『全喰者』で物理的な物は全て食べられると思つての行動だった。

つまり、ジュエルシードは魔力の結晶体な訳だから、食べれば自分の魔力は大幅に上がるのではないか?と思つたのだ

「あむっ・・・・・・・・ゴクンッ・・・・・・・・ツ!!」

体に違和感が出たのはすぐのことだった

体がどんどん熱くなり、強烈な痛みが右手首に集中してきた

だがまあ、一般の奴らの痛いであつて、俺は全くと言っていい程痛くないのだが・・・

気づいたら、体の熱さや痛みが無くなっていた……でも右手首に碧眼の瞳が4つ埋め込まれていた……は？

「どうしょ……これ、このまま学校に待っていったら絶対に悪魔に殺される……手袋していこ」

それから俺は白い手袋を両手にし、制服に着替えた

着替えた後に気づいたんだが、自分の魔力が溢れ出るくらい増えていた。急いで魔力を押さえ込んだ。そして今頃ジュエルシードの後味？みたいなものがしてきたが……美味だった



その日の学校は何事もなく終わった

まあ、ゴリラとヤンデレ……デレはないな。まあ、奴らとのリアル鬼ごっこで死にかけたのもあったが……はあ

後、今日……というか最近、悪魔は学校に来ていないようだった

まあ、俺としては嬉しい限りだった

だから、6時間目が終わると同時に学校を飛び出した。

家に帰ると平和って素晴らしいと改めて思った



それから数日たった日の朝、学校をサボって公園の木の上で寝ようとした時でした

曇った空を眺めながらちよいどいい気温だな〜と思い目を瞑ろうとしたら・・・空に魔法陣が浮かんでいた

「・・・・・・・・・・は？」

きよとん・・（＊・〇・）

今の俺の顔を見たらさぞかし笑えることだろう。なんたって口を大きく開けたまま数秒固まってしまった

魔法陣の上を眼を部分強化して見ると・・・

服装はスク水のような格好にスカートが付いており、黒いグローブをつけており、同じく黒い靴を履いている。そしてマントを羽織っており手には杖を持っている痴女

それとあのもふもふが何より特徴的なオオカミがいた

「・・・フェイトとアルフじゃん・・・あ、そういやプレシアさんが言ってたな『集めたジュエルシードはフェイトに渡しておく』って・・・仕方ない貰いに行くか・・・何故俺は原作キャラに何度も合わねばならんだ？」

自問自答しながらも、私服の背中に真っ赤な六翼を生やし、狐のお面を着けてフェイトの近くまでマツハで近づく

「よく元気にしてる？」

「ツ!?!・・・狐?・・・あつもしかして貴方がRIN?」

俺が話しかけたことにより魔法の発動は失敗したようだ。プレシアさんから聞いたのか?

「そうそう、プレシアさんから全部聞いたのか?アリシアのことやお前のこと」

「はい、聞きました。貴方が母さんや姉さんを助けたことも・・・RINさん、二人を助けてくれてありがとうございます!」

とびっきりの笑顔で答えてきた。今が凄く幸せなんだろうと確信し

た。

「おう、仲良く暮らせよ。……んで、ジュエルシード持つてる？」

「はい！二つ持ってます！それで、後6つがこの下の海にあると思います。母さんも探すのを手伝ってくれたので……」

「フェイト!!」

「あ、アルフ。この人だよね？私を治療してくれたのって」

いきなり近くに寄ってきたオオカミ……。ああ、貴方があの女の人ですか

「ああ、そうだよ。RIN、いろいろとありがとね。治療のこともだけどフェイトの家族のことまで」

……。何か気恥ずかしいんだが……。

「まあ、気にするな。俺のしたようにしただけだし……。つうか、フェイト。俺とお前同年だから敬語使わなくてもいいぞ」

「「え！？同年!？」」

アルフと揃って驚くなよ・。

「なんだアリシアから聞いてないのか?……。まあ、いいが、早

くジュエルシードをくれ」

「あ、はい。バルディッシュお願い《了解》……これです、どうぞ」

「ん、サンキュー……じゃあ、いただきます♪はむっ」

一口で丸呑み。前のように体がどんどん熱くなり、強烈な痛みが右手首に集中してきた

だが、そんなものには一回目でなれた。そして、フェイトとアルフよ。そんな目で俺を見るな恥ずかしいだろ／／／

「「何やってるの!?!」」

いや、何が？

「超美味い!!! おっ、出てきた出てきた♪」

右手首に新たに二つのジュエルシードが埋め込まれた。魔力がどんどん上がっていくのがわかる

「じゃ、ジュエルシードありがとな! お前らの役目はもう終わったから管理局? に行っていていいぞ。じゃあな! !」

そう言って俺は海へとダイブした。

上でフェイトたちがなにかを言っていたようだが、そんなことは無視だ

管理局 アースラ

それは

抹茶に砂糖をたっぷり入れて飲む味覚の狂った女性

リンディ・ハラオウン

その息子のKY兼マザコンの少年

クロノ・ハラオウン

「あの仮面の男は何者なんだ!？」

クロノが声を荒げる

「あの女の子：フェイトちゃんの関係者ですかね？」

エイミィは視線をクロノの母親で上司のリンディに向ける

「んーなんとも言えないわね……なのはちゃん、何か知らない?」

リンディはなのはに振る

「すみません。わからないです。ユーノくん、何か知ってる？」

「ごめん、なのは。僕も知らない」

「はぁ、困ったわねえ」

リンディが深いため息を吐き

再び全員の視線がモニターに戻されると

『ッ!?!?』

モニターを見ていた全員が目を見開き驚愕した

フェイトが持っているジュエルシードを仮面（お面）の男（鈴）に渡したことに驚いたが

その男がジュエルシードを口の中に放り込んだ（喰べた）のだ

モニターに映っているフェイトとアルフも目を見開き驚いているのがわかる

『ジュエルシードを食べた……』

ジュエルシード

――

ロストログア

それ（ジュエルシード）が大量の魔力の結晶体であることを知っている者は目を疑う光景だろう

実際、その危険度を知っているアースラ内の管理局員、クロノ、リ
ンディ、エイミィとジュエルシードを見つけ出したユーノ、そして
その危険度をユーノやクロノから聞いていたなのはモニター越し
に起きたことに目を疑っている

そして全員が思った

『あの男は危険だ』

一瞬時が止まったアースラ内に再び驚愕が表れる

モニター越しに仮面（お面）の男の右手首にジュエルシードらしき
物が6つ埋まっていた

「そんなッ！！ジュエルシードを取り込むなんて！！」

ユーノが声を張り上げるが、全員気持ちは同じだった

危険過ぎる

「あの！私、急いで現場に向かいます！！」

「僕も行きます！」

「お願いします！エイミィ、なのはさん、ユーノくんを転送して」

「了解！二人共、準備出来てるよね！？」

「はい、出来てます！」

「いつでも行けます」

「じゃあいくよ『転送』」

三人がアースラからフェイト達の元へ送られた時

モニターに映ったのは海へとダイブする仮面（お面）の男（鈴）の姿だった



目の前で鈴が海にダイブしたのを見届けたフエイトとアルフ

「……行っちゃったね」

「……ああ」

取り敢えず、これからどうするかを考える

だが、自然と目は海に向かってしまう

「ジュエルシード……食べてたね」

「うん……そうだな」

「……美味しいのかな？」

「フエイトは食べないでくれよ!？」

「いや、食べないってば!というか普通食べれないよ!」

と、アルフと二人で言い合っていると

「フェイトちゃん！！！」

聞き覚えのある声

振り返るとあの白い魔導師と茶髪の少年、それと前に勝負の邪魔をしてきた黒髪の少年

三人を見ると自然とアルフも身構える

あの子が居なければR I Nにもっとジュエルシールドをあげることが出来た

そう考えるとどうしても恨めしく思え、睨めつけてしまう

大好きな母の病気を治したくれたあの人

大切な姉を蘇らせてくれたあの人

そこで思い付いた

「(アルフ、あの子が持つてるジュエルシールドを奪ったらR I Nは喜ぶかな?)」

「(ちよっ、フェイト！？本気で言ってるのかい！？)」

「（え、うん。本気だけど？）」

「（はぁ・・・まあ喜ぶんじゃない？さっきも口元が笑ってたし、嬉しそうにしてたし）」

「（そっか：そうだよな。じゃあ、アルフ協力してね）」

「（はいよ）」

フェイトとなのはの視線が変わる

最初に口を開いたのはフェイトだった

「賭けて、ジュエルシードを」

「私は、話し合いに來ただけなんだけどな・・・」

「貴方が私に勝てたら・・・」

そこでユーノが叫ぶ

「なのは！彼女はジュエルシードを持っていない！！さっきの男に渡していたからジュエルシードを賭ける必要はない！！」

「・・・フェイトちゃん」

「私に勝ったら、管理局について行ってもいい」

「（ちょ、ちょっと、フェイト！本気かい！？）」

「（うん。もしもの時は母さんも一緒に行くって言ってたし）」

「（そういえば言ってたね）」

だから大丈夫と答えて、なのはの言葉を待つ

「わかった。約束だよ、フェイトちゃん！！じゃあ、始めよう最初で最後の本気の勝負」

フェイトは頷き、戦闘体勢に入る。

なのはも同じく戦闘体勢に入る

そこにアルフが近づこうとするが、それをユーノが邪魔する

「君の相手は僕だよ！」

「邪魔をするな！」

言葉を同時に右ストレートを放つがユーノは一瞬で結界を作り、防御魔法を展開させる

そして、少し離れた場所でも戦いは始まっていた

なのはのピンクの光とヘイトの黄色い光が何度も衝突している

それでも鈴の叫び声に怯えて遠くの方から鈴を見守ってる魚もいる

実は鈴は普段の日常で自分の平和な空間が3悪女にバレていない自室しかないことで悩んだことがあった

だが、その時に思い出したのが太平洋と一緒に横断したシャチ達

自分は魚類と話せるとわかり、海に行き、水中にダイブ、魚達と親睦を深めたり、人生相談に乗ってもらったり、自分の人生相談をかなり真剣に魚達に話していることに絶望したり

いろいろなとお世話になっていたのだ

鈴もお返しにちょっとしたエサなどを配っていたり

そのときに仲良くなったたり、友達?になったりした魚達が今鈴の周りに集まっているのだ

あれから30分程たって、やっと叫ぶのを辞めた鈴

「ああ、喉が痛え・・・・・・・・うむ、やはり美味しいな！！って、また魔力が増えてやがる・・・・・・・・はあ、さっさと抑えるか」

魔力を押さえ込んで、魚達にお礼を言い終わり

お面を着け直して

さて、いい加減海から上がろうと海面まで上がり顔を出すと・・・・・・・・

「・・・・・・・・・・・・・・・・W（。；）Wワオッ！！」

え、何・・・・この状況？

何故に悪魔とフェイトが戦ってらっしゃるの？俺、管理局って場所に行っていてって言ったよね？

そして淫獣とアルフ・・・お前らは何で意気投合した感じで戦いを眺めてんの？

何、この状況・・・マジで訳わかんない

俺の部分強化した目に映るのは淫獣とアルフが二人揃ってこの勝負を眺めてる姿

と

勝負をしている悪魔とフェイト・・・ってあれ？フェイトさん、何か負けそうじゃね？

ネコミミを出すと

「くっ、バインド!？」

フェイトの両手両足にリングのような物がついてた

え、フェイトさん動けないんスか？そんな必死な顔で・・・・・・・・あ、フェイトと目があった

反射的に目を逸らし、別の方へ向くとアルフと淫獣と目が合ってしまった

取り敢えずアルフに手を振る。あっ振ってくれた

とか思っていたら、上から声が聞こえた

「これが私の全力全開、スターライト：ブレイカアアアーーーーー
「!!!」

大きな魔法陣からピンクの光が放たれ、それはフェイトに直撃。さらには海にまで到達し大きな大きな津波が出来ましたとき………
………テラヤバスッ！！！！

W—；。ロ。—W　ヌオオオオオ！！

とにかく逃げる！！水面から一気に飛び出た俺は一瞬で六翼を展開させ、もの凄い速さで帰宅した

後ろで淫獣フェレットとアルフが叫んでいたがんなもん知るか！！

その後のフェイトたちのこと？んなこと気にしてられるか！！さっき淫獣と目が合ったんだったよ！！このままじゃ捕まっちゃうんだよ！！当初の目的は昼寝だったのに、何故かフェイトさん発見！ジュエルシードの味を思い出した俺、フェイトに接近&いただきます！そのまま海のお散歩………俺、何やってんだよ……？

ま、まあ途中からは面白そうだったからいいんだけど……やっぱ失敗した。平和な人生を目指してる俺が一番やっちゃいけないことだったんだ……グスン。たしかにジュエルシード沢山ゲットしたから結果オーライ……なのか？

つか、この体に残るこの違和感は何なんだ！？

ヌガーーーーッ！！やっぱり今度から面白半分でするのはやめよう。
うん。うん、絶対。

という訳で、次からは自分の平穏と平和の為にだけ行動しようと思
意した

つうか俺の作戦の『平凡？だからどうした！！平穏と平和が一番大
作戦！！』って覚えてるか？『目立たず、焦らず、関わらず。常に
緩く怠く人生を謳歌しろ』というテーマを持って平々凡々な平穏を
望み、平和な人生を送ることを目的とした俺の人生テーマだ

俺の作戦はもう無くなったの同然だった。泣ける

はぁ・・・さっさと帰って寝よう。全て忘れよう。不貞寝だ。

明日からまた学校休も

そして、いまだに何故アリサとすずかから追いかけてるのかが
分かってない鈴は

2人がまた風神雷神になるとは夢にも思わなかっただろう

12話 自分でもここまで意味のわからない物が書けるとは思わなかったよ P

ね？酷かったでしょ？

できれば感想などを頂けると嬉しいです

13話 どうしてこうなった………(前書き)

超無理矢理で書きました

でも一生懸命がんばったんだよ？

よかったら見てください

お気に入りか100を超えるなんて………幻覚なんだろうか？

13話 どうしてこうなった……

あれから結構時間がたった……と思う

俺はというと学校をサボって町にある図書館で本を読んでいた

もちろん朝昼晩そして翌朝まで永遠と本を読みふけていた。結構な数の蔵書があったんだけど

俺の瞬間記憶能力を使えばこれくらいの蔵書は数日で読み終わってしまった

歴史、言語、世界、小説、経済、料理など……つか、大学卒業までの勉強を全て終わらせてしまった

自分の中に大量の知識が入ってくるのがわかるのは嬉しい限りだ

学校を進学なんてしたくないからな。目指せニートマスター!!

後、一つ付け加えるとすれば図書館で車椅子に乗った少女に出会った。名前を八神はやて。同じ年で何故か関西弁だったww

本の趣味というか図書館の蔵書を全読破した俺とはいろいろと話しが合うようで図書館で俺を見たら絶対に話しかけてくる。

まあ、はやては普通の極めて、普通、の女の子だったので仲良くしている。

俺の女の子？の知り合いはというと

超馬鹿デカイ砲撃を人に向かってブツ放す悪魔 高町なのは

何故か最近やたらと怒っている超凶暴な金色の暴君 アリサ・バニングス

同じく何故か最近やたらと俺を見るとすぐに注射器片手に無表情で襲ってくる薬物兵器こと薬姫 月村すずか

ブルッ

背筋が寒くなった
考えただけでも恐ろしい

一度だけはやての車椅子を押して図書館の外へ出たんだが

はやての知り合いらしき人が来ていた。

長いコート？を着ていた。どうやら付き添いの人らしい。

取り敢えず自己紹介をすると、名前はシャル。外見は金髪で肩にかかるくらいに伸びている

この外見だったから外国人かと思ったらはやての親戚だった

何をどうすれば関西弁少女が外国人と親戚になれるんだとすごく疑問だったww

次の日の夕方にはやてと話していると葉姫が図書館に来ていた。しかも偶々目が合ってしまった。

俺は気がつくとも全力で逃げ出していた

しかも隣町まで・・・

もう帰るの面倒だったから

海の中で1日を過ごしてた



数日後

さて、久しぶりに学校に行きますかと思ひ朝早くに学校にいくと

またリアル鬼ごっこが開始された

だが、今回は悪魔も俺を追って来た

お前学校に来てたのかよッ！！

と内心ツツコミながらも逃げ回った

まあ、暴君と葉姫は怖かったけど悪魔はあくまでも2人を手伝うみたいない役をしていた

で、いろいろあつて捕まった訳ですよ

いや、流石の俺も教師までもが敵だとは思わなかったよ

因みに今は悪魔、暴君、葉姫に囲まれた俺は逃げ場をなくし拷問を受けた後

ビデオ撮影に参加させられていた・・・why??

「私のお友達にフェイトちゃんとアリシアちゃんって子がいるんだ。でも普段は外国にいるからビデオメールしてるの」

悪魔が説明してくれた。てかあの4人無事だったのかよ
ブレンシア・アリシア・フェイト・アルフ

「説明感謝。そして腕を離せ」

「「いやよ（ダメだよ）」」

「理不尽だ・・・何故俺に関わりのある奴らは全員肉食獣なんだ・・・?」

つかとつくに録画始まつてるのに

ガスッ スッ

「痛ってえ!!! つか金色! 頭殴るの止めろや!!! そして葉姫! お

前も刺すのを止める!!俺の身体とくに注射器のせいで穴だらけだから!!?」

「「あたし(わたし)の名前はアリサ(すずか)だって言ってるでしょ!!!」」

何故殴る・・・そして悪魔殴るの止めさせろ

「じゃあ、鈴くん自己紹介してくれる?」

無視とかないわww

「はあ・・・しなくちゃダメ?」

「「ダメ」」

もう嫌・・・

「え」と初めまして夜風鈴です。多分2人と同じ9歳児。基本的に何処にでも居る人生を無気力に過ごしている平々凡々な無気力少年だよ。そして!ここからは真面目な話だ!!しっかり聞いてくれ!!!!!!」

いきなりの俺の叫びに3悪女も驚きながらも真剣な顔付きになった。

そんな中俺は発言する！

「今、俺の周り…いや、知り合いの女の子…：本当に女の子かどうかはわからない、が！「ガスッ」な？どう思うよ自己紹介途中でいきなり殴ってくるって…：おかしいと思わね？しかもいまだに殴り続けてるんだぜ？これでわかっただろ？俺の周りの女の子は普通じゃないんだ！！だから頼む、君達はまともで普通の女の子でいて下さい！マジお願いします！！…：…：つうか痛えつつってんだろぅが！暴君！否、ゴリラてめえ！！あ、すまん、誤る！誤るってば！誤るからその手に持っている机を降ろせ！！流石に死ぬわッ！！つか、薬k…：ゴホン…：…：すずか！お前も注射器を取り出すな！！…：そんなで悪m…：なのは！笑ってないで少しは止めるの手伝えや！！」

お前らこれが録画されてるの気づいてるか？

「ゼエ…：ゼエ…：と、いう訳で普通の子だったら嬉しいですよ…：これで終わるわww」

「フエイトちゃん、アリシアちゃん。このビデオと一緒に写真も送るからねー！！」

悪魔が最後の言葉を言う

「「またね!!」」

やっと終わりか・・・さっさと帰ろう

ガシッ

「写真撮るって言ったでしょ？」

え、俺もなの？初耳なんスけど？

「・・・逃げるっうえっ!!」

ダッシュで逃げる俺の襟を掴む葉姫

「一緒に写真撮ろうね!鈴くん♪」

そんな輝かしい笑顔を俺に向けるな俺が蒸発してしまうジャマイカ

そんなこんなで撮影も終了

「もう・・・いや」

その眩きは誰にも聞こえず

写真が恐怖になりそうだった・・・。



写真撮影から数日が過ぎた頃ある場所に荷物が届いていた

「フェイト、荷物が届いてたわよ」

「ありがとう、母さん・・・あ、なのはからだ」

笑顔になるフェイトを微笑ましく見るプレシア

「ふふっアリシアとアルフも混ぜて一緒に見ましょか」

「うん!!」

そう、その人達とはプレシア・テストロッサとフェイト・テストロッサの2人だ

フェイトの姉であるアリシアや使い魔であるアルフもいる

あのにフェイトが管理局に捕まったことを知ると、プレシアはすぐに自分も管理局に降った

その後、フェイト共々、クロノやリンディに事情聴取などを受けた2人はアリシアのことやプロジェクトFについても包み隠さず話した

そして今、時空管理局が一番欲しい情報をプレシアに尋ねた

プレシアは知っていることは全て話した

種族は不明

RINと名乗っていた

死んでいたアリシアを甦らせてくれたなど

ジュエルシードを渡したことも

その中で真っ先に反応したのはクロノだった

何故ジュエルシードを渡したのか、と怒鳴りつけた。プレシアもアリシアを救う為の交渉だとお互いに譲らなかった。

それこそ途中でリンディが止めなければ戦争が起きていたかもしれない程に

だが、場を納めたリンディはプレシアにあることを尋ねた。

それはアリシアを甦らせたとはどういうことか・と・プレシアが過去に起こした事件の真相についてだ

プレシアは正直に話した。それはフェイトやアリシア、アルフと一緒に仲良く過ごしたいが為であった

R I N（鈴）からも4人仲良く暮らせと応援されていた。

故に罪を被ってくれる彼の為にも何としても罪を少しでも軽くしようとしているのだ

彼の能力とプレシアが関わっていた事件の真相を話し終えると

現実を虚構にする力にクロノとリンディは驚愕し、そんなことを知らなかったフェイトも驚いていた

そしてプレシアが起こしたとされる事件の真実も自身の口から話した

計画の失敗で起こった事件を全て担当の主任や上司達に押し付けられ、犯罪者に指定されたと

結果だけ言っているとそれは本当だった。管理局のメンバーが4日間徹夜で調べてくれたのだ

そして、事情聴取も終わり、裁判を受け、結果的に無罪となったのだ

だが、ジュエルシードを保持しているRINは一時的に指名手配さ

れることになってしまったが・・・

プレシアとフェイト、アルフ、アリシアは申し訳ない気持ちでいっぱいだったが、これはR I Nの意志だと割り切っていた

そして現在は管理局の保護管理下に入っている

ビリビリ

フェイトが発送されてきた物を開けると中には写真とビデオテープが入っていた

フェイトはなのはから届いた写真に目を移す・・・・・・・・。。

首に両サイドから注射器が、後頭部に鈍器が突きつけられている・・・。。

「何やってるの、なのは!？」

そう、両サイドから注射器を突きつけているのはすずかとなのは鈍器を突きつけているのはアリサ

。そんな三人に囲まれた人物は、写真の中心に写っている……。

その人物は多分3人に無理やりやらされたピースサインを作っている。

額に光っているのは冷や汗かな……。

そんな人物は手に抱えてる紙を指差している

『詳しくはビデオを見てくれ。そして助けてくれ!!』

と書いてあった

取り敢えずフェイトは無言で姉と母、使い魔に写真を見せる

アリシアとアルフは何とも言えない表情を

プレシアは驚愕の表情を

「?どうしたの母さん・・・?」

「!・・・いいえ、何でもないは・・・ちょっと、疲れてるのかしら・
・・・?」

頭を抑えながらため息を吐くプレシアを心配そうに見る3人

プレシアがこうなるのも無理はない。だって写真にはあのR I Nが
映っているのだから

まあ、それは置いといて、本来の目的であったビデオメールの鑑賞
会を4人で始める一同

飛ばします。だって同じ分見たくないっしょ? b y 作者

『・・・・・・・・』

何とも言えない空気がテレビの前の4人に流れる

フェイト、アリシア、アルフの三人はいろんな意味でビツクリ過ぎて

プレシアは聞いていたことよりもあまりに可哀想過ぎることにR I
Nに同情して

この無言の何とも言えない空気は暫くの間続いた

13話 どうしてこうなった………(後書き)

自分のバカ加減に絶望した

14話 三つ編みとぬいぐるみと恥体者とかいろいろなのかな？ しらねえよ

どないしょ・・・どころへんからA, Sなのかわからない・・・
O
r
Z

14話 三つ編みとぬいぐるみと恥体者とかいろいろなのかな？ しらねえよ

あの悪夢のような（悪魔は居たけど）撮影会の次の日

曜日にして土曜日のお昼前

現在、俺は町にあるゲームセンター朝から籠もっていた

ゲーセンの中にあるクレイゲームで店内の動物のぬいぐるみをGetすると俺の周りにはビックサイズの袋が6袋できた

中身はもちろん動物のぬいぐるみだよ♪

日頃のストレスを発散させていた。だって動物って可愛くね？このぬいぐるみ達が俺に癒やしをくれるんだ！

ちょうどあるゲームの最後の動物のぬいぐるみを取り終えた頃、ゲーセンの店員が店長を連れてやってきた

泣き土下座しながらもう二度と来ないで下さいと頼まれた

このままだと店が潰れてしまうと何度も頭を下げられた

はあ、仕方ないのため息混じりに返事をし店を出る・・・と

ゲーセンの入り口にもクレインゲームがあつたしかもウサギのぬいぐるみ!!!!

超可愛い！早くプレイしよう！と思ったが、

ゲームに張り付いて中のぬいぐるみを覗き込んでいる女の子がいた

赤い髪を二つの三つ編みにしている娘だ

足元には犬・・・狼？っぽいモフモフの生物

超触りてえ・・・・・・・・だが！今はゲームが先決じゃあ！！

俺は周りに置いてある袋を持つと女の子の隣に無言で立ち、コインを入れた

3分後

俺が華麗なるゲームテクニックで次々とウサギ達を狩って（取って）いると

いつの間にか俺たちの周りにはギャラリーが出来ていた

え、マジで？

最も俺はギャラリーが出来ている何て気づかなかった。教えてくれたのは隣に居た女の子だった

「おい、後ろに人集まってるぞ」と言って教えてくれたのだ

まあ、その頃には完全勝利よろしく全ウサギ達は我が手中にあった

だが、そこに奴が現れた！！

俺は肩を叩かれたので、振り向くと

周りに居るギャラリーの存在何て気にもしないで

涙をダラダラと流し
土下座しながら

「お、お、願わずがら、ぼんどうに……もう、やめでござい」

と、言う店長の姿があった

周りの視線が痛い！

そしてこの店長……可哀想過ぎる！！いい大人が小学3年生のガキ
に向かって泣きながら土下座だぞ？

何の罰ゲームだよ……

俺は口の端をひくつかせながら

今すぐこの場から逃げ出してしまいたいと俺は隣の三つ編みと犬・
・モフモフを見る

ちょうど向こうもこちらを見ていたように視線が合った

「（三秒後に全力で逃げるぞ！）」

「（わかった！）」

一瞬で伝わる同じ意志

ああ、素晴らしきから目と目で伝わるコミュニケーション

※ただのアイコンタクトです

3 財布をズボンの中にしまい

2 足下にある動物のぬいぐるみの入った8つの袋を両手で掴み（ウサギ達で袋が増えちゃった）

1 俺、三つ編みの女の子、モフモフが動く体勢をとる

0

ッ！！二人と一匹は一斉に走り出した

そこにいたギャラリィ達？途中で何か殴り飛ばした気がするが、知るかそんなもん！！取り敢えず逃げる！ダッシュで逃げる！！

隣の女の子も結構必死に走ってる。額付いてるのは汗だろう

モフモフは流石だ、早い

俺たちは全員揃って途中の公園に逃げ込んだ

「・・・・・・・・ふう、疲れたあ」↑鈴

「はぁ・・・・・・・・はぁ、はぁ・・・・・・・・（何でコイツ息切れてないんだよ）」↑三つ編み

暫く無言で息を整えていたが

「・・・・・・・・お互い、災難だったな」

「・・・・・・・・ああ、そうだな」

「俺たち二人と一匹は同じ恥ずかしさを体験してしまった強者と言うことだな。つまり恥体者（ちたいしゃ）同じ恥ずかしさを体験した者）」

「変な言い方すんじゃない?!」

「いや、事実だろ。見ろ、お前の隣のモフモフを」

「モ、モフモフ?」

「ああ、その狼?のことだ。そいつの名前とか知らないしな。あ、俺は夜風 鈴。よろしく三つ編み」

「・・・三つ編みじゃねえ、ヴィータだ。んで、こっちはザフィーラだ。因みに狼だからな」

「おう、よろしくな。それにしても・・・あっちうな・・・」

「その意見には同感だな・・・正直、この熱さは以上だ。ザフィーラ何て見てるだけでも熱くなる」

「(悪かったな)」

「(あゝ、すまん)」

「取り敢えず日陰で休もうぜ」

「賛成だ」

ん？日陰にヴィータとザフィーラと一緒に移動しようとした時、視界にあるものが映った

「ちょっと先に行っててくれ」

「お待たせ」

「遅えぞ！ったくどこに行って・・・や、がつ・・・た・・・」

ヴィータが俺を見て固まった。正確には俺の手にあるものを見てだが

「うん。うまい！」

無難にバニラ味をチョイスしたんだが・・・うまいな

「・・・」

無言でこっちを見てくるヴィータ

「ん？ 欲しいのか？」

「・・・べ、別に欲しく何かねえよ!!」

と言いつつも目線はアイスから外さない

「アイス好きなのか？」

「いや、だから・・・その・・・」

言いよどむヴィータ
だが・・・

「因みにこのアイスは8段まで可能だ」

「ッ!!!?.....金がない」

うおっ落ち込み具合がハンパねえ!!

自分の財布を覗き込みお小遣いが無いのを知るヴィータ。どこぞの
ボクサーよろしく真っ白に燃え尽きていた

仕方なしにヴィータの前に千円札を二枚出す

「・・・・・・・・何だよ?」「はあ・・・、さっさと買ってこい」へ?
・・・・・・・・いいのか!? 「良いから早く行って来いよ」すぐに行っ
てくる!!」

早ッ!!

残された俺はザフィーラの毛を撫でながら呟いた

「お前も大変だな・・・」と

それから帰ってくるのが遅いヴィータをザフィーラと待っていると

ふと思い近くにあった木を一本蹴り倒した

そして忍法・爪合わせで爪を少し伸ばし、木を削り、少し大きめのお椀を作った（大きさはエサ入れくらいです）

それを公園の水道で洗っているとちょうどヴィータが帰ってきた

「おい鈴！ザフィーラの分も買ったけど良かったのか？」

「ああ、ザフィーラのも買って来てくれたのか。サンキューこのお椀に入れてくれ」

先ほど手作りしたお椀を取り出す鈴

「・・・それ、どうしたんだ？」

「は？普通に造ったけど？・・・っと、はい。ザフィーラも食べ、お前も暑かったろ？・・・そしてヴィータ、お前はそんなに食べるのか？」

「あつたりまえだろ！こんくらい楽勝だつて！」

そんなことを言うヴィータの両手には6段アイスが二つ握られていた

・・・そういえば・・・

「ヴィータ、コイツ二匹くらいいるか？」

そういう俺が袋から取り出したのはさっき取ったウサギのぬいぐるみだ

ヴィータがゲーセンのケース前で凝視していたのを思い出したのだ

「ッ！いいのか!？」

「あ、ああ、たくさんあるしな・・・ほれっ」

ポイツ 投げる

ガシッ キャッチ

「おおっ、可愛いな。お前やっぱいい奴だなッ!!!」

お互いに握手をした

こうして俺達は友達になった。もちろんザフィーラもだ。

俺としても普通の女の子の知り合い・・・いや、友達が増えるのは嬉しい

今のところ・・・はやてしかいなかった

自分の周りの少女達を思い出し絶望してorz状態になった俺を心配してくれたヴィータに思わず抱き付いてしまった。こんな些細な事が凄く嬉しいんだ！

まあ、抱き付いた後にヴィータに殴られたが・・・今回は殴られても仕方ないと分かってるのでヴィータに悪口は言わない

それから他愛のない話しをしているとヴィータがいきなり「うつ、お昼の時間過ぎてる・・・」その言葉にザフィーラが震えた気がした
それからは電光石火のように早かった

ヴィータとザフィーラはもの凄い速さでアイスを頼張り、「今日はありがとなッ!!」と言い残し一人と一匹はもの凄い速さで走って帰っていった

意味わかんねー

その後、帰宅した俺は部屋中に景品のぬいぐるみを置き、昼寝の準備をするのだった



鈴と別れた後のヴィータとザフィーラはそれはもう本当に電光石火じゃないかと思う速度で帰宅していたが、ちゃんと会話していた。もちろん念話で

「(ヴィータ、鈴のことで少々確認しておくことがある)」

「(確認?・・・あいつ何か問題でもあったのか?)」

「（いや、そういう訳ではないのだが・・・あれは唯の人間とは思えない）」

「（・・・ということだ？）」

「（お前がアイスを買に行った後のことだ。

鈴が我のお椀を造ってくれただろう？ あれは近くにあった木を蹴り倒して造ったものだ

お前は唯の人間が木を一本丸ごと蹴り倒すことなどできると思えるか？」

「（そういやあのお椀やけにキレイだったな・・・いや、そりや無理だろ）」

「（もう一つある。その倒した木を使って造ってくれたのだが、奴は自分自身の爪を使って形を整えていた）」

「（は？爪？）」

「（ああ。確かだが忍法・爪合わせとか呟いていた。

直後に鈴の爪が2m弱伸び、それを短くし、形を整えていたのだ。

・・・あれはもしかするとシグナムのレヴァンティンよりも切れる可能性がある。・・・おそらく、貫通力では槍でも適わん」

「（本当かそれ！？）」

「（ああ、だが、魔力は感じられなかった。魔導師の線はまずないだろう・・・ただ？）」

「（ただ？）」

「（・・・我らと同じ血の匂いがした・・・。それも相当な数を殺さなければ付くことのない強い濃い匂いだ）」

「（そうか・・・鈴って多分、はやてと同年くらいだよな？）」

「（おそらくそれくらいだろうな）」

「（あの年でザフィーラの言う通りだとしたら結構ハードな人生送ってる事になるな・・・）」

「（確かな・・・着いたぞ）」

既に家の前に到着していた

「（このことははやて達には内緒にしておくか）」

「（それがいいだろう）」

「（・・・さて、ザファイラ。覚悟はできたか?）」

「（・・・ああ）」

こうし一人と一匹は閻魔^{はやて}の待つ地獄の門（家の門）を開けた

それから、はやての説教が続いた。途中でヴィータがアイスを買って貰ったことがバレ、ヴィータがザファイラも食べたと裏切り、説教の時間が長くなった・・・

その後、やっと昼飯を食べ始めたヴィータが、アイスの食べ過ぎで腹一杯とか言い出すもんだから、はやてが一週間アイス禁止令をヴィータに下した

八神家の掟

基本的にみんなで一緒にご飯を食べましょう

無理な理由がある場合は事前に連絡を入れておくこと

そして、その日ウサギのぬいぐるみを抱きしめたヴィータの姿が発見された。・・・顔を物凄くだらしなく緩ませてだが

今日も八神家は平和です

14話 三つ編みとぬいぐるみと恥体者とかいろいろなのかな？ しらねえよ

いい加減この小説のタイトルをちゃんと決めたいと思った今日この瞬間。

何かいいの不是吗？

どなたかいいのがあったら教えて下さいな（ー〇〇〇ー）

15話 人は誰も馬鹿なことをしたなあ…と後悔したことがある！おれの場合

クオリティの低さに全俺が泣いた。いや、全俺はいつでも泣いている。

誰かアドバイспリーズ！！

えーと、更新遅れちゃってすみません。ちよつといろいろあつて更新するの忘れてました。取り敢えず、タイトルのとうりです。

15話 人は誰しも馬鹿なことをしたなあ…と後悔したことがある！おれの場合

何か知らんけど気付いたら時が進んでいた……これがキングクリムゾンというものか……

俺はこれまでもいつも通り学校をサボったり（平和を噛み締め）、風神と雷神に追いかけられたり（死にかけた）、図書館ではやてと話したり（葉姫とエンカウント・即ダツシュ）、偶々会ったヴィータやザフィーラとアイスを食べたり（ヴィータ、家に帰るとはやてに説教）といろいろなことがあったが普通に過ごしていた。

これが自分の日常なのだと思うと尻に熱いものが込み上げてくる。

そんなことを考える度に絶望してorz状態になるなんて1日に4回以上はある。

だから、取り敢えず言って置きたい！

俺の平穩はどこに逝った！！

え？既に漢字が違う？あっはっは、違わねーよ……自分でも悲しいことに合ってるんだよ！！最初は気のせいだと思っていたんだ・・だけど・・・・日を重ねる事に俺の平穏と平和への被害がどんどん増えてるんだよ。主に3悪女達によって。常に鈍器と注射器ってなんだよ！？どこの小学三年生がそんなことしてんだよ！？

・・・・あ、此処にいるじゃん

とかがあったりした。マヂ鬼畜すぎる俺の日常・・・・o r z

だが、まあ、ヴィータとザフィーラもはやての親戚ってはやてに聞いたときは本当にビックリした。向こうも俺がはやてと知り合いだと知ってビックリしていた。一度はやての家に招待されたこともあったが、なんでももう一人いるらしい。だけどちよつと用事があったて居ないようだったので、後日ということになった。シャマル、ヴィータ、ザフィーラそれとあと一人・・・・ははやてって何気に大家族の長だった

まあ、その後日偶々散歩してたらその一人に会ったんだけどなwwww。名前をシグナムというらしい。だが何より焦ったのは出会い頭一発目で俺に「何か武術をやっているな？」と言ってきたことだった。しかも何やら興奮していた様子だったし、鼻息は荒いし、目を輝かせながら迫ってくるんだぜ？

怖くて恐くて必死に逃げ出した

今更ながら思い出したんだが俺には『鍛えれば鍛える程上がっていく身体能力』があったんだった。

そして思い返せば風神と雷神との幾度にも及ぶ超リアル鬼ごっこ。少しは身体を動かそうと思いつけていた虚刀流の稽古。etc. etc. etc.

俺の身体かなりやばいことになってんじゃね？

俺のスタミナとか脚力とか以上なことになってるんじゃ・・・

だって、あのリアル鬼ごっこを学校ではほぼ毎日だぜ？最近、登校して一番にすることが奴らを警戒せることになっている。

悲しいことに奴らは平和を求め、そして平穩に暮らしたいという俺の囁かな願いですら壊そうとしてくるのだ。

一瞬でも気を抜けば殺^ヤられる覚悟で逃げてるもんだから必然的に逃げる時は常に全力ダッシュだ。逃げるのに必死過ぎて部分強化をするのすら忘れてたからな・・・というか部分強化しなくても俺の身体って結構チートなのに何故奴らは俺に追い付いて来れるんだ？

・・・謎だ・・・ちょーこええもん。しかも最近は悪魔も参戦してきやがった・・・誰かたすけて・・・！！！！

・・・因みに結果としては。日本一周してきました。

だが、2日・・・1. 5日で帰って来れたことにはかなり驚いた。そして自分の身体の出来に絶望した。

どんだけだよ・・・汗もかかずに日本一周とかマジないわww俺、今度から種族とか聞かれたら化物とか怪物とかそう言おう。うん、そうしよう。



それは、学校も行かずに隣街のゲーセンに行った帰りのことだった。

もちろん両手には大きな袋がたくさんある。中身は・・・まあ、わかっていると思うがぬいぐるみだ。

そしてまたもやゲーセンの店長から泣き顔で土下座された・・・
近い内に付近のゲーセン全てから入ることを禁止にされそうな勢い
だな・・・はあ、俺のちょっとした楽しみが・・・3悪女た
ちに傷つけられた俺の心を癒してくれる可愛い動物たちが・・・
グスン

街に帰って来て、住宅街を歩いていると・・・周りに居た俺以
外の人達が突然いなくなった。ついでに言えば何か結界が張られて
いた。

・・・ヤバくね？

俺の中で警報が鳴る。しかも超危険な感じだ。

・・・ヤバイぞ・・・これはヤバイ！！今までも3悪女達に会う
前は危険を察知したりしていたが、今回はそんなもんじゃねえ！！
N・A・N・O・H・Aなみに危険だ！！

急いでお面を顔に付け、両手にある袋を握り締め走り出す。

・ ・ ・ ・ ・ そうとした時に、目の前に甲冑を着て、剣を持ったピンクのポニーテールの女性。 ・ ・ ・ シグナムが表れた。

「え？」

ちよつ、どゆこと？ 何でシグナムさんが此処に居るん？

あれ？ この結界の中って一部の奴らしか入らなかったよな？ 悪魔^{なのは}、淫獣^{ユート}、痴女^{フェイト}、犬^{アルフ} ・ ・ ・ あとは管理局？ とかだったはず ・ ・ ・ ・ ・ 。
んで、おそらく結界に入れる奴は、ほぼ全員、リリカルのメインキヤラ達と言うことになるわけだよな ・ ・ ・ ・ ・ 。 まあ、悪魔^{なのは}、淫獣^{ユート}はわかってたけどさ ・ ・ ・ ・ ・ 痴女^{フェイト}、お前もメインキヤラかよ！ ？ 今の今までずつつつつつとモブキヤラだと思ってたのに ・ ・ ・ ・ ・ 。
 ・ ・ ・ ・ ・ ン？ あれ、ここである疑問が生まれた。じゃあ何でシグナム様はこの結界の中にいらっしゃるのでしょうか！！

・ ・ ・ ・ ・

・ ・ ・ ・ ・

・ ・ ・

・ ・ ・ ・ ・ つまり、この御方もメインキャラの一人つと ・ ・ ・ ・ ・
O r z

俺が突然O r z状態になると前に居るシグナムさんが怪訝な表情でこっちを見てきた。

・ ・ ・ ・ ・ ん？ここでまた新たな疑問が生まれた。シグナムさんがメインキャラの一人。そして、シグナムさんといえば『はやての親戚』。では、はやての親戚といえど『ヴィータ』『ザフィーラ』『シャマル』。ではその親戚達の親玉であるあやては何者なのか。ボス

・ ・ ・ ・ ・ 「あいつらもメインキャラなのかよおおおおおおおおおおおおお！！！！！！！！！！」

俺の叫びにビクリと一瞬だけ怯むシグナムさん。

だが俺はかなりヤバイ状態になってしまった。今まであくまで普通の女の子だと思っていたのはやて。普通の女の子の友達であるヴィータ。同じく友達のザフィーラ。そして、散歩や買い物でよく逢い、いろいろと話しているシグナム、シャマル。学校をサボって図書館でお互いの面白い本について話すはやて。

こいつらが全員……全員が原作のメインキャラだしたら・
・かなりヤバイ!! 俺は今まで普通の生活をするために頑張って
来んだぜ? なのに知り合った奴らが全員原作キャラでした、テヘツ
(テヘペロ)。とかどう思うよ? 俺の頑張りが全て水の泡。

「あっ、待て!! 逝くな!! 逝かないでくれ!!」

俺の目の前を平穩の文字が横切ったのが見えた。それはどんどん遠
くへと飛んで行き、……。幻死した……。



自分達の主である八神はやてを救う為、ヴォルケンリッターの将。
シグナム、ヴィータ、シャマル、ザフィーラは魔力の徴集を行って
いた

八神はやては病気だった。いや、病気だと思っていた。このことに
気づいたのがヴォルケンリッター達だ。

闇の書が存在がはやてに害をなしていると理解した彼らは、このま
までははやてが死んでしまうことを知った。

※超適当に説明終わらしたけどこれでいいのかな？ B Y 作者

それから直ぐに行動を起こした。彼らは散り散りになり、魔力の徴集を続けた。

そんなある日、いつものように魔力を探していると

結界の中で二つの魔力反応を見つけた。どちらも馬鹿みたいにデカい魔力だった。

もちろん、発生源はなのはと鈴。だが、鈴が魔力を持っているなんて、そんなことをヴォルケンリッター達が知ってる訳がない。

鈴はロストログア認定されているジュエルシード（大量の魔力の結晶体）を12個も取り込んでいるのだ。

当然、取り込んだ鈴は馬鹿みたいに大容量の魔力を身体に宿してある。

だが、鈴はその馬鹿みたいに多い自分の魔力をずっと押さえ込んできた。

理由は言わずも分かるだろうが『俺の平穏を乱す奴らが狙ってやってくるかもしれねえ！！それだけは阻止してやる！！』と言う訳である

八神家に住む人々はみんな鈴とは仲良しだ。基本的にはやてやシャマルと世間話、ヴィータとはアイス仲間、ザフィーラとは一緒に散歩、シグナムとは……危険察知？という間柄である。

本日、行動しているシグナム、ヴィータ、ザフィーラは三手に別れることにした

そして魔力反応の主は直ぐに見つかった。見つけたのはシグナム。相手は子供だった。自分の主と対して変わらぬ背丈をしている少年だ。

だが、その人物はお面を着けていて顔がわからない。

シグナムはその少年の前に姿を表す

少年は何かぶつぶつと呟いたり、地面に膝をついて深いため息を吐いたりという意味のわからない行動をしていたが突然

「あいつらもメインキャラなのかよおおおおおおおおお！！！！！！！！」 「あつ、待て！！逝くな！！逝かないでくれ！！」

と、叫び声を上げた。

突然のことで驚いたが、今は魔力を奪うことが先であると気を引き

締め、シグナムはお面の少年に

「(すまない。恨んでくれても構わない)」

と、心の中で呟き

剣を振り下ろした

15話 人は誰しも馬鹿なことをしたなあ…と後悔したことがある！おれの場合

次の更新が何時になるのか激しく疑問だ

16話 ☆、デバイス、そしてまさかの「お久しぶりです」(前書き)

更新遅くなってすみません。

予約投稿の日程間違えました？

今回は今までで一番長いです。その代わりぜんっぜん面白くないですorz

16話 ☆、デバイス、そしてまさかの「お久しぶりです」

「む？」

気づいたら絶望し過ぎてシグナムさんに背中を向けていた

だからシグナムさんの方に向き直ろうとした時、すっげえ嫌な予感がしたんだ。

何か…こう、危険が迫ってくる合図？的なものが

だからこの行動は反射的な物だった。

反射的に真横へ跳んで、しゃがんだ状態になった

——ドコオオオオオオオオオオオオオンッ！！

へ？ (・ω・) (

俺がさっきまでorz状態でいた所は轟音と共に煙が舞い上がった。

「かわしたか・・・」

煙の中からシグナムさんの声が聞こえる・・・いやいやいや、あのシグナムさん？・・・いえ、シグナム様？私めが何か粗相をしたのですか？

つか、この人は何故に俺を攻撃してくるのだろうか？一目見たら俺だっで一発で分かるだろうに。シグナムさんとは結構仲良しのつもりだったんだけど・・・ああ、お面着けてたんだった。

でも仮に今お面を外したとしよう

お面取る

←

顔がバレる

←

原作キャラに絡まれる

←

原作キャラにフルボッコ（今まで黙ってたから。）

←

原作突入

←

平穩の崩壊・平和の最後

な、・・・なん、・・・だと!?

よし、一旦落ち着こう俺。クールになれよ俺。COOLだ。It
a COOL !!・・・無理だ!! なるはずねえ!? COOL
Lに何てなれねえって! 本当にあの構図が頭の中で出来上がって想
像できてシュミレーションまで出来てしまったんだよ!? ダメだ!
! お面をこの場で取る何て自殺行為そのものじゃねえか!! つう訳
できゃーーーーーーっかッ!!!!

仕方ない・・・

「えーと、俺、何で狙われてんの?・・・あと、この結界はあんな
たが?」

「ああ・・・」

いや、後半の答えだけじゃなくて、前半の質問にも答えてよ!! 俺
がいったい何をした!?

煙が晴れる・・・

「我が名はヴォルケンリッターが一人。剣の将シグナム。そして我
が剣レヴァンティン・・・恨みは無いが貴様の魔力を貰うぞ・・・」

「

ヴォルケンリッター？・・・いや、しらんがなWWW中二病ですか？

シグナムが俺に剣型のデバイス、えっとレヴァンティン？を突き付けていた。

俺、帰ってもいいよな？

「こ☆と☆わ☆る」

面倒だし・・・

「ならば・・・力尽くで奪うまでだ！！」

掛け声と同時にシグナムが切りかかって来た

「ちよっ、ストップストップ！！！！！！」

普段の俺なら簡単に避けられたらろう剣劇。

だが、みんな思い出してくれ俺が何処から家に帰宅中だったかを、

俺が何を持っているのかを、俺の今の体制を

問1 俺は何処から帰宅中？

A. ゲーセン

問2 俺は何を持っている？

A. 大量のぬいぐるみが詰まった大きな袋、複数

問3 俺の体制は？

A. しゃがんだ状態

つまり、防御が出来ない！！

俺が切られる分にはまったく問題ない。いや、有るんだがな？人間に痛覚がある限り痛みは感じるんだ。だが、・・・・ぬいぐるみが切られるのだけは何としても避けなくては！！

え、何でかって？

前にも言ったと思うが動物のぬいぐるみはな？俺の傷ついた心を癒やしてくれるからだよ 以上！！

とかなんとか説明してたら

「（マズい、当たる!!）」↑俺にね

その時だった。手首に埋め込まれたジュエルシールドが突然輝き出した

「「ッ!?!」」

俺もシグナムさんもいきなりすることに驚いているのと、眩しくて目を開けられない。

そして、一瞬

自分の身体を内側から切り刻まれるような痛みが全身を駆け巡った

「ぐあああああ!?!?!?!?」

——痛い、痛い痛い痛い痛い痛いッ!?!?!?

転生してからもいろんな痛みを受けてきた鈴でも、こんな痛みは初めてだった。

鈴を倒しに来ていたシグナムですら攻撃を仕掛けることを止めた。このように叫び声を出せば血を吐き出すことも明らかだ

それから直ぐに鈴の身体にくる痛みは引いた。だが、

「ゴハアツ・・・ガアボツ・・・ツ!!・・・ハアハアハア」

やはりというべきか鈴は血を吐き出していた。

ふとジュエルシードのあるべき場所である右手首を見ると・・・
・・・何もなかった。

代わりに首に真っ黒な羽が一枚だけ付いてるネックレスがぶら下がっていた。

どちらかというと漆黒の羽だな、うん。

で？

「何ぞこれ？」

そうだ。そこが最大の疑問だ。

考えてみる、急に右手首に強烈な痛みが！ ↓ 叫ぶ ↓ 落ち着く ↓ ジュエルシールドが無くなった ↓ 首には羽のネックレス
……

何かなんだかサッパリング

つか、マズいぞ。シグナムさんがまた構えてる………って突っ込んできたー！！

「起動を確認しました。始めましてマスター、これからよろしくお願います」

突然、声が聞こえた。

「は、誰！？つか、今は話し掛けるな！！舌嚙んじまう！逃げなきゃ死んじまう！」

「マスター。私の名はソーナといいます。武器を展開しますか？」

ちよっ、しゃべらないでって言うてんのに！？………って、

武器!?

「いる! 取り敢えずいる! 武器いる! 展開してくれ!!」

シグナムさん!?! ぬいぐるみ守りながら逃げるのって結構キツいんだぜ? だから剣を振り回すの止めてね! . . . ねっ!?

「えーと、確か . . . ソーナ、セットアップ!!」

「了解しました、マスター」

少し光って表れたのは全身を黒で覆うロングコートを着け、同じく黒の長ズボンと黒いシャツを着ている夜風鈴だった

.
.

.
.

.
らよかつたな

実際には

赤と白が基準の巫女装束を着、赤い鼻緒の下駄を履いき、両手に少し大きな漆黒の銃を持った鈴が表れた・・・今はR I Nだが、

上は白、袴は赤の標準的な巫女服だ

巫女服を着た男が両手に銃を持って立ってる。・・・超違和感有りまくりじゃね？と誰もが思う。何故に男が巫女服？と思う人もいるかもしれない。だけでも鈴自身は実はこの顔だけ見ると凄くカッコイイのだ。

だが、鈴の見方を変えればどうだろうか？・・・肩甲骨あたりまで伸びている真っ白な雪を連想させるような髪や細い身体、整った顔立ち、形のいい眉など・・・これで女装をすると「本当に女じゃないのか？」と勘違いされるような、男の娘っぷりを出してしまうだろう

つまり、鈴は今、女の子が羨ましむような綺麗な少女に大変身していることになる。まあ、それは他者からの視点であって、鈴自身はわかっていないのだが

おそらく、シグナムの目にはお面を着けていて顔はわからないが、お面の下は少女だと思われることだろう

「・・・・・・・・・・」

『驚きで声が出ない』とはこういう時に使うものなんだとはっきり理解出来てしまった。

「（俺……男だよな？なのに何故に巫女服？そして何故巫女服に銃？）」

あまりのことに自分の性別を疑ってしまう始末である。しかも武器が漆黒の銃とかこの抹殺者の黒猫だよと思う。ついでに言えば何故巫女に銃なんて持たせるんだよ……

——俺はどこぞの武偵学校の武装巫女じゃないっての

鈴の意識を覚醒させたのは正面から聞こえる足音だった

「ッー！！」

シグナムが襲ってきたことを思い出し、回避行動に専念する。

「（って、そういえば……）」

後ろに大きく飛び、シグナムの剣を交わし、ソーナに問う

「ソーナ！俺魔法使えないんだが！？」

「ええ！？…………じゃあ意味無いですね」

「……………えええ……………」

んなアホな……巫女装束に着替えて、両手に武器まであるのに使えませんテヘッ♪とか、どゆことだよ

「俺、逃げるわ」

「そのほうがいいですね」

おしつ、ソーナも納得したことだし帰るか。

「逃がすか！！」

「いや、逃げるって、じゃあね……………え…………シグ☆たん！！！」

「シグ☆たん！？……………」 ↑顔真っ赤

「それでは失礼します…………えっと巨乳の将シグ☆たん」

何かブツブツと呪詛のようで怖いんだが？

「まあ、あれだ・・・落ち着けシグ☆たん・・・プツ」

「そんな巫山戯た名で呼ぶな！そして笑うな！！自分で言ったんだろう！！／＼／＼／＼／＼」

知らんがな

その後、俺は袋を持ち残像が出来る程の速度で自宅へと駆けた。走ってる時に下駄がカカカカカッとなっていたのを見て音でバレるかもしれない！とビビってたり・・・

何で戦わなかったって？めんどくせえからに決まってるだろ。つか何かいろいろと疲れたし、ぬいぐるみで囲まれた部屋で寝よう

駆けている途中で何かが壊れる音がしたり、三編みの少女とか、見たことあるような金髪のツインテールを見た気がしたり、オレンジの何かと青い何かがぶつかってたり、ビルに穴が空いてたり、どこかの淫獣が使ってた魔法を見かけたり・・・しまいには二度と見たくないような超大きなピンク色の砲撃が見えたり・・・

・・・・・・・・と全部気のせいだと、家に帰った俺はぬいぐるみが支配している部屋で布団にくるまり何も見てないと呪詛のように繰り返した結果

「マスター、もう朝ですよ」

「・・・・・・・・もう、そんな時間か」

家に帰り着いたのは深夜1時頃、ソーナに起こされた現在の時刻朝7時半頃・・・・・・・・全然寝れねえ。

ん？昨日のこと？ああ、ゲーセンから帰ってすぐに寝たな。他に何かあったか？・・・・・・・・だよな、何もなかったよな！！



あのシグ☆たん事件から数日後

マンションの俺の隣の部屋に新たな住人が引っ越してきたそうだ。
マンションを上がるときに管理人さんが言ってた

まあ、俺には関係ない。そんなことはどうでもいいと思っていたんだ……

だから、後であんなに絶望するなんて思いもしなかったんだorz

現在の鈴は

「ヒック・・・よし、・・・ツ・・・これで・・・グスツ・・・」

泣いていた。

「うっ……ひぐっ、こ、これで……ううっ、どうだ」

シグ☆たんに襲われたその日以降、鈴は毎日涙ぐみながらも一生懸命に魔法の訓練を行っていた。

あの時のように魔法ありの超ファンタジー的な突発的な戦闘がこれ

から先無いとは限らない。

故に、どんな状況になっても対応できるように戦力を整えておいた方がいい。

だから鈴は魔法の訓練をしていた。前にやってみたが鈴はなのは達が使うような魔法は使えなかった。ではシグ☆たんが使っていた魔法はどうか？とやってみたが結果は失敗だった。

鈴は何故か魔法が使えなかった。なのは達が使用する【ミッド式の魔法】ヴィータやシグ☆たんなどのヴォルケンリッター達が使用する【ベルカ式の魔法】……では鈴が何の魔法の訓練をしているのか？

鈴は新たな術式を造ろうとしていた。鈴特製のオリジナルだ。虚刀流でもオリジナルの技を造ることに成功したのだ。まあ、その話しはまた何時かするてしよう。

ソーナの中にあったミッド式（鈴は術式の名称なんて知らない）の術式を出して貰い。術式に書いてある文字を自分で書き換えていく。

今の所は順調に書き換えが成功しているが、……まだまだ道は険しいだろう。

もともと専門的な魔法の知識が欠けているのに「オリジナルで造っ

ちやおうぜ!!」なんて無理な話しである。

なので鈴は

「（魔法に関する知識が必要だな・・・それも、膨大な量が必要だ）」

己の平穩を守る為に自己防衛の技術だけではどうしても必要になってくるのだ。別に魔法が使えるようが使えなくても鈴が使用する虚刀流があればたいいの相手なら倒せる。けれども、防衛の一つとして使えるに越したことはない

では、何故鈴は涙ぐんで・・・というか泣いているのか？

「ううつ・・・、何で・・・何で愛と平和が信条の俺が・・・ひぐつ・・・何で戦いに備えてんだ？」
というわけである。

作業の途中までは普通にしていたのだが不意に自分のモットー&作戦などその他もろもろを思い出し、何故自分が戦うことを前提にしま生活を過ごしているのだろうか？と思い始めたのが始まりだ

こうして毎日がゆっくりと過ぎていったある日

鈴の隣に引っ越して来た人物たちがいた



鈴の部屋の隣のベランダでは

「わあ!! わあ、すごい!! すごい近所だ!!」

「ほんとう?」

「そんなに近いの?」

上から、なのは、フェイト、アリシアの順である

「ほら、あそこが私ん家!」

なのはは引越して来た親友のフェイトとアリシアに自分の家の場所を教えているようだ

「……………元気ねえ」

「……………ふふっ」

その後ろではプレシアとリンディが二人を見守っていた

室内では

「……ユーノくんとアルフはこっちではその姿か」

エイミイの前にいるユーノとアルフの姿は・・・ユーノは淫獣よろしくフェレット。アルフは小さな小型犬

「新形態、子犬フォーム!!」

「なのはやフェイトの友達の前ではこっちの姿じゃないと・・・」

どうどうと答えるアルフに対してユーノは頭を掻きながら答える

「君らもいろいろと大変だね・・・」

ユーノは後に語る。エイミイの少し哀れんだ視線がキツかったと……

「わあゝ、アルフちっちゃい、どうしたの？」

「可愛いゝ!!！」

「ユーノくんもフェレットモード久しぶりゝ！」

その場に現れたフェイト、アリシア、なのはは直ぐに抱き抱える

フェイトはアルフをなのははユーノをアリシアは・・・羨ましそうな目で二人を見ていた。

「・・・ね、姉さんも抱えてみる？」

「いいの!？」

フェイトの返事を聞く前にアルフを抱き抱えてしまうアリシア。その速度は光を越えた

「かわいいだろゝ」

アルフが二人の頬ひ舐めながら甘え

なのはもユーノを撫でてくつろいでいる

「なのは、フェイト、友達だよ」

マ・ザ・コ・ンの登場だ!!

「はーい」

そこに来たのはもちろんアリサとすずか。

フェイトとアリシア、アリサとすずかが自己紹介を済ませる。と言っても既にビデオレターなどで初めましてでわないのだが……

鈴の知らない所で（鈴の部屋の隣の玄関で）鈴がもっとも会いたくないメンバー達が揃っていた。

「……………（キョロキョロ）」

「どうしたの、姉さん？」

何だかアリシアが挙動不審な様子だ。フェイトが問いかけると

「あの一回だけビデオに映ってた男の子は？」

「あつ、そういえば・・・」

アリシアの質問でフェイトも思い出した。凄く印象深い人物だったから一瞬で覚えてしまったのだ。と言うよりあんなビデオを見たのは産まれて初めてだろう

「「あゝ……鈴くん（あいつ）だね（ね・のことかな）」」

アリサ、すずか、なのはは一斉に答えた

「あいつも誘うつもりだったんだけどね」

「うん、連絡先とか知らないし……」

「うゝん、そう言えば私も鈴くんの連絡先しらないの」

「でしょ？あいつ携帯持ってるのかしら？」

「んゝそうだ！今度鈴くんに連絡先教えて貰おうよ！携帯はなくても家の電話くらい有るはずだし」

すずかの言葉にアリサとなのはは全力で同意した。

「「「ふふふっ、次に会うのが楽しみ♪」」」

その光景を近くで見ていたプレシアはこう思う

「（・・・あの子（R I N）大丈夫かしら？ビデオに映っていたときは驚いたけど・・・不幸によく合うと言っていたけど・・・こういうことだったのね・・・）」

そしてなのは達のいる部屋の隣に居たとある人物も、この嫌な予感を察知していた。

「ぬおおおおおっっ！！ キタキタキタキタアアーーッ！！
ゾクゾクってきちゃったあぁっ！！」

座っていた椅子から転げ落ち、奇声を発しながら床を転げ回る変態
……もとい鈴

この光景を何も知らない一般人が見たら100人が100人変態だ
と思うこと間違いないだろう



「ではプレシアさん、私はなのはさんのご家族にご挨拶に行つて来ますね」

「では私は隣近所の方に挨拶をしてくるわ」

なのは、アリシア、フェイト、アリア、すずかを連れて高町家へとリンディが挨拶に。

プレシアは隣近所へと挨拶へと言うことになった

「さて」

リンディ達が高町家に行ったので自分も挨拶に行くことにする。まずは右隣の部屋へ挨拶を

ピーンポーン♪

「・・・・・・」

チャイムを鳴らす中からは返事がない

ピンポーン♪

「・・・あゝい、今出ます」

ガチャッ

部屋の扉が開いた

「・・・・・・」

「・・・・・・え？」

私の目の前には私たち家族を助けてくれたR I Nがいた



あ、どうも、夜風鈴です。はい。いやゝあれだな、運命って言葉はこういう時に使うもんなんだな・・・俺の運命イコールの公式で原作キャラとの遭遇とか何て鬼畜だよ。

これって絶対にあのバカ悪魔（痛い子とアホッ子（姉妹揃って厨二病患者））の仕業だろ・・・絶対に何が何でも俺を原作キャラ達と絡ませたいらしいな・・・もしかして俺に何か変なスキンを着けてんじゃないだろうなか・・・・・・？

多分、そうだろうな。うん。目の前に原作キャラよろしく、プレシアさんがいるのが何よりの証拠だ

・・・あれ？なんでだろ？なんだか目から暖かいものが流れてくるよ

「あ、あなたRIN!？」

ちよっ！

一瞬でプレシアさんを家の中に投げ入れ、鍵を掛ける

「バツカヤロオオオオオ!!! あんたはアホか!？何でわざわざ狙われてる仮の名で呼ぶんだよ!？俺はまだ捕まりたくないってのッ!」

「あ、えと、ごめんなさい……。で、でも大丈夫よ。管理局側の人達は全員フェイトとアリシアも一緒にいつき高町さんとお友達を連れて高町さんの御家族にご挨拶に行ってしまったから」

鈴の必死の叫びに軽くビビりながらも説明するプレシア。

だが、鈴はそれどころではない。先程プレシアが言った言葉をたどってみると鈴の顔色がどんどん青くなっていく

「な、なあ、フェイトとアリシア、それと……。悪ゴホン……。なのはとその友達が高町家に行った……。それまでそいつらはどこに居たんだ？」

鈴が切羽詰まったような顔でプレシアに問い掛ける

「ああ、そういえば言っただけだったわね。私、アリシア、フェイト、アルフ、あと管理局の総督、執務官、あとエイミィって子の全部で7人が、えーと……。あなたの隣の部屋に住むことになったのよ」

プレシアは鈴に絶望の言葉を放った。その言葉を聞いた鈴は口を開けて固まった……。のは一瞬で驚愕に変わった

「なん……。だ……。！？つ、つつつつまり、あいつらに俺の居場

所がバレたのか！？・・・・そんなバカな・・・唯一の平穏と安らぎを味わえる空間が奴らにバレただと・・・・鬱だ、死のう」

Orzだ。Orz。

鈴の落ち込み具合がハンパなくその様子を見かねてプレシアが説明をいれる

「あ、でも彼女たちは此処があなたの家がとは知らなかったみたいよ？全員気づいてなかったようだし・・・」

落ち込んでいた鈴に希望の光が降り注ぐ！

「よっしゃああああああっ！！まだ家がバレてない！！・・・ということとは！つまり！俺の平穏と安らぎの空間はまだ無事だということ！！今ほど神に感謝したことはないぜ！悪魔、暴君、葉姫、痴女、アリシアが俺の家を知ったりしたら・・・死ぬる！それは死ぬる！マジで死ぬる！原因不明の死亡フラグ（原因は鈴（笑））満載で死んじゃう！！だが・・・ふふっ、ふふふふ・・・まだバレてない！！これ大事。スッゴク大事。まだ俺の平穏は無事なんだ！！あはははははは！！ん、何だ？目尻が熱いな・・・あ、やっべ、嬉し過ぎて涙出てきた♪」

「・・・・・・・・・・」

目の前で涙を流しながら狂喜乱舞して喜んでいる鈴にプレシアは言葉が出なかった。呆然とただ啞然とした表情が出ていた

「（一体今までどんな生活してたの！？そしてアリシア以外の名前にまともな呼び名が無かったのは何故！？悪魔、暴君、薬姫とかは前に聞いた話でわかるにしてもアリシアはあったし・・・・・・・・痴女ってフェイトのこと！？）」

プレシアの疑問は大きかった・・・・・・・・



一時すると鈴の狂喜乱舞も終わり、場所をリビングに移し、二人で紅茶を飲みながら世間話をしていた

「改めて、プレシア・テストロッサよ。あなたにお礼を言わせて貰うわ。私たちを助けてくれてありがとう」

頭を下げてお礼を言うプレシアさん

「・・・あゝ、そんなこともあった気がする・・・。つか頭上げてくれ。そして思い出させないでくれ・・・。あの時の発言のせいで自分の平穏を自分で壊したんだぞ・・・マジで首吊って自殺しようと考えたくらいだ」

再び顔に暗い影が出来、だんだんと無言になる鈴に

「あー、その・・・いろいろとごめんなさい」

取り敢えず、謝った。

「はあ・・・もういいや一応俺の本名教えとくよ・・・夜風 鈴、鈴って呼んでくれていいから、まあよろしく。・・・つうかプレシアさん。絶対に俺の家の場所をバラさないでくれよ！あいつらに殺されたくねえ・・・」

「・・・それにしても・・・この部屋・・・紙ばっかりね・・・。」

プレシアさんがリビングを見渡してそう呟く

「いや、それは仕方ないんだよ……。自己防衛の為にめんどくさいことが大嫌いな俺が毎晩必死に涙流しながら作ってるんだから」

「作ってるって……。何をかしら？」

プレシアさんが紅茶を飲みながら聞いてくる

「何って……。新しい魔法の術式」

「ブフッ!!」

ちょ、汚いよ!

「ゴホッゴホッ……。ちょっと見せてもらってもいいかしら？」

「いいぞ。適当に見てくれ」

〳数十分後〳

鈴の部屋の中にある紙の束を適当に見ていたプレシアはただただ驚いていた

いくつか鈴に質問などをしてみると鈴は魔法に関する知識はほとんど・・・というかないに等しいと言う。

だが、実際にこの資料を見てみるとこれを魔法の知識がない唯の人間・・「違うよ、プレシアさん。俺は人間なんかじゃない。俺は人が創った化物だよ。もしくは怪物。読み方を格好良くするなら怪物ジャガーノートOK? わかった?」・・・まあ、無視するに限る・・・と思ったが、鈴の顔は真剣だった・・・。

取り敢えず、唯の人間が魔法を作るなんてありえない。そう言いたかった

でもこの紙に記入してある魔法陣を見ると最初はミッド式の魔法を基に作ったのだということよくわかる。

それを少しずつ少しずつ魔法陣の中の公式を書き換え、上書きし、加え、調整し、減らし、試す。

ここまで無知識で魔法を構築しようとしたのはおそらく鈴が初であろう。

多くの学者たちが何日も、何ヶ月も、何年も研究に時間を費やしやっと作れたものがミッド式の魔法陣だ。

それがたった一人の子供に・・・しかも魔法の公式なんてまったく知らない子供に既に解析され、挙げ句には新たな魔法の研究対象になっているのだ。

学者たちが聞いて、実際にその現場を見てみたら自分たちの苦勞が水の泡。泣く者続出だろう。

「あ、そういえば言っただけだった。これ俺のデバイスのソーナ。何かいきなりジュエルシードが変化して出てきた（笑）」

「・・・は？」

今、鈴は何と言った？——ジュエルシードが変化して出来た——・・・んなアホな・・・

「・・・はあ、あなたいろいろと規格外ね・・・」

もはや考えることを止めてしまう始末である

だが鈴は違った

「ちょっと待てや！人を人外みたいに言ってるじゃねえ！！俺の何

処が規格外だ！？どこからどう見ても唯の一般人じゃねえか！通行人A。もしくは一般人Aだろ！？そんな俺の・・・どこが規格外だ！！！！！！」

かなり必死に自分が一般人であることを説得・・・いや、説明している鈴。その表情は戦場に向かう兵士の顔。・・・もっとも、顔をかなり青くさせ、切羽詰まった顔でだが・・・この場合は戦場に無理やり出された農民に近いかもしれないが・・・

プレシアの中で時間が止まった

ポクポクポク チーン

「ええええええええええ！？」

普段は絶対に出さないような絶叫が部屋に響き渡った

それからしばらくして、その場は解散となった。

結局。鈴は一般人であるとプレシアに認識させたが、実際にはプレシアは納得していなかった

動物に変身したり、ジュエルシードを食べたり、それがデバイスになったり・・・十分に規格外だと思う

だが、鈴にとっては一大事だ。自分は一般人だ！平和を愛してるんだ！・・・へい・お・ん・を・・・平穏を守り抜けっ！！

後日、「これほどまでに神を殺したくなっと思ったことはない」と嘆く事になるが・・・

16話 ☆、デバイス、そしてまさかの「お久しぶりです」(後書き)

どうでしたか？ 必死に書いたこのお話し・・・

感想待ってます

17話 ニャー!ニャニャーニャニャー。ニャニャー!...! (前書き)

頑張って書いたけど駄文

17話 ニャー！ニャニャーニャニャー。ニャニャー！！

プレシアさんから今までの経緯とかいろいろ聴かせて貰い、隣の部屋に引っ越して来たことを知って絶望した翌日。何故か校長に呼び出された。もちろん電話で

カレンダーを見て今日はまだ日曜日だと言うことを確認。

俺が一体何をした？と頭の上に疑問マークを並べながらも制服に着替え登校

学校に着くと大会議室という明らかに何かやらかした奴が呼ばれるような場所に連れて行かれた

中に入るとたくさんの先生方。・・・日曜日なのに何で全員集合！よろしく集まってんのかを問いただしくなった

しかも担任までいるし・・・あの人泣いたら面倒なんだけどな・・・主に精神的に

その場に俺と校長が座ると会議開始

何故に俺まで此処に居なきゃならんのだ・・・という疑問は直ぐに消えた

会議内容が『俺』についてだった

内容は・・・まあ、簡単に言うとな俺が学校を抜け出してるとかその辺の内容だった。

今頃だが・・・さすがに小学生が学校サボったり、授業受けなかったりはマズいんじゃない？何かこう・・・世間的に

会議が終わった

結果は「明日からは真面目に登校して来なさい！」らしい。

死刑宣告を受けた瞬間だ。あのとき間違いなく俺の中で時が止まった。これから毎日毎日毎日毎日あの3悪女に会うことになるなど絶対に死を免れられない。

そう考えた瞬間だった・・・俺は自分の死んだ姿が超簡単に想像できた。うん。嫌だあああああああ！！！！

まあ、そのまま会議が終わったんだよ。反論しても反論しても結局正論で返してくるんだから無理だった

つか、校長以外の先生方全員が首を縦に振った。担任なんて涙ぐん

でんぞ。・・・校長に関しては対局相手が居なくなるのが嫌だったんだろうな。俺よりも必死になってたもん。

まあ、そんなこんなで会議も無事？終わり家に帰り着いた

隣に管理局とテストタロッサ家が全員集合！してるって聞いてたから警戒しまくりながらやっと家に入れた

その日はそのまま寝た。明日は月曜日でしかも魔界（学校）に行かなくてはいけない。3悪女に出会う可能性など超高い。MAXに近いし。

鬼が出るか、邪が出るか？

違う。俺の場合は死が出るか、半殺しが出るかに強制変換されてしまう

何という鬼畜全快の生活

僕を捨てて行ったご両親様。僕の望む平和な生活は未だ来そうにありません。代わりに曇天渦巻く危険生活が始まるかもしれません・

・
(泣)



次の日の朝

つまり月曜日

「・・・ああ、今日から学校行かなきゃだった・・・鬱だ」

現在の時刻は朝6時30分

朝っぱらから既にorz状態になりかけている鈴。

「・・・3悪女から襲われる・・・。死ねるわww」

愚痴をこぼしながらも数週間ぶりに制服を着、朝食を作る。

今日はスクランブルエッグだった

朝食を食べ終わるともうすぐ7時00分だった。

「（早めに学校に登校して奴ら（3悪女）と接触をしないようにしよう。うん、それがいい）」

という訳で靴を履き、玄関に出る

「おお、綺麗だなー」

マンションの廊下に出るとまず目に入ったのが太陽が上がっているところ

「写メっとこっと♪えーと、携帯携帯♪」

鈴が学校のバックから携帯（鈴専用魔改造魔力携帯。機種…RIN）を出し、カメラ機能を機動させ、さて撮ろう！

「ふーん、ふふふーん♪」

としている時・・・起こってしまった

「きゃあああああ！！！！アルフ！？スカート返してよぉー！！」

・・・固まった。鈴が固まった。

マズい。非常にマズい。此処で鉢合わせしたら絶対に平穩なんて来ねえ！！しかも声からしてフェイトじゃん！！アルフもいる！？早く隠れねえ・・・ガチャツ・・・と

反射的に開いた扉の方を見てしまう。

そこには・・・

「アルフ！！早くスカート返してよ！！」

上は白い何処かで見たことあるような服を着て、下は・・・パンツ一枚のフェイトと・・・スカートを口にくわえた赤い？オレンジ？の子犬がいた

・・・まあ、そういう俺はそんな現場に携帯片手に突っ立ってる訳で、自然と携帯のカメラもそっちに向いちゃう訳でして・・・

カシャッ

もちろん音は出ない。俺の技術を甘く見るな（笑）

「え？きやあああああああ！！！！！」

フェイトがこちらに気づいてしまった。まあ、恥ずかしさのあまり俺の手にある携帯の存在には気付かなかったがな。即座に走り出しフェイトの隣を通り抜ける！

走りながら携帯を開き、画像を保存、保護、ロック、コピー、パソコン（新しく買った）に送信、パチン

俺は携帯の操作を終えて携帯を閉じながら学校に走った

「・・・にしても・・・フェイトが着てた服・・・どっかで見たような・・・気のせいかな？」



さて、早くに学校に着き、校長と世間話をしていると時間になったので教室に向かった

チャイムが鳴り、担任が入るのを確認すると同時に教室に入る

担任が来る前に教室に入らないのかって？冗談じゃねえ！鬼の巣窟に自ら入る訳ねえだろうが！

見てみる、あの3悪女を

一人は驚いているが、今にも襲いかかって来そうな勢いで身体を机から乗り出して金髪

一人は同じく驚いてカバンの中身を漁ってる The 薬姫。・・・
・おい、今バツクの中から先っぽが尖った病院でしか使わないものが出てたぞ。それ明らかに注射器だろ？そして今取り出したメスシリンダーの中の液は何に使うんだ・・・っておい何で注射器に入れたんだよ！？

つか、あの・・・な、なのはさん？何でそんなに笑顔何ですか？しかも後ろに見えるオッサン？は誰？・・・ん？ああ、なるほど夜叉か・・・へ、へえ・・・

「まだ、授業すら始まってないんだけど!？」

「いや、な? 今までも警報機が鳴ることはあったんだがその度に俺の平穩が逃げて逝くんだよ……だから帰る。巻き込まれたくない」

「却下です」

神は死んだ。あ、神に祈ったのが間違いだったんだ……

「では、フェイトさん。アリシアさん、どうぞ」

ガラッ

『わああああ!!』

教室を開けて入ってきたのは金髪の二人組。……ああ……朝に見た見覚えのある服は……此処（地獄）の制服か……

俺が最も避けたい原作キャラがいきなり二人も同じクラスに転入だなんて……。何つう鬼畜っぷり。神も悪魔もいたい俺に何を求めてんだよ

てか唯でさえ平穏な生活が送れないのに何で更に増えてんだよ!?

……もうやだ。不貞寝しよ

「あ、あの、フェイト・テストロッサと言います。よろしく願います」

「アリシア・テストロッサです。フェイトの双子の姉です。よろしく願います」

二人がお辞儀すると教室の全員（一名を除く）からの拍手の嵐

フェイトとアリシアが教室を見渡すとなのは達も笑顔で拍手してくれいる

「じゃあ席は……夜風君の両隣に座ってくれる?」

「「夜風?」」

フェイトとアリシアが聞いたことのある名を同時に呟くと

「ちょっと待てやああああ!!」

鈴が叫んだ

「何だよ!?!他の所でいいじゃん!何で俺の横なんだよ!?!あんなぜってー腹黒いだろ!?!つか真っ黒だろ!深淵の谷より深い濃い黒だろ!今まで授業に出なかった腹癒せなんだろ!?!……………つー訳で別の所でよろしく」

散々叫びまくり、最後に何もなかったように最高の笑顔で言うところラスで注目を集めていた鈴を見ていた大半の女子は顔を赤らめた。無論、フェイトとアリシアも例外ではない

そして鈴の叫びに先生は

「じゃあ、二人の席は鈴くんの隣で♪」

『うおいつ!!!』

クラスの男全員の叫びが響いた

もともと二人共顔は超美少女だ。その二人が揃って鈴の隣へと向かっていく何て他の男子が納得する訳がないのだが、……先生が泣きそうなので納得するしかなかった

昼休みになると自然と鈴の両隣にはたくさんの生徒が集まっていた
フェイトとアリシアへ向けての質問の嵐だ。

その時、鈴は……

「はあゝ……すっげー落ち着く」

一人屋上のベンチに座り町を見渡していた

朝のホームルームが終わってから、10分休み、授業中問わずフェ

イトとアリシアの二人は永遠と質問やビデオメールなどのことを俺に話してくるのだ。つかフェイトは朝に会ったのが俺だと気づいてないらしい。原作キャラと関わりたくない俺としては既に学校すら辞めたいのだが、今の世界は義務教育とかめんどろな法律？があるので逝かないと更にめんどろなことが起きる。あ？字が違うつて？合ってるんだよ。悲しいことにな

で、まあ3悪魔は転校生の二人に校内を案内するらしいので今日の昼休みはゆつくりできるだろうと言うわけで、屋上を独り占めしてる訳だ

「ん？ん？ん？ん？」

また町を見渡してしるとある一点に小さな光が出た

「（まだ昼間だぞ？電気をつけるにしても今日は快晴だし・・・まさか魔力光？ソーナどう思・・・あゝ、あれ見られたらバレるかもしれねえから置いてきたの忘れてた）」

つう訳で「『視力強化』」

目を鳥類が見える程にまで上げ、光の周辺を見る

17話 ニャー!ニャニャーニャニャー。ニャニャー!!! (後書き)

どなたかTiny Dungenって知っている方いませんか
?知ってる方がいましたらメッセージをどうぞ!!

次回はなるべく早く更新するつもりです

18話 やつとまともな奴に会えた気がする。え？はやて達は・・・だって？お

感想の量にびっくりして、メッセージの量に顎が外れるかと思った。
みなさん変身ありがとうございます

何故か少しエロ？くなったような・・・気のせいだな

18話 やつとまともな奴に会えた気がする。え？はやて達は・・・だって？お

???

S i d e

「はあ、美味しいお菓子かゝ・・・そもそもあたしこの地域のお店の場所なんて知らないんだけど・・・」

実はこの人物。数分前に双子の妹と一緒にランプをしていたのだが、妹の「負けたほうが新しく美味しいお菓子を調達する！」・・・この一言でいきなり唯の暇潰しのはずが数十分に渡る壮絶なデュエルになってしまった。

まあ、結果は言わなくてもわかるだろうが、妹に負けてしまったのだ

336

「それに買っただったらお父さんの分も買わなきゃだし・・・結構難しい買い物よね。私の好きなお菓子とあの子の好きなお菓子、お父さんの好きなお菓子。それも知り合いもない知らない場所で・・・まったくロツテったら！帰ったら覚えてなさいよ！」

だが、周りには人がいない。魔法でここまで来たので一般人に見られる訳にはいかなかったからだ。だがそれにしたって・・・

「川岸に来ることなかったわね」

まったくである

そんな時だった

「うぎゃあああああああああ!!!!!! 飛びすぎたー!!
!! その猫さん、どいてどいてどいて!!」

空から人が降って来た

バツシャーーーーー!!!!!!

空から（おそらく）男の子が降ってくるなんて初めての体験だった

??? side out

視点は戻って鈴の目線に

そして時間は6分前に戻る。6分前だ。大事な事だから二回言いました

ネコミミを探し出した鈴の行動はというと

「触りたい触りたい触りたい触りたい触りたい触
りたいいい！！！！」

いやな、俺自信も強化すればネコミミが生えて聴覚がかなり敏感になるし、自分で言うのもなんだが触り心地も最高なんがけどな？ だけどさ、やっぱり自分に生えた耳よりは他人に生えた耳を触る方が触り心地抜群だろ！ やっぱりそうだろ！？ 魔力光らしき物も発生してたが、そんなの関係ねえ！！ 例え原作キャラ達に巻き込まれる可能性があったとしても俺はそれでも構わねえ！！ さて、では……

……ッ！？ なん……だと！？ 一瞬、頭では理解出来なかった。

その一瞬が数秒にも数分にも感じてしまった。頭しか見てなかったが視線を下にずらすと在るものが生えていた！ それは歩く度に左右に揺れ動く尻尾！！……ヤベツ、超触りてえ！ よしっ行くか！

！ あ？ 学校？ んなもんでもいいんだよ！ 何？ 3悪魔達はどうするのかって？……おーし、行くか！

此処までの考えと思考に使った時間僅か4秒

「さっさと行かねえと見失っちまう!・・・跳ぶか」
屋上の扉の前まで戻り、助走の為の距離を取る。

扉の前でクライチングスタートの体勢を取る。『虚刀流 第七の構え 杜若』だ

「位置について、よーい・・・「ガチャッ」・・・ガチャッ？」

・・・何故だろう・・・冷や汗が止まらない。後ろにある扉を絶対に見てはいけない気がする・・・。だが、もしだ。もし後ろにいるのが×××達だったら・・・。ゴクリ。それなのに見てみたという好奇心が・・・

だが、俺は好奇心に負けた。そしてものっそい後悔した

「あ、鈴くん、やっぱり此処にいた！」

悪魔に

「鈴くん何してるの？」

薬姫に

「っていうか、何でクライチングスタート？」

ゴリラだった

そう。後ろに居たのはいつもの3悪女のなのは、すずか、アリサ（コイツ等をいつもとか言ってる俺はもう末期なんだろうな・・・死にてえ）と新たな原作メンバーのフェイトとアリシア

「・・・運動？」 ↑俺

「え、屋上で？」

痴女よ。余計なことは言わんでよろしい

「そうだよ。運動するなら外に行きなよ！」

お前も言わなくていい。ってか早く行かねえと見失っちゃまう！！

「あっそうだ！鈴くん、今から私たちお昼ご飯食べるんだけど一緒に食べよ！フェイトちゃんとアリシアちゃんも鈴くんと話したいそうだし」

んなアホな。つーか此処で捕まったらネコミミが触れないは、和め
ないは、人生ジ・エンド♪（主に精神的に）の3連撃を喰らっちゃま
うんだが・・・って、肩を掴むなや！！仕方ない強行突破するしか
ねえ！

あゝあ、学校では身体能力低くしてたのによお

「位置について・・・」

「はあ？あんた何言ってる訳？頭・・・」

ゴリラを無視して

「よい・・・ドンッ！！」

あいつ等の前から一瞬で姿を消し、フェンスにほんの一瞬だけ乗り、
俺の高性能ネコミミレーダー（仮）で探し出す。・・・見つけた！

「みんな、居たよ！」

って、お前等は（俺を）見つけなくていいんだよ！！

フェンスの上から跳躍し、数キロ先まで跳ぶ

後ろから叫び声が聞こえたが気にしない

ネコミミの近くまで大ジャンプだ！

.....

-
-
-
-
-
-

•
•
•
•

•

一言。一言だけ言わせてくれ。

「飛び過ぎた————！！！！！！」

その叫びに反応にしたのかネコミミ様がこつちを向いた

「うぎゃあああああああ……!!!! 飛びすぎたー!!!!
!!!! そのネコミミさん、どいてどいてどいて!!!!」

バツシャーーーーーーン!!!!

・
・
・
・
・
・

・
・
・
・

「死ぬわあああああ!!・・・うええ・・・めっちゃ濡れた」

「・・・・・・」

そのいきなり目の前の川に降ってきた男の子（多分）を嘩然と見て
いる???（ネコミミ様↑鈴名）

そんなネコミミに川から上がった鈴は思っていたことを話し出した

「なあ、ネコミミさん」

「いや、そんな名前じゃないんですが・・・」

「むう・・・じゃあ、キャット・ザ・テイルさん」

「いや、それも違うからね!？」

「ん〜・・・ニヤーニヤーニヤさん……。うん、これだ。実は聞きたいことがあるんですけど」

「それも違いますよ!？何で妥協した感じに言うの!？っていうか一人で納得して話し進めないでくれますか!？」

「ふう〜、仕方ないな。じゃあ何て呼べばいいんですかー？」

「……何で私初対面の人にこんな扱いを受けてるのかしら？私の名前はアリア。リーゼアリアよ。あなたは？」

「俺は鈴。夜風。鈴。平和に暮らしたいからあんたに聞きたいことがあって追いかけて来た（本当は違うけど・・ネコミミWW）。その前に一応確認しときたいんだけど・・あんたって使い魔？」

その言葉にアリアは明らかな警戒のポーズを取る

やっぱりな。近づいた時にアルフと似た雰囲気を感じたんだ

「あなた何者!？」

「いや、今からそれを言うところだったんだけど」

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

「人の話しはちゃんと聞こうな」

「・・・・・・・・・・そうね」

アリアは反省した

つう訳で説明開始。でも、話したのは俺がデバイスを持っていること、魔法が一切使えないこと、平穏を望んでいたけどいつも被害受けるし、さらに二次災害までくるし、唯一のプレイヤート空間である我が家もつい最近、管理局とかいう訳のわからん奴らが引越して来たとかを説明した。平和に過ごしたいから魔法が使えることはばらさないでくれとお願ひもした。まあ、簡単に言うと、俺の過去とか俺のスキルとかジュエルシードを喰べたとかR I Nの正体とか以外は適当に話した

結果

「今まで大変だったのね・・・わかったは私の上司の人に聞いてみるわ（多分、この子の隣に引っ越して来た管理局の人間ってクロノ達のことね。流石にこれ以上この子を巻き込むのは可哀想だし）」

すごい優しい目で見られた

「でもその代わりお願いがあるんだけど」

「？」

「いやゝ助かったわ。流石に知らない場所できなり美味しいお菓子買って来いだなんて無理があるしね。それに荷物まで持ってもらっちゃってありがと、鈴」

「いやいや、俺の買い物にも付き合ってもらっちゃって悪かったって」

「ん、別にそれくらいなら大丈夫よ。ロッテの好きなスナック菓子も買えたし。あ、ロッテと言うのは私の双子の妹ね」

「へえ、使い魔にも双子とかあるんだな」

「ええ……それにしても凄い量ね」

「そうか？普通だと思うけどな。それに今まで会った女の子の中でこんなにまともな子がいただろうか？というとまあ一人居るんだがな（はやてです。）、そいつも魔導師（おそらく遠くない未来で）なんだよ。それに俺のこの短い人生を振り返ってみてもこんなにまともな女の子と話したのは初めてだった。その点に関してはありがとう、アリア」

「あ、あは、あはははは。まあ、楽しかったけどね」

アリアは乾いた笑いの後に笑いながら楽しかったと言ってくれた

時刻はついさつき3時を回ったところ。アリアのお願いとは買い物の手伝いだった。主に俺の好きなケーキ屋や和菓子屋など、俺の行きつけの場所へ案内してあげたのだ。俺は服が濡れていた為、少しの間だけアリアをその場に残しダッシュで家へ帰り、濡れた制服を

脱ぎ、私服に着替え、すぐにアリアの居る場所へと戻った。戻った瞬間アリアに「早ッ!!」と驚かれた。そのまで早くないと思うんだがな・・・

普段からいろいろと疲れているせいとか3日に一度はほとんど甘い物を求め商店街へと繰り出す日々。なので自然と店員さんや店長さんと長々と世間話をしていたので、顔を覚えられていたのだ。途中で中で「また君か・・・今日はどんな感じの物を探してくんだい?」と聞かれることしばしば

そのことをアリアに話すと凄く慈愛に満ちた目で俺を見てきた。あの時は死にたくなった

まあ、顔を覚えられていたおかげか皆さんがたくさんおまけしてくれた挙句、安く売ってくれたんだがな。これにはアリアも大喜びで二人の両手にはどんどんお菓子が溢れていった

「さて、これからどうする? やることないなら俺ん家来るか?」

「え、いいの?」

「ああ、今日一日というか3時間ばかりだが、アリアは俺に危害を加えないだろ?・・・加えないよな?」

「何もしなわよ！ってそうじゃなくて、あなたの両親の許可はいいのってことよ」

「両親？・・・俺は一人暮らしだぞ？」

「え？両親は？」

「居ないけど？俺、1歳の時に捨てられたし。あり、言って無かったわけ？」

「言っていない！！」

「まあ、今言ったからいいじゃん。で、来る？」

「んー・・・（お父さんはまだ仕事だし、ロツテも早く食べたいとは言ってなかったし・・・た、たまには遊んだっていい・・・よね）。じゃあ、お邪魔でなければ」

「俺から誘ったんだから邪魔な訳ないじゃん！俺ん家に来る友達はアリアが初めてだ。今まで友達なんて居なかったからなく。つーか、まともな奴が・・・いなかったもんな・・・」

思わず遠目になってしまった。アリアがまたもや慈愛に満ちた目で見てきた

鈴＆ネコミミ移動中

「此処が俺ん家。さっ、入ってくれ！」

「お邪魔します（本当にクロノ達の真横だ）」

リビングに入り、買ったお菓子で腐りやすい物を冷蔵庫に入れた。
ケーキなど

「アリア、紅茶とコーヒーどっちがいい？」

「あつ、別によかったのに。・・・じゃあ、紅茶でお願い」

「あいさ」

頼まれた紅茶を二人分と一緒に数日前に作った手作りクッキー（チョコアーモンド味）を持ってリビングに向かう。

「持ってきたぞ」

すると、リビングのテーブルに座ったアリアが辺りに散らばっている資料を驚愕の表情で見っていた

「何・・・これ？」

そこから紅茶とクッキーでお茶会をしながらプレシアさんにしたのと同じ説明をしたらめっちゃ驚かれた。

途中でアリアがクッキーを食べ「これ、スッゴい美味しい!!」と言っていた。これは素直に嬉しかった。なので「手作りだから作り方教えようか？」と言ったら両手を握られ、「是非^{ぜひ}っ!」と答えてくれた

なので、現在は二人でエプロンを着け、クッキー作りをしながら話している

「・・・で、魔法に関する資料が見たいんだけど、そんなのこの世界にはないし・・・あ、もっと力入れているよ」

「確かにこの世界は魔法文化がないからある筈もないわね・・・っと、これで良いかしら？」

「うん。後は形をとってレンジで〇分焼けば終わ^{かた}りだよ。・・・
・ふっ・早いとこ魔法覚えないとまた巻き込まれる・・・」

「・・・うん。絶対に見せてあげられるよう頑張るから。元氣だして！」

この時、アリアは決めた。絶対に上司（お父さん）に許可を貰おう！と

鉄板？にかたどったクッキーの生地を置き、レンジに入れ、タイマーを押す。これで後は待つだけだ

「ありがと。ほんっとうにありがと！！」

アリアの手を握り上下に激しく動かす鈴

「あ、あははは」

アリアも苦笑いしつつも嫌な気はしないらしい

二人共エプロンを外した。そして鈴が

「もう一つだけお願いがあるんだが・・・触らせてくれ」

「は？・・・ささささ、触らせてくれって・・・どどこを！？」

さすがのアリアもこのお願いは想定外だったようで動揺しまくりだった

その発言者である鈴は動揺しまくりのアリアを見て・・・アリアの耳のピクピクピクピクと動いているのを見て我慢出来なくなったようにアリアに飛びついた

実は買い物時から鈴は我慢していたのだ。

歩く度にアリアの尻に当たり跳ねまくり、左右に揺れている尻尾。アリアと話していると自然とミミに視線が行ってしまう自分の目。本人は無意識でミミをピクピクと動かすので、それを何度も何度も見ている鈴としては・・・よくここまで我慢したなと自分を尊敬出来てしまう

「きゃっ」

鈴に飛びつかれリビングに倒れるアリア。そして飛びついた鈴はア

リアの腹の上に乗掛かり（マウントポジションで）、息を荒くさせ、目は血走り、そして何より手の動きがかなり怪しい。

「れ、れれれれ鈴！？何か凄く怖いよ！？ってというか何を触るの！？」

ガシッ↑両ミミを掴む鈴

サワサワ↑ミミを弄くり出す鈴

「へう！？鈴、ちよっひゃ！ちよつとまっひうつ・・・って！み、耳は！？ダ、ダメっ！」

アリアの必死の抵抗も虚しく、鈴の行動はどんどん激しくなっていく

「ちょ！？耳ふあああ！み耳の中はあああ、ダメっ！！は、はふう、はふう、はふう・・・はひゃっ！れ、鈴！し、尻尾は！ダメだつて！そこはあ、感じっ、ちやうからあ」

アリアがやつとの思いで出せた声は虚しくも鈴に聞こえていなかった。何故なら・・・

「ふぁゝゝ。ふふふふ♪幸せだなゝ。触り心地は花丸。癒し効果は

神。ああ、今なら俺、死んでもいいや♪」

今までの我慢を乗り越えた者の最高の笑顔を浮かべていた。トリッ
プしまくりだった

左手で耳を弄くられ、右手で尻尾を弄くり回される。鈴のアリアに
対する撫でテクは完璧だった。だってアリアの顔もトリップしたよ
うになっていたからだ

そのとき、突然リビングの一部が光だした。そこには人影があった。
だが、鈴は気にすることなく弄り続ける。アリアに関してはもう見
る気力もないようだ

「アリア！お菓子買うだけでどんだけ時間掛けて、ん・・・の・・・
？」

光の中から出てきたのはまたしてもネコミミ。

「ろ、ロッテ！？な、なん、どこに！？ひゃっ、もうっ・・・ダメ」

そう表れたのはアリアの双子の妹であるリーゼロッテだった。だが、
ロッテは只今フリーズしていた。

当然だ。姉を探して来たらその姉であるアリアは何故か子供にマウ

ントポジションを取られて自分たちの特徴である耳と尻尾を触られまくってるといふ状況。

ハッと気づいた時には既にアリアが

自分の双子の姉が

自分の目の前で

「ああああああああッ！！！」

イッていた

フローリングの床に水溜まりを作って



「・・・すまん」

深々と頭を下げて謝った

「い、いや、もう大丈夫だから／＼／＼／」

アリアが優し過ぎて罪悪感でいっぱいだった

「それよりも、ロッテは何でここにいるの？」

「何でって・・・お菓子買いに行くだけなのにアリアが帰って来るのが遅いからアリアの反応を感じた場所に魔法使って来てみれば・・・」

ジト目で俺とアリアを交互に見るロッテさん

「・・・・・・・・」↑俺「・・・・・・・・／／／／／」↑アリア

「まさかアリアの『ピーー』シーンを見ることになるとはねえ」

ニヤニヤとアリアを見るロッテ。顔がもうおっさんに近いんだが

つーか・・・「こんなところに水零したっけ？」

「いやいや、鈴っち。それは違うよ、それは・・・ア」「わあああああああ！ろろろろろロッテ！？あなた何言うつもりよ！？」何ってそれは・・・・・・・・」

まあ、いいか。二人共お取り込み中のようだし

あとは・・・、

「二人共時間はいいのか？」

時計を見ると時刻はもうすぐ午後6時

それから二人は慌てて帰る用意をするが、アリア・・・冷蔵庫の中にあるお菓子のことを忘れてんじゃない？

「うん。これで全部ね」

いや、全部じゃねえよ。はあ、と溜め息を吐きつつ冷蔵庫からお菓子を取り出して持って行くと

「・・・・・・・・え、これは？」

手に持ったたくさんのお菓子をどうするかを考えていたら

眩い光の中へと入って行くアリアとロッテ・・・。

そこで思った。アリアにもお願いしたが、俺もお願いしたほうが可能性上がるくね？

有言実行

鈴は今にも消えそうな光に入って行った



それは学校が終わったり、夕方の時だった

なのはを始めとする原作メンバーはバスで帰宅していたがなのはとフェイトは念話で話していた

「(なのは、昼休みのことだけど)」

「(うん。私もずっと考えてたんだけど・・・あの時は魔力反応もなかったよね?)」

「(うん)」

「（・・・じゃあ鈴くんは・・・）」

「（うん。多分、純粋な身体能力だけでやってたんじゃないかな？）」

「（えっ、で、でも一瞬消えたよね？それに飛んでたし）」

「（確かに消えたけど・・・それに飛んだじゃなくて、跳んで落ちたんだよ）」

「（んゝ・・・取り敢えず明日学校で聞いてみようよ。それとクロノくんは報告したほうがいいかな？）」

「（いや、魔法に関係ないと思うから大丈夫だと思うよ。そういえば何で鈴は学校に居なかったの？）」

「（いつものサボリだよ）」

「（・・・いつもなんだ・・・）」

フェイトは苦笑いで答えた

実は、フェイトとアリシアは自分と同年代だと言っていたRINをいつも探そうとしているのだが、特徴や情報が少な過ぎて特定出来ないのだ。あれ以来一度も会ったこともない

それに狐のお面（目の部分は空いていて、口元は出ている）を着けていて、目の色は黒。服装もバラバラ。同年代。探すにしても後半3つでは人が多過ぎてダメだ。

一度母親であるプレシアにも聞いてみたのだが、素顔は知らないらしい（嘘）

鈴のことがずっと気になっていると母に二人揃って相談したこともあったのだが、それが恋愛感情だと言われた時は姉妹揃って大変慌てたものだ。今ではその感情を受け入れている。同い年なら学校に行けばいるのでは？と思っていたが、やはり見つからない。

これからも探すことを諦めないでおこうと決意した

その頃の鈴

「此処は何処やねん」

（Д）；；

18話 やつとまともな奴に会えた気がする。え？はやて達は・・・だって？お

はあ、早く書いたのはいいが次の更新はいつになるんだろうな・・・

最近、ハイスクールD×DとTiny Dungeonの二次創作を書きたいと思い始めた

19話 ロツテは泣かす！シャマルさんは張っ倒す！一日でそう思える程の絶望

サブタイトルが全く思いつかない件

お気に入りが増えてる件↑素直にビビった

今回も何か無理やり感バリバリです。キャラの口調がわかんないやーだし

つう訳で21話です

19話 ロッテは泣かす！シャマルさんは張っ倒す！一日でそう思える程の絶望

なあ。この状況どう思う？アリアにお願いしてたからいいかな〜って思ったけど俺からも頭下げた方が効率上がると思って忘れ物のお菓子持って光の中に入って行ったら・・・

縄で縛られた挙句、拘束されて尋問ってどう思う？しかももうすぐ30分放置

「いきなり拘束してすまないね。アリアから話は聞いたよ。その・・・大変だったようだね」

おっさんがそう言いながら後ろに居たロッテが縄を解いてくれた

「おっと、自己紹介がまだだったね。私の名はギル・グレアム。よろしく頼むよ」

「えっと、アリアから聞いてると思うけど、夜風 鈴です。それでその・・・これもアリアから聞いてると思うけど・・・資料の提供をお願いしたいんですけど」

「そのこと・・・なんだがね。君は一体なんの為に魔法を使いたいのだね？」

その言葉を聞いた瞬間鈴の周囲に暗いどんよりとしたオーラが出たのをグレアム、アリア、ロツテは感じた

正直、あんな黒歴史・・・悲惨な過去を自分で何度も思い出して話すのは嫌だ。そのせいで気づかない内に自分の顔がげんなりとなり、禍々しいオーラまで出ていた。

だが、アリアが鈴の心情を察してか慌ててグレアムに鈴から聞いた理由を話した。その際、ロツテも聞いていたのだが途中から鈴を見ては優しい視線を送っていた。鈴は気づいてなかったが

数分後

「君に資料の観覧許可を出そう！」

先程までとは打って変わったグレアムさん。その目尻に溜まっているのはなんですか？と聴きたくなった

でもそこで疑問があった

「観覧許可？資料をくれるんじゃないんですか？」

「ん、ああ、そうか。君は知らなかったんだね。ここにあるのは君たちという書庫のようなものなんだ。ただ、書物の数が多すぎて管

理局の人間ですら把握しきれていないんだ」

「・・・つまり直訳すると「その書庫好きに使っていいから自分で勝手に調べろや！」であってる？」

「ツツコミところ満載だ！」

ロツテさん。ナイスです

「・・・まあ、合ってるのかな？」

合ってるのかよ

その後何事もなく話し合いは終わった。

グレアムさんは何か紅茶が好きなようで俺のオリジナルブレンドを入れると気に入ってくれたようで意気投合してしまった。アリアとロツテあちよつと引く程に

ロツテとも仲良くなったよ！なんかあの二人って俺と同じで猫に変身？出来るらしい。なのでロツテに変身してもらって猫姿を撫でてさせてもらったんだが俺の撫で方が気に入ったそうでそれが原因で仲良くなった

「あつ、グレアムさん。俺とアリアとロツテで写真撮ってほしいん

「だけど・・・」

「ん？構わないよ。でもどうしたんだい？すごく唐突だけど」

「いや、ネコ3匹で撮るのもいい思い出になるかな〜って。お礼と言ってわなんだけど今夜の晩飯をご馳走させてもらおうよ！」

「ネコ3匹ってどういうことだい？」

一瞬で耳と尻尾を生やしアリアとロッテの待ってる方に移動する

「おいふったりとも〜」

「あっ、れ・・・鈴？」

「えゝ、鈴？」

俺、アリア、ロッテの順だ

「「（何、この可愛さ！！女としていろいろと負けた気がする・・・）」「」

「どうだ？二人が茶色だったから俺は髪の色と一緒に白猫にしたんだ」

アリア「えと、それどうしたの？」

「生やした」

アリア「生やした!？」

ロツテ「人間ってそんなことできるものなの!？」

「やる気があれば」

ロツテ「すごっ!人間って凄っ!!」

そのまま三匹揃った状態で写真撮影後俺の家に来てもらって簡単なフランス料理を振る舞ってあげた

ロツテが魚に対しては以上な食いっぷりなのが印象的だった

また知らん場所に戻り、グレアムさんが書類を書き終わるのを待って

「では、鈴くん。明後日の朝にどちらかをこの部屋に寄越すから。書庫の方はその日でもいいかな？」

「OK!つかそんなに早く見れるとは思わなかったから大賛成だ
って!でも……他の管理局連中には俺のこと言わないで下さい。
マヂで……」

「「承知しているよ（わかってるって）（わかった）……（
（っていうかそんな涙目で言わないでくれっ!）」」」

「じゃあ、今日はもう遅いから帰った方がいいな。ロッテ、家に転送してあげなさい」

「はい。じゃあ、送るよー。」

「いつでもどうぞ」

「クシュツ……あ」

「……行っちゃったわよ。ロッテ、今くしゃみで転送場所がズレたわよね……」

「あゝ……今度誤ろつと。対して場所は変わってないから大丈夫でしよ」

「（本当に大丈夫かしら……?）」

大丈夫な訳ないだろ・・・鈴がこの場に居たなら絶対にそう言った筈だ



ロッテに転送された瞬間、とてつもなく嫌な予感がした

この海鳴に来てから危機察知能力が格段に上がったようだ

人体実験で動物の血液や細胞を埋め込まれたお陰で今では危機察知能力に加えて野生のKANが発動してしまい、危険を感じると本能的に身体が動いてしまうのだ

だが、何故か、な・ぜ・か・！身体は本能的に動くのに奴ら（3悪女）の攻撃だけは避けた記憶がない何故だろう・・・って違うだろ。閑話休題

まあ、何が言いたいのかと言うとだ、嫌な予感がしたので反射的に狐のお面を着けてしまった

・・・よかった。付けてよかった。何故なら転送た場所に着いて、その時に出来た光が晴れると・・・

四方から武器を突きつけられ

「貴様は!?!」

凄い眼力でこちらを睨んでいる

「なんだ、シグナムの知り合いか?」

ヴォルケンリッターの皆さんが居た

・・・ロツテ。お前、俺が明後日まで生きてたらずってー泣かす!!



ああ、夜の町って綺麗だよな。ビルとかの光が点々と見えるのもいいけど、夜空に浮かぶ星を見てると何か嬉しくなってるんじゃないか？

そういや星をテーマに作られた曲が結構あったなあ……ん、何？何やってんのかって？見ればわかるだろ現実逃避だよ現実逃避。

何か最近では誰かが意図的に俺を原作キャラに遭遇させようとしてるんじゃないか？って思うくらい遭遇率が高いんだが……あれ、何だろ……目尻が熱くなってきた

「……帰ってもいいッスか？今ならめっちゃ大声で嘆く自信があるし」

「……………」

「すみませーん、何か反応してくれたら嬉しいんスけどー」

「貴様の目的はなんだ？」

「あつ、やっと会話が成立した。ん、これは成立でいいのか？・・・
・まあ、いいんじゃないか？・・・まあいいや！んで、目的だっけ？
俺の目的はね・・・」

鈴の言葉にヴォルケンリッター全員が警戒する。この時間が4人にはとても長い時間に感じただろう。

「・・・・・・・・」

だが、鈴から出た言葉は緊張という言葉をもったく含まなかった

「・・・お家に帰りたいです・・・」

「「「・・・・・・・・は？」」」」

かなり予想外の言葉に全員が呆けてしまった

「特にシグ☆たん！」

「「「ブっ！！」」」

「だからそんな腑抜けた名で呼ぶな!!」

「シグナムがシグ☆たん・・・ぶぶっ」

「・・・や、やめて、お、お腹が痛い!!」

「シグ☆たん・・・ぶぶっ」

シグ☆たんすげー……。一瞬でさっきまでの空気が無くなった。

シグ☆たんは赤くなって俯いてるし、ヴィータは腹抱えて爆笑、シヤマルさんも同じく、ザフィーラは普通の表情してるけどたまに口元を隠してた。

張り詰めた空気が和やかというかゆったりというかこんな空気いいよな〜と自分が囲まれてたこと何か忘れてのほほんとしてたんだけど

「と、とにかく、貴様のリンカーコアを貰うぞ!」

え!?!、っと思った。さっきまであんな空気だったのに一瞬で全員が殺気全快の表情に早変わり。

っーかさあ……

「リンカーコアって……なんぞ？」

これには全員がビックリしてた。いや、知らねーよ。悪魔（白い方じゃねえぞ）の馬鹿がそんなこと言ってた気がするけど俺は意味すらわかんなかったし

「え、だってあなた魔導師でしょ？」

……シャルさん。あなたは何を言ってるんだい？

「俺は平和をこよなく愛する一般人だ！」

「どー見ても戦闘慣れした戦士じゃねえか」

「バカな……いや、そりゃ、自分が怪物とか化物ってことは認めてる。だがな、俺は戦士じゃねえ！」

「何で戦士がダメで怪物や化物はいいんだよ！？まったく意味わかんねえんだよ！！」

全くだと頷くシャルとザフィーラ。ひでえ・・・

「えっと、リンカーコアっていうのは・・・簡単に言うと魔力を生産してる場所です」

ふーん。ん？待てよ・・・じゃあ、リンカーコアなくなったら

1, 魔力がなくなる

2, 魔法は使えない

3, でも管理局連中には何もちよっかいだされない

4, なのは達にちよっかい出されない。アリサ、すずかは・・・諦める。

5, 俺の平穩（学校以外）パラダイス！！

つまりは！いざ行かん、ユートピアへ！！！！

「きたあああああ！！！」

「うおっ!!うるせえぞ!何なんだよお前は!」

「きたきたきたきたあああああ!!!これが喜ばずに居られるかっての!お前には理解^{わか}るまいロリッ子よ!夢にまで見た俺の理想郷?ユートピア!がたった今日の前まで来てんだぞ!何度俺の中の辞書から辞表を飛び出して行くところを幻視したことか!いつ消滅しても不思議じゃなかったものがもう直ぐ俺の下へとやってくる!!んで、ロリッ子よ。ちょっと待って!そのハンマー降ろそうぜ?平和が一番だろ?つまり、話し合おうジャマイカ!!今日は記念日だ!あつても今日つてもう直ぐ終わるくね?だってもう夜じゃん?・・・まあ、いいか!!今日はいい日だ!あははははははははははッ!!!!(↑壊れた)」

皆、RINについて行けない。一体何がそんなに嬉しいのかと問いたい・・・だが、おそらく本人ですら気づいてないであろう歓喜を上げながら大粒の涙を流していた。お面のしたから流れる涙をヴォルケンリッター一同は何とも言えない顔で見ていた

「おいこらその4人組!俺のリンカーコアなら喜んでくれてやる!」

『・・・・・・・・』

む。何で喜ばないんだ?欲しいって言ったのに

その中で一番に反応したのがヴィータだった

「マジか!？」

「ふっ、マジだ！」

「おい、シャル！さっさと貰おうぜ！闘わずにゲット出来るなんてラッキーじゃねえか！」

「いや、そうなんだけどね・・・」

そこに更にシグ☆たんとかザフィーラも加わり時間はどんどん過ぎて行く。

途中途中で「怪しい」とか「騙すつもりだ」とか「今まで自分から渡す輩などいなかった」とか「あいつはいい奴だ!」とか

ヴィータの信頼？の言葉に涙が出そうだった。

「だが、あやつの魔力を探ってみたがかなり低かったぞ？対して足しにもならないと思うが」

あったりめえだろうが!!ザフィーラさん？あなたは馬鹿ですか？こんな大魔力を常に放出してたら悪魔にも痴女にも管理局連中にも見つかったらもうわ！

・・・しかし・・・魔力、ねえ・・・抑えてる分出してみるか？いや、でも管理局連中が来るかもだし・・・でも、見せれば平穏な生活だし・・・当然、後者だろ。考えるまでもない

「ふっ！」

魔力を解放！

『ッ！？』

4人反応！

ドコッ！

・・・これはいったい何の音？

そこでヴォルケンリッターの皆さんが揃って俺の足下を見ていた

何だろうかと疑問に思い見てみると・・・わぁ、お何、このクレーターの数・・・結構大規模なクレーターが7個も出来てる・・・このビル大丈夫か？・・・いや、大丈夫じゃないな。よし、抑えるか♪

「って、おい、ザフィーラ！何が少ないだよ！少ない所か今までで一番でけえじゃねえか！！」

そりゃそうだ。プレシアさんがくれたジュエルシード食べたらかなり上がったからなく・あおのときは超ビビった。あの時魔力を感知されなくてよかったな。普段も携帯に魔力送ってるけど少量で大丈夫だし。他に使うこともないしね」

「つか、早く取れや早くしねえとさっさと（翼で）飛んで帰るぞ。」

だが、その言葉を聞いたのはシャルさんだけで、他の3人は話合い。シャルさんはかなり慌ててる

はあ・・

「・・・なあ、リンカーコアって人体のどこにあんの？」

もう自分で取ることにした。だって遅いんだもん。シャルさん、さっさと終わらせようぜ」

「（何でそんなこと聞くのかしら？）だいたいは胸部と上腹部の間あたりにあるけど・・・何か聞いて意味あるの？」

「いや、取って良いってのに遅いんだもん。だから直ぐに終わらす」

「え？ どういう——」（長さは6cmくらいで頑丈なやつと）忍法・爪合わせ」——え」

シャルside

シグナムとヴィータちゃん。そしてザフィラがまだ話し合っている。この仮面の人も取って良いと言っていたんだからもう私が取ってもいいかしら？

ちらっと見てみると身長が・・・小さい。多分まだはやてちゃんとあまり変わらない年かな

と思っていたら

「忍法・爪合わせ」

聞き慣れない言葉が聞こえた。だけど、発声主は間違いなく仮面の人で、振り向くと仮面の子の爪が伸びてました。鋭く。鋭利に。研ぎ澄まされた刀のような爪。そのあまりにも綺麗なその爪は見惚ける程の代物

見惚れていると次に聞こえたのは声じゃなくて音が聞こえた。

グチュ

生々しい音だった。私は本当に驚いてしまってその場を見て固まってしまった

刺した。いや、裂いた。いきなり爪が伸びたと思ったら伸ばした爪で一氣に自分の胸部から上腹部までを切り裂いた。何の躊躇いもなく。

おそらくはやてちゃんとそんなに大差のない子だ。

泣き叫ぶ訳でもなく、痛がる訳でもなく、躊躇なく自らの身体を切り裂いていく。

感情のないロボットのよう唯坦々と作業をするかのように……。

更に身体に片手を入れ、中を弄り出した!? し、正気じゃない!

「っ!・・・マル!・・・シヤマル!」

「っ!!・・・はあっ・・・はあっ・・・はあっ・・・え?」

息が荒い。何故か自分が仰向けで倒れていた。横を見るとヴィータちゃんとザフィーラ、シグナムが自分のことを心配そうに見ていた。どうやら頭の中がぐちゃぐちゃになったのか、無意識の内に後退してしまっただけらしい。

っ！

そこで思い出した

「し、シグナム・・・あ、ああああれ！」

必死で指を指した

シグナム達も驚愕し、固まってしまった

でもそれは一瞬だけで直ぐに意識を取り戻した

「あ、あいつ！な、何してやがんだ！？」

「わ、わからない」

ザフィーラですら少し声が震えていた。ずっと一緒にいる私たちがたわからないような微々たる変化だった

「き、貴様！何をしているんだ！？」

シグナムがやっと声を出した

そう。本当に何をしてるのかわからない。何度も手を体内に入れては血でドロドロの腕が出てくる。何度も何度もまるで何かを探すかのように……ん？

あれ？何か重要なことを忘れてるような……

少し前の会話を思い出してみると……

「……あ」

少し前の会話

『シャマルさん。リンカーコアってどこにあるの？』

『だいたいは胸部と上腹部の間あたりにあるけど……何か聞いて意味あるの？』

『いや、取って良いってのに遅いんだもん。だから直ぐに終わらすわ』

まさか、まさかとは思うけど・・・

『だから直ぐに取って終わらすわ』

『直ぐに取って終わらすわ』

『終わらすわ』

・・・このことをシグナム達に話してみると

「「「んな!?!」」」

と、驚愕だった。その入れ違いに

「あつたー！ー！！やつと見つけた！！」

という声が聞こえた

シャルside out

視点は鈴に戻りまして

やっと見つけたぜ！いや、どこ探してもないじゃん。と思ったら案外簡単な場所にあったし

え、痛くないのか？って？こんくらいあの人体実験に比べたら毛ほども痛くねえ

あの馬鹿ども内臓を握り締めやがったからな

にしても血が足りん。傷は・・・まあ、コンクリートでも喰えば治るだろ。でも血はどうしようもないんだがな

「シャルさくん。これどうするの？」

そう言って爪で持っている紅色のリンカーコアを見せる。・・・血塗れだけど同じような色だし・・・

「……あっ……じゃあ……」

ちよつと待って、といい懷からデッカい本を取り出した

「……何で国語辞典を形態装備してんだよ。ああ、あれかワタシ、ニホンゴワツカリマセーンってか？」

「全っ然、意味がわかんない！！……蒐集開始」

いきなり本が開いたと思ったらすんごいスピードでページがめくられていく。しかも中は真っ白な場所が文字だらけになっていくし・
・国語辞典ってすげーわ

やがて光は消えた

「あ、終わった？」

「何でなんともないのよ……って言うかそれ（傷口）どうにかならないの？さっきから内臓が丸見えで気持ち悪いんだけど……」

「家に帰ったら出来る（ここで喰べると面倒なことになりかねん）」

そう言い合っていると小さな紅色の光が俺の身体に入ってきた・・・え？これってリンカーコアじゃね？

「・・・え、これ「っ！！」シャマル！！」シグナムさん。言葉かぶせるの止めませんか？」

「わかってる！魔力を感知されたわ」

いや、シャマルさん。そんなことより聞きたいことがですね・・・感知された？誰に？

「チツ、管理局連中かよ・・・多分、あいつの魔力に反応したんだろうな」

ロリさん。そんな目で見ないで！・・・今、何て言った？感知された。管理局連中に・・・。おいおいおい、とんでもねえぞ！！

「おい、こらアホ共！俺は帰る！血が足りなくて、目が霞むけどダツシュで帰る！」

「誰がアホ共だ！クソ狐！だが、逃げるのは賛成だ」

おお、気が合うなロリよ

「というか本当に大丈夫なの？ リンカーコアだけだったら私が無傷で取り出せたのに」

なん・・・だと！？ 俺が貧血状態になる必要なかったじゃん！？ まあ、痛くないんだけどさあ・・・って

「それより俺はさっさと逃げる！！ じゃな！」

真っ赤な六翼を出し、空を飛ぶ。内臓丸出しのお面つけた奴が空を飛ぶ・・・気持ち悪っ！！

後ろで何か言ってた気がするが俺は気にしない

つか、途中でフェイトにあった。何か言ってきたようだが全部無視って家がバレないようにして帰った。

家に着いて改めて確認してみたんだが、リンカーコアはやっぱ戻ってきてた。

本当に少しずつ・・・本当に微々たる勢いで大きくなってるのを見るとこれ、もとに戻んじゃね？と思う

あと、取り敢えず家で包丁とかナイフとか自己防衛出来るようなものを喰ってたら切り裂いた場所は塞がった。でも貧血で倒れそう

そんでシャルさんは今度会ったら張り倒す

理由？んなの決まってるだろ。リンカーコアがなくなる＝魔力がなくなる＝平穏きたああああ！！・・・と計画してたのに第一段階で無理とか死ねる。

・・・平穏って・・・何だろうな・・・？

19話 ロッテは泣かす! シヤマルさんは張っ倒す! 一日でそう思える程の絶望

一応次の話しも出来てる。

登校すべきか迷ってる

どないしょ?

20話 誰か・・・一話から見返して主人公のキャラが変わり過ぎな件について

アンケートよろしくお願い致しますー（・ー・）ー

20話 誰か・・・一話から見返して主人公のキャラが変わり過ぎる件について

シャルさんを今度会ったら張り倒すと決めた翌日。

えーと・・・今日は12月15日？16日？どっちだっけ？

まあ、いいや。つまり明日はグレアムさんに書庫へ連れて行っても
らう日だ

昨日、リンカーコアがなくなれば行く必要なかったのに・・・

つか、やっぱり俺の予想通りになってしまった。朝からクラクラ
する貧血で体が超ダルい

今日一日は大人しく寝とこう。・・・校長に今日は休むとだけ連
絡を入れ

俺は再びぬいぐるみの海へ入っていった

翌日

ベットの上で身体を起こし確認してみる

貧血気味で多少クラクラするが昨日の状態よりはましだ。やはり、一日寝ていたおかげだろう。昨日は誰にも干渉されずに快適に過ごせたからな。暖房が効いた部屋の中で、ベットの上で寝転んでごろごろと過ごす……これぞまさに俺の望む平和そのものではないか！！

これからもそういう時間を大切にしようと改めて思った

それから朝食を取り（因みに刃が潰れたナイフを……確か21本喰った。だって冷蔵庫の中何も入っていないんだもん）、迎えが来るまで時間潰そうと取り出したのは布と綿。

何をするかと言うとぬいぐるみ作り。結構巨大なのをつくる予定だ。だってこの世界ってやることないんだもん。一度ヌコヌコ動画に行ってみたんだが、絶望した！この世界にはボカロも東方もなかった！！

前世で刀語の合間にたまに聞いていたお気に入りの曲ボカロやお気に入りボカロのキャラ（東方）が居ないとわかったのでそれからヌコヌコにも行っていない。だが、その時、逆転の発想を思い付いたんだ。無いなら作れ。だからまた今度時間がある時に作ろうと思う。つか歌う

とかなんとか言ってる間にぬいぐるみの方はどんどん進んでいく・・・よしっ！完成だ！！

ん、出来るのが早いって？当たり前だろ。商店街にあるぬいぐるみ職人の技術を見稽古で覚えたんだからな。まあ、プロと言っても小さい店だからちゃんとしたのかわからんけどな

因みに今作り終えたのは・・・その・・・あれだ前にヴィータに上げたうさぎのぬいぐるみ＞Version 5m50cm<だ。俺、頑張った！！

と、自分のぬいぐるみの出来栄に頷いていると

「やっほー！鈴っち！迎えに来——ガシッ——た・・・よ？えっとこの手は何？」

ロッテが前に現れた。その瞬間に俺の腕の動きは音速を越えた。

「・・・会いたかったぞおーロオオツテエエエ！」

一瞬で頭を鷲掴みにし、宙に浮かせる。アイアンクロード

「え、ええええええええ！？な、なにになに！？私何かしたかなあ！？って言うか頭痛いんだけど！？」

地獄から這い上がって来たような鈴のとても低い声を聞き、ロツテの中の第六感とも言えるものが警報を鳴らしていた

「な、何でそんな地獄から這い上がって来たような言い方するの！？」

実際その表現は間違っていない。というよりそれよりしつくりと当てはまる表現がない。

さっきまでは鼻歌混じりの穏やかな顔で考え事をしながらぬいぐるみを作っていた鈴。

だが、ロツテの声を聞いた瞬間に鼻歌は止まり、考え事が処刑の仕方に（ロツテの）変化し、顔は穏やか？否。閻魔大王も素足で逃げ出すこと間違えなしの強面フェイスである

「ほんとおくに覚えてねえのか？あゝあゝ？」

「ひい！えと・・・うゝん・・・。」

必死に何かを思い出そうと頭を悩ませ、出した答えはこれだった

「うん。何もしてないよね？」

ブチッ

「……今の音って……何？それより早く降ろさない？」

必死に思い出そうと頭を悩ませた結果の先に待っていたのは――

……上等だ。

「ふ、ふふふ、フフフフフ……。アハハハハハハハハハ！」

鈴からの――

「ああ、いいぞ。降ろしてやるよ……」

そう言うのとロツテはパツと明るくなるが、次の言葉を聞いて直ぐに喜んだことを後悔した

「ただし……三枚に下ろしてやんよ!!」

——優しい言葉だった（鈴目線）

——殺人予告だった（ロッテ目線）

そしロッテは見た。もちろん宙に浮いたままの姿で（アイアンクロ
ー継続中）。鈴の肩甲骨まで伸びていた白い髪が光り出した

光が晴れると次にロッテの目に入ったのはやはり髪だった。

だがその髪はストレートに伸びている訳ではなく、ゆらゆらと生き
ているかの様に動いている。

しかも毛先などはなく、先にあるのは刃。毛先にナイフや包丁の刃
だけが先端部分に生えている

おそらく切れ味は抜群だろう。

まあ、そんな物を目の前で見ていたロッテが普通な訳もなく・

「（……ええええええええええええ!?!、何でアタシ三枚に下ろさ
れることになってるの!?!ただ父さんに言われて鈴っち迎えに来た
だけなのに!!!というか何もしてないよ!記憶の中を探しても何も

悪いことしてないってば！て言うかその髪はどうなってんの！？何、人の身体って生命の神秘か何かあるの！？何で髪から刃が生えるのよ！？って机切れてる！切れてるううううう！切れ味良過ぎだつて！・・・あれ？私・・・もしかしてあれで三枚に下ろされるの？・・・アリアー！！！Help！！Helpだよ！！助けてえええええ！！！！」

超テンパっていた。顔は考える度に青くなり、口はパクパクとしているが言葉が出てこないようだ

その時、宙に浮いたままのロツテを見てどこから下ろすかと考えていると

また、部屋が光り出し

「ちょっと、ロツテ！ただ迎えに行っただけなのに何でこんなに時間かか・・・る、・・・の？・・・鈴、何やってるの？」

「あつ、アリア。ちょっと待っていてくれ直ぐにロツテを三枚に下ろすから」

うん、わかった。答えようとして、あれっ？と思い

「あほかああああああ！！」

アリアが吠えた。



「で、何でロツテを三枚に下ろそうなんて思ったの？」

現在の状況。

俺、ロツテ正座。

アリア、椅子に座って王様気分。

妾の前に跪け！とか言いそう。

ガッ

「何故殴る！？」

「変なこと考えたでしょ」

「・・・・・・・・」

「考えたのね。で、何でロッテを三枚に下ろそうと考えたの？」

「・・・前にそっちにおじゃました時、最後にロッテに転送してもらったじゃん？でもな、転送された場所は俺ん家じゃなかった」

それを言ってる途中でロッテがあつ、と言っていた。

「なるほどね。ロッテ謝ってなかったの？」

「あはは。忘れてたよ」

アリアは呆れ、ロッテは苦笑

「でもねえ・・・・・・・・それでもあそこまでする？普通」

「・・・・・・・・さらに転送された場所にはヴォルケンリッター一同が雁がん首揃くびえて俺に武器を向けて来たって言ったらどうする？」

その言葉でこの場は沈黙した。

アリアは同情の目で、ロツテは謝罪するかのように見てきた。

が、直ぐにアリアが口を開いた

「……うん。ロツテを三枚に下ろすことを許可するわ」

「ちょ、アアアリア！？何言ってるの！？」

まさかのアリアの裏切りにロツテが慌てる。そりゃそうだ双子の姉が自分を売ったのだから……

「いや、考えてみて。鈴の悲惨な過去を知っているのに転送を失敗した場所には更に会いたくない一団が居た……どう思う？」

「……ごめんなさい」

素直にロツテが謝る。そして鈴は……

「仕方がない、殺すのめんどいから……呼吸困難にする」

「」「へ？」

鈴の言葉の意味がわからないのか二人揃って首を傾げた

その隙を付いた鈴はロツテの上に乗ってマウントポジションを取り、両手を脇腹へと当て、くすぐり始めた

「え、ちよっ！！何っ、アハハハッ！！や、やめて！！わ、脇は、脇は弱いんだって！！」

くすぐったさに身をよじって反抗するが、自分よりも小さい筈の鈴をどかすことができない。

何故なら鈴はこの復讐の為だけに自分の複数の力を使っているからだ。

圧倒的な力で押さえ込み、全体重をロツテに乗せ、足を組んでロツテを拘束などをしている

つまりロツテはそのまま成すがままにされている。

どんな暴力かと思ったけど、くすぐるだけなんて、鈴にも良心があったんだ。とアリアは思うが、それは間違いだ。

そもそもこの男に良心を期待するのが間違えである

知ってるか？実際にくすぐりって拷問なんかにも使われてんだぜ。
↑Wiki知識

つまり、それを20分もやったりすると。

「も、もう・・・ヒュウ・・・止めて・・・ヒュウヒュウ・・・お、
・・・願い」

このように過呼吸寸前になり、手足が微妙に痙攣したりと、少し危
ない状態になったりする。

かなり弱まっているロツテの姿に、何かをやりとげた達成感を感じ
た。

アリアはここまでするとは・・・と、少し感心混じりに頷いていた

「よしっ！書庫に行くか！」

本当にいきなりだ

「切り替え早過ぎでしょ!？」

アリアのツツコミの速さも凄いと思う

まあ、何だかんだ言っても連れて行ってもらっただけだね（笑）

つー訳で、未だに呼吸が荒いロツテを肩に担ぎ上げ、いざグレアムさんのもとへ

つう訳でグレアムさんのところに着くと早速書庫へと連れて行ってもらっ

何でも先日までは他の子が使っていた為に使わせることができなかったと言われた

まあ、使えれば何でもいいけど

「うおっ、すげえ本の量!!」

つか、浮いてね?とかそんな質問は全て却下。正当防衛。この知識の為ならそんなどうでもいいことは知らん!!

「よっしゃ!読んで読んで読んで読んで読んで読んで読みまくる!

「！！グレアムさん！俺、一週間位此処に（書庫）に籠もるから！！」

「い、一週間も！？大丈夫なのかい？これまでいろいろと苦労してきたことで精神的には大人に近いが君はまだ9歳なのだろう？」

「あー・・・じゃあ、補佐にアリアを付けてもらってもいいか？アリアには用事があればそっちに回してもらっていいし、休憩も睡眠時間もちゃんとあげるから。それにアリアなら信頼出来るし。つか、アリア以外のまともな奴を見た記憶がない」

だって、普通の人間じゃないけど！使い魔だけど！俺が家に上げて大丈夫と初めて判断した人物。そんな優しい人物を俺が信頼してない訳がない！

その言葉にアリアは私っ！？という表情をしていたが、グレアムは少し考えていた

「アリア、鈴くんに付いてもらってもいいかな？」

「はい、大丈夫ですよ。その・・・信頼してくれてるそうですし・・・」
／／／／

「ありがと、アリア！やっぱりアリアは優しいよな・・・じゃ

20話 誰か・・・一話から見返して主人公のキャラが変わり過ぎな件について

無理矢理フラグ？っぽいものを立てたんですが・・・めっちゃくちゃだな、おい

21話 次はアリアを張っ倒すと決めますた（前書き）

こんにちは、（＾０＾）ノ

本当は週一更新のハズが手がどんどん進むので投稿します！

でもこの話しはどうなんだと思う。かなりめちゃくちゃになってますので

お気に入り件数も何故か増えてる。これにはホンマにビックリだ

21話 次はアリアを張っ倒すと決めますた

鈴が無限書庫に入った日。

12月17日

一日目

先ずはアリアに頼んで俺をロツテの姿に魔法で変身？してもらった
誰が来るかわからんな

それから鈴は動き出した。

「アリア！そこら辺にある本を全部こっちに持って来てくれ！」

自分がいる本棚とは間逆の方にある本を全て持って来いという鈴

「わかった。時間かかるけど何とかして持って来くるから」

「はいよう！」

一応、アリアに反応するが既に鈴は瞬間記憶能力を全力で使い数冊の開かれた本を一気に流し読みする

「よし、次次次いいいい！！」

無限書庫一日目

鈴の瞬間記憶能力を使った読書タイム

アリアの何十回にも及ぶ本の運搬作業

たったこれだけの作業で一日が終わった



無限書庫二日目

12月18日

その日も鈴は永遠と何冊あるのかもわからない本を読んでいた

「・・・・・・・・」

もちろん徹夜だ。故に口数も少なく、何も喋らない。

この空間からする音は鈴が本をめくるパラパラという音だけだ。それも瞬間記憶能力のお陰でパラパラではなく、パラパラパラパラパラと超猛スピードで読んでいる為、読み終えた・・・読み覚えた本の数は桁三つはあるだろう。

アリアはどうした？と聞かれれば

アリアは3日間程ここ（無限書庫）にいない。グレアムに呼ばれたのだ。おそらく用事が終わればまた来るだろう

19日、20日もアリアは来れないので一人で黙々？と読み進めて

行った結果

「・・・読み・・・終わ・・・った」

無限書庫の本を読み終わってしまった

だが、鈴が見たのは過去の魔法の術式や、作る過程、必要計算式、魔法理論などの自分が魔法を使える、発動する為に必要な知識だけだ

そこらの図書館にもあるような本や歴史何かにや全く興味がない。

だからそういった本を読まずに終わらせた

「あゝ・・・頭痛てえ・・・。。つか眠い・・・。」

そう言いつつも今から魔法の研究というか・・・創り始める

周りに様々な術式が書いてある本を浮かせ、そのページを開いておく

「・・・やるか」

鈴策完全自己流魔法術式開発が始まった



アリア side

私がお父さんに用事で呼ばれてから3日後

今、私は無限書庫に居る

今、入ったばかりだけどね

中には私が掻けた幻覚魔法で姿をロッテにした鈴が居る。

術者である私以外にはロッテに見えるように掻けたから鈴の表情がよくわかる

目の下に少し濃い隈が出来てる所を見ると私が居なかった3日間
は徹夜したのだろう。

周りに浮かせてある食料にも手をつけた形跡がない

食べず、寝ず・・・死なないわよね？

「鈴、何か必要な資料ある？あるなら運んで来るけど」

既に紙に訳の分からない文字や数式などを書いている鈴に聞く

「ああ、アリア久しぶり。いや、いい。無限書庫にある資料は全部
読んだから」

・・・は？

「ぜ、全部!？」

「ん、そう。まあ、歴史とかは興味ないから適当にパラ見して止め
た。魔法理論とかの必要な知識だけを取り込んだ。・・・っと、こ
をこうして」

空中にミッド式の魔法陣を出し、それに修正作業を行うように中身を書き換えていく鈴。……。少し見てみたけど……。あれはもうミッド式の原型を留めてない。ミッド式の欠片も残っていなかった

正直、もう新たな魔法を作ったようなものだった。

それに……。その……。既に完成してるように見えるのは私の気のせいかしら？

ま、まあそれは置いといて

この子天才だ。私は素直にそう思った

アリア side out

ういゝす。徹夜し過ぎて今日何日か考えることすら面倒になってる鈴でゝす。

腹が減って、眠過ぎて死にそうな鈴でゝす。

えっ、アリアどうしたんだ？・・・何？もう一週間たった？・・・
・マジか・・・やっぱ魔法創んの楽しくて没頭してたわw

おっと言ってなかったな。結局の所な結果だけ言々と出来たわ

何をもって？

魔法だよ。魔法。いや、割と簡単に創れた。あれって知識があれば誰でも創れるんじゃない？

だって・・・なあ？

オリジナルの魔法何てもう4つも創れたし

あっ、そうそう。魔法創ってて、

「よしっ、今は4つもあればいいか」と判断した後

「他に何かないかな」と面白そうな本を探してたんだけどよ

本棚に一冊だけやたらとピッカピカに輝いてる金色の本があったんだよ。何で今までその存在に気付かなかったのか激しく疑問に思った。それを読んで見ると・・・とある書物の歴史みたいなもの

が書いてあった。知らない知識ばかりだったんだが、途中で面白い魔法を見つけてな。

その魔法は大昔に作られた魔法らしいんだが問題点があったらしく途中で終わってたんだよ。その問題点つてのが術者に被害が出るらしい……だが読んでいく内に「これって

俺には被害なくね？」とか思ってしまった、「面白そ!!」と思ってしまい、データを俺が使えるように書き換えた(笑)

その魔法つてのが『プログラムやデータから作られた人の姿をしたプログラム達を人間にする』と言うものらしい

正直、こんな魔法使う機会あんのか?と書き換えた後に思ってしまった

でもその本のページに小さく『守護プログラム達に人として生きる喜びを与えてあげて』

そう掠れ字で記入されていた

……何のこっちゃ!!

そう思ったのはいい思い出

それよりも・・・

「これ・・・勢いだけで作っちゃったけど・・・どうするかな・・・
アリアー」

「・・・・・・・・」

「あり？いないのか？・・・まあ、いいか」

どうせまたグレアムさんに呼ばれたんだろうな・・・

俺の目の前にあるのは黒の棺。

家のベッドもいいが棺の中に布団を引いて寝るのもいいんじゃない？
と思ったのがその時。

ふむ・・・魔法で中の温度を調節すれば・・・あれ？これ結構使えん
じゃね？

お手軽に使える。壊れても一日で直る。温度の切り替え可能。防音
効果あり。・・・いいじゃんこれ。安眠出来るし・・・これで寝る

とするか

無限書庫を出て、黒い棺を引きずりながら前にグレアムさんと話していた場所へと移動し、到着

「グレアムさ〜ん。おひさ〜」

「鈴くん！？大丈夫かね？アリアから聞いてる、飲まず食わずで連日徹夜していたと・・・」

「大丈夫な訳ないだろ・・・眠過ぎで今なら悪魔達に会っても何のリアクションも起こせねー・・・だから、アリアを呼んでくれ・・・家に帰って寝るから・・・」

「うむ、わかったよ」

数分後　アリア到着

何かかなり慌ててた。何故？

「鈴！ちょっと時間ないから適当に送るから！」

「えっ、適当はやめ——」

ひゅん

何の為にロツテではなくアリアを呼んだと思ってるんだ・・・鈴そう言おうとしてその場から消えた



アリアに転送された鈴。

次はアリアを張っ倒すと決めた俺は何故か空にいた

取り敢えず、お面付けよう。装着完了

そして目の前には黒い羽根を生やした銀髪赤目がいた・・・これ何て状況？

まあ、見た感じ現在キャラじゃないみたいだからほっといて・・・

冷静に状況を分析しよう。

・・・先ず、此処は結界の中・・・よし、アリアはなぶる。

・・・で、今は空に居る。棺が無くなった・・・アリアは一日くすぐる。

・・・周りに居るのは、先ず目の前に居るこの銀髪赤目さんと、後ろは・・・

悪魔がいた。

もしや痴女も居るのではと思い周りを見渡すが居なかった。メツチヤ安心した

「・・・よし、（悪魔は）見なかったことにしよう」

・・・だが、アリア、お前覚えてろよ！！

その頃クロノに捕まってるリーゼ姉妹

ブルッ

アリア「な、何かしら？この悪寒」

ロッテ「ん？アリア、脱出方法でも見つかった？」

アリア「いや、何故か悪寒がするのよ……誰かが噂してるのかしら？」

ロッテ「……鈴っちじゃない？」

そこで思い出されるのは適当に転送した記憶

アリア「……私、生きてられるかしら……」

ロッテ「……」

その疑問には答えることが出来ないロッテだった

そして視点は再び鈴に戻る

で・・・何でこいつ泣いてんの？

「っ、うがああああっ！！」

このやろっいきなり魔法ぶっ放して来やがった。

今までは自分で覚悟決めて斬ったりしてたから良かったが、流石の俺もいきなりの魔法には反応出来ねえっての！

「・・・痛う・・・」

やべえ・・・全身に火傷しちゃった。対して痛くねえが・・・血が止まらねえ。
イレノ・ドゥーエ 殲滅眼使うの忘れてたぜ・・・

つか、涙流しながら詠唱するな！怖いから！しかもやたらと魔法の

威力デカいし、範囲広いから逃げられないし……まあ、殲滅眼
使えば一発で解決出来るんだけどな……。回復出来るし身体能力
も上がる。まあ、空腹とか睡眠は無理何だけど……。とか考えて
ると

ガシッ

……何でこの人アイアンクローしてくんのさ？

取り敢えず

「『虚刀流・百合』」

蹴ってみた

真っ直ぐ行くはずの蹴りは障壁によって阻まれた……。そして

《Absorption（吸収）》

あれ？何か体が消えてってね？何か徐々に光りになって行くんスけど……力入らないッス……。誰か！Help me！！

「騎士達はお前に感謝していた……。出来ればお前を殺したくは無

い」

騎士って・・・シグナム達？・・・訳ワカメ。そう思った俺は悪くない

「だからせめて・・・」

意識が途絶える数秒で俺は思った

頑張って自己防衛の為に魔法考えて

人間の三大欲求全て無視って

アリアになら安心して転送を任せられると思ったら適当に転送されてさ

着いたと思ったらいきなりアイアンクロード意味の分からん言い訳と共に光になる・・・酷くね？

被害ばかり俺に来るって・・・

・・・はあ、どうにか終わらせて何か喰ってから寝よう

・
・
・
意識がなくなってきた

21話 次はアリアを張っ倒すと決めますた（後書き）

皆さんアドバイスうあ指摘などが有りましたら是非メッセージを飛ばして下さい

22話 夜天の主と祝福の風・・・・・・・・後、ついでに鈴の不幸（前書き）

久々の投稿。数人の読者の皆さんから矛盾を指摘されました。

自分でもそこまでよく分かってなかったのが問題点だと反省しました。

22話 夜天の主と祝福の風……後、ついでに鈴の不幸

暗い空間に少女は居た。

少女の名前は八神はやて。足が不自由で車椅子で生活している少女。魔導書の持ち主にして、シグナム達ヴォルケンリッターの主。それが少女の名だ

「眠い……眠い……んう」

閉じていた眉を僅かに開けると目の前に長い銀髪と深紅の瞳が印象的な若い女性がいた。その女性の名は……無い。

いふなればマスタープログラム守護騎士システムを含めた闇の書の全管理を行っている「管制人格」と呼ばれる者。闇の書そのものと言ってもいい存在だ。

「そのままお休みを……我が主。貴方の望みは全て私が叶えます。目を閉じて心静かに夢を見て下さい」

その女性ははやてにそう呟いた。



その頃鈴は

「・・・・・・・・ここはどこやねん！」

全身が傷だらけで痛いってのに・・・・・・・・えーと、確か吸収とか言ってたな。

傷の痛みと貧血気味な身体に鞭を打ちフラフラ暗闇の中を前に進む

「はあ・・・・・・・・ソーナ、起動」

「お久しぶりですね、マスター」

「・・・・・・・・何か言葉に刺がないか？」

「・・・・・・・・数週間ずくと出番が無かったのは悲しかったですね」

「いや、その・・・・・・・・すまん」

今回ばかりは俺が悪いしな・・・

「はあ・・・・・・・・まあいいです。」

「じゃあ、ソーナ、セットアップだ！」

「了解しました、マスター」

少し光って表れた鈴は

着流し？（BLEACHの死覇装を灰色にした物）を着、その上から漆黒のローブ（フード付き）を着ている。それが鈴のバリアジャケットだった。鈴はバリアジャケットに防御力を求めている。だって避ければよくね？とか思っているからだ。

因みに服は前に着ていた巫女服を変更した物だ。実は休日になにに巫女服を着ていることも・・・。

そして、両太ももに黒色のホルスターが装着され、そこには銃をモデルにしたアームドデバイス。

お面を再度装着しセットアップ完了

その姿になった鈴は更に奥へと進んで行った

・・・つうか

「俺の魔法でここ出ればいいんじゃないか？」

今更だった・・・



「私は……何を望んでたんやっけ？」

目を本当に僅かに開けてはやてはそう呟く

「夢を見ること。悲しい現実は全て夢になる。安らかな眠りを」

そして女性はやてにそう囁く

「そう……なんか？」



俺が作った魔法は4つ。いや、あれも合わせば5つか

俺の魔法は何故か詠唱がしないと発動しないんだ。やはり強力すぎるからだろうな……。魔法構築中にかなり複雑な感じになっちゃったし

一つ目は強力な幻術魔法。

他人に俺の姿をさせたり、俺そっくりの幻を作れる超便利な魔法だ。囃や仲間割れなどにも使える結構な出来栄えだと思っている。

一度書庫で実験したら同じ顔した二人の俺とで談笑したものだ。幻が喋れたことにかなりビビったのは内緒だ

二つ目は転移魔法。

『空間転移』俺はそう呼んでいる。込める魔力の量によって転移出来る範囲が広くなるという素晴らしい魔法。実は別次元に転移することも可能なのが魅力的だ

こればかりはかなり時間を掛けて創った。魔法を創ろうと決めた時にこれは絶対に創ると決めていたからだ。何せこれがあれば学校という魔窟からいつでも抜け出せることが出来るからな……。この『空間転移』が完成したときの喜びようは半端なかった。

アリア曰く、俺の喜び要は「狂喜乱舞とはまさにこのことね」と言っていた

三つ目、四つ目は攻撃魔法。

これはまた今度説明しようと思う

俺の魔法は他の奴らが使う魔法とは全然違う。

悪魔立ちが使うミッド式魔法・・・ミッド式の魔法陣は丸の中に
四角形が二つ

ヴォルケンリッター達が使うベルカ式魔法・・・ベルカ式魔法は
三角形

そして俺が使う魔法は・・・十字形

「インフェルノ式魔法陣・・・いや、インフェルノ式魔法・・・
・まあこれでいいか・・・さあ、此処から出るぞ！ソー
ナ！」

「了解です。マスター」

——我 世界の次元を理解し 次元の扉を開く者

鈴の詠唱と同時に足元に深紅の十字模様の魔法陣が出現し、回りだす

——我が望みの場へと 導き賜え

魔法陣が光出す

——空間転移魔法【異次元の扉】

鈴の詠唱が終わると魔法陣から金色の扉が召喚される

鈴はその金色の扉の中へと進んで行った



「私が・・欲しかった幸せ？」

「健康な身体。愛する者達とのずっと続いていく暮らし。・・・眠って下さい。そうすれば夢の中で貴方はずっと・・そんな世界にいられます」

女性がそう言うとはやてはゆっくりではあるが何度も何度も首を横に振った

そして数秒間目を閉じると、目を見開いた。

今度の目は僅かに開けているのではなく。完全に開いていた

「せやけど、それは唯の夢や！」



金色の扉を通り抜け、あるビルの屋上へと姿を表した鈴

だが、先程居た海からは全然離れていない。何故なら此処からでも肉眼でなのはと銀髪が戦っているのが見えるから……もちろん、鈴が気づいている訳もなく

「成功だ!!」

「マスター、おめでとうございます！」

作って始めて使った魔法が成功して鈴は喜び声を上げ、ソーナはそんなマスターである鈴に賛辞を送る。

何せ今まで出番が無かったソーナだが、鈴が真剣に魔法製作に取り組んでいた為自分からは話を振らずにじっと鈴の頑張りを見守っ

ていたのだ。だからこそその労いの言葉だった

「よし、じゃあ………、寝るか」

「はい。そうして下さい。流石に身体に悪いですから」

実際、ソーナは何度も魔法製作中の鈴に睡眠を取る様に言おうとしたが言えなかったのだ

「………ソーナ。お前が一番優しいな……。ほんっとこんな子が周りに居て欲しいな………」

若干項垂れながらそう呟いき、屋上の扉を開けビルの中へと入って行く

「………私は……いつまでもマスターの傍に入りますよ」

そんなソーナの呟きは鈴には届かなかった

屋上か階段を一階降り、その階を徘徊していると仮眠室発見

俺は迷いなく仮眠室へと入り、中にあるベットに寝転がる

「あゝ・・・腹減った・・・やっぱり一週間の徹夜は死ぬる・・・
80年くらい寝たい・・・。」

「それは流石に寝過ぎですよ、マスター」

だんだんと眉が重くなってきた

「あゝ、そーかもねえ・・・ソーナ、お休み」

「お休みなさい、マスター」

その部屋からは鈴の規則正しい寝息が聞こえてきたのだった



「私、こんな望んでない！あなたもおんなじ筈や！違うか？」

暗い空間ではやてが声の音量を上げて言う

「私の心は騎士達の感情と深くリンクしています。だから騎士達と同じ様に私も貴方を愛おしく思います。だからこそ、貴方を殺してしまう自分自身が許せない」

「っ」

寂しそうな目で言う女性にはやては息を飲む。

「自分ではどうにもならない力の暴走。貴方を侵食することも、暴走して貴方を喰らい尽くしてしまうことも止められない。」

「……覚醒の時に今までのこと少し分かったんよ。……
・望む様に生きられなかった悲しさ。私にも少しは分かる。シグナム達と同じや。……ずっと悲しい思い・寂しい思いしてきた」

そのはやての言葉に女性は目を瞑る

「せやけど、忘れたらあかん」

「ふえ・・・？」

はやてが車椅子から立ち、女性の頬を撫でる

「あなたのマスターは今は私やマスターの言うことはちゃんと聞かなあかん」

「っ・・・！」

はやての言葉を聞いた女性がハッ！と思うと何もない暗い空間の二人の下に白いベルカ式の魔法陣が表れた



「・・・あなたに・・・名前をあげる」

女性は膝を着いてはやてと同じ目線に合わせている。その両頬に手を当てはやては言葉が続ける

「闇の書とか呪いの魔導書とか言わせへん。私が呼ばせへん」

その言葉に女性の瞳から涙が零れる

「私は管理者や。私にはそれが出来る」

「無理です。自動防御プログラムが止まりません。」

微笑みながら言うはやての言葉に何事も無い様に言い返す女性の声はシャクリ声で言っている様に聞こえた

「管理局お魔導師が戦っていますから。それも・・・止まって」
・

続けざまに言う女性の言葉を遮りはやては力を込めて呟く

キーン

音と同時に二人の足元で回っていた魔法人が光出した



そして外で戦っているなのは敵である。闇の書の意味にも変化が出ていた

黒い羽と生やした銀髪と深紅の瞳が印象的な若い女性が光出した

『外の方、えっと管理局の方!』

『そこにいる子の保護者の八神はやてです』

「はやてちゃん!？」

『な、なのはちゃん!？ほ、ホンマに!？』

「うん、なのはだよ。いろいろあって闇の書さんと戦ってるの!!」

『ごめん、なのはちゃん。なんとかその子止めたってくれる?魔導書本体からはコントロールを切り離れたんやけどその子が発してると管理者権限が使えへん。今そっちに出てるのが自動行動の防御プログラムだけやから』

「・・・・・・・・・・」

訳がわからないのかなのは絶句。目と開いては閉じての繰り返しである

「（闇の書完成後に管理者が目覚めてる……。これなら……。）
なのは！分かりやすく伝えるよ今から言うことをなのはがやればは
やてちゃんやフェイトが外に出られる！」

これまで上空でなのはをサポートしていたユーノとアルフ。二人共
なのはの元に向かいながら作戦を伝えていく

「どんな方法でもいい目の前の本魔力ダメージでぶっ飛ばして！！
全力全開手加減なしで！！」

その言葉になのはは一瞬目を意見開き固まるが

「さっすがユーノくん！わっかなりやすい！！」

「まったくです」

なのはの感想にはレイジングハートも同意だった

「エクセリオンモード、バレル展開、中激砲撃モード！！」

「All Right ! !」

なのはの足元に魔方陣が表れ、杖が普段のものから変化し、ピンクの羽を付け、先端にはピンクの刃が出ている姿に変化する

先端に魔力を溜めようとする強い反動なのか突風が邪魔をする。
相手ははやての意思によって身動きが取れない状態にされている
周りでも闇の書を守ろうとした触手状の物をユーノとアルフがバイ
ンドの鎖で止めていた



「夜天の主の名において汝に新たな名を贈る。強く支えるもの、幸運の追い風、祝福のエール、リインフォース」

はやての・・・管理者の意思により銀髪&深紅の瞳の女性の名が与えられた



「エクセリオンバスター、フォースバースト」

光はどんどん先端部分に集まっていき

「ブレイズシュート!!!!!!」

なのはの集束型魔法により結界のの中全てを大きなピンク色の光が照らした

その時、なのはは見た自分が撃った砲撃が海の近隣にあった【あるビル】を撃ち抜いたのを……その【あるビル】が海の中へと沈んで行くのを……

「……………（大変なの!!! ……魔法で直るかな?）」

ああ、建物は直るかもな……建物は、な。

ただ……一人は心に深い傷を負ってしまったと思うがな……



その時その【あるビル】を撃ち抜かれた場所に居た人物は……

「……………」↑心に深い傷を負ってしまった人

「マスター!？ほんとに大丈夫なんですか!？」

その人物とはもちろん鈴。そして彼のアームドデバイスであるソーナ
彼が何故こうなったのか？では回想どうぞ！

～回想～

ソーナSide

初めまして夜風鈴のデバイスのソーナです。

私のマスターが眠りについて丁度5分が立ちました

正直マスターがやっと寝てくれてホッとしています

今までの一週間自分の平和を守る為と言いながら飲まず食わずで自

己防衛の為に徹夜で研究に明け暮れてたから死んでしまうんじゃないかと心配しました

そい思いつつ結界が無くなったらマスターを起こして上げようと思った時でした・・・

デバイスの私でも恐怖を感じてしまった

私達が今休んでいるビルに向かってピンク色の砲撃が飛んで来たのです

「マズイ！マスター！起きて下さい！マスター！！」

私のそんな必死の呼び掛けにも動じずに寝息を立てるマスター

砲撃はこのビルを破壊した。ビルは半分から上がどんどん壊れていき、瓦礫に変わる。

その瓦礫はどんどん海へと落ちいき、・・・・・・同じ様に寝たまま落下していたマスターの頭に直撃した

「んがっ！？・・・・・・な、なんだ？」

「ま、マスター！！早く逃げて下さい！もう一発砲撃が来ます！」

「……砲撃？」

マスターは寝ぼけた頭では理解できなかったのか反対を見る

その瞬間、マスターと私はピンクの砲撃に飲み込まれた

ソーナ Side Out

鈴 Side

「ま、マスター！！早く逃げて下さい！もう一発砲撃が来ます！」

何故落下中なのかとかは置いていて

いきなり安眠を妨害され、頭に鈍い衝撃がきたと思ったらソーナが
何やら叫んでいた

……って

「……………砲撃？」

睡眠不足なのに中途半端に寝たせいで余計に眠い。だが寝ぼけた頭で頑張って理解しようと思いい反対を見る

見えたのは……………ピンクの光が目の前に来た瞬間だった

寝ぼけた頭では殲滅眼イレノ・ドゥーエを使う事を判断出来なかった。

代わりに絶対これって悪魔砲撃だろ！？と思ったが砲撃に飲み込まれ

意識を失い欠けた俺の身体は海へとダイブした

海面からの衝撃が物凄く痛い……………

薄れ逝く意識の中で鈴は

「（このクソ悪魔ッ！！テメエ覚えてやがれー！！！！）」

と叫んだ

そこで意識が途絶えた

その後・・・・・・・・海にぷかぷかと波に流される鈴の姿があった



「管理者権限の発動が可能になります」

「・・・・・・・・ん」

「ですが、防御プログラムの暴走は止まりません。管理から切り離された膨大な力が時期暴れ出します。」

「んー、まあなんとかしよう」

キンッ

目の前に表れた本を抱き締めるはやて

「行こか、リーンフォース」

「はい。我が主」

リーンフォースの声は優しかった

22話 夜天の主と祝福の風・・・・・・・・後、ついでに鈴の不幸（後書き）

さて、次回と次回は主人公が空気の予感・・・・つか、マテリヤル三人どないしょ・・・・・・・・出すべきかな？出さないべきかな？

感想かメッセージで意見待ってます！！

23話 主人公かなり空気!!そして作者もこんな話しになるとは思わなかった

調子に乗って連日投稿。

前回と今回、次回喰らいまでは原作に沿っていく予定笑いは期待しない

23話 主人公かなり空気!!そして作者もこんな話しになるとは思わなかった

「――管理者権限発動」

「防衛プログラムの進行に割り込みを搔けました。数分程度ですが暴走開始までの治安が出来ます」

「――それだけあれば十分や」

リーンフォースの言葉にはやてが返すとはやての浮いてる身体の周りに赤、白、黄緑、ピンクの四つのビー玉程の大きさの光の玉が表れる

「リンカーコア送還。守護騎士システム破損修復」

そのはやての言葉と共に四つの光の玉は輝き出た

その頃、地上に赤、白、黄緑、ピンクの四つの三角形の魔法陣が表れる

魔法陣は光出し、光の中から四つの影が

光が晴れる——四つの影から出てきたのは……はやての大切な家族。主の為に全てを捧げる騎士ヴオルケンリッター

「おいで……私の騎士達……」



はやての言葉を聞き、海の上空に白い光を囲むように、四つの光の玉が現れ……

ドゴーン！

白い光が縦に割れ、辺りを光照らした

周りでは闇の書の中から脱出したフェイト。闇の書の意志を消し飛ばしたなのは

更に、ユーノやアルフ、クロノもいる。

皆、光が眩しく目を開けることが出来ない状態だった

光が収まり、なのは達が見たのは

海面上に浮かぶ三角形で出来た魔法陣・・・ベルカ式の魔法陣。

その上の中央に白い塊が、それを囲むように立つ四人の騎士達の姿が

「我等、夜天の主の下に集いし騎士」

「主在る限り、我等の魂尽きる事無し」

「この身に命在る限り、我等は御身のもとに在る」

「我等が主、夜天の王、八神はやての名の下に」

はやてによって、シグナム、シャマル、ザフィーラ、ヴィータ・・・
守護騎士達が復活した。

「シグナム！」

「ヴィータちゃん！」

シグナム達の姿を見て、フェイトとなのはは名前を呼んだ。

・・・そして誰も気づかない。鈴が気絶したままその近くを波に揺られ浮かんだことを



光の中には、はやてとリインフォースがいた。

「リインフォース。私の杖と甲冑を」

「はい」

はやては黒いバリアジャケットを身につけ、杖を手にした。

直後、光は碎け消えさり、中からはやてが姿を現した。

「はやてちゃん！」

なのはが喜びの声を上げ、はやてはなのはに笑顔で答える

はやては杖を空へて掲げ叫ぶ

「夜天の光よ、我が手に集え！祝福の風リインフォース。セー
トアップ！！」

髪の色が変わり、帽子を被り、騎士甲冑をイメージしたようなバリ
アジャケットを身に纏い、背中には黒い六翼のようなものが出た。

堕天使のような格好になったはやてが降臨した

「はやて…」

ヴィータは目に涙を浮かべている。はやては優しく微笑みを浮かべた

「すみません」

「はやてちゃん…あの…ごめんなさい」

シグナムとシャルマが、はやてに謝った。はやては首を横に振った。

「ええよ。みんなわかってる。リインフォースが教えてくれた。そやけど細かい事は後や」

はやては嬉しそうに微笑んだ。

「おかえり。みんな」

「う…うああああ!!」

はやての温かい言葉を聞いた後、ヴィータが泣きながら抱き付いた。

「はやて! はやて! はやてええええ!!」

涙を流しながら、ヴィータははやての名前を叫んだ。はやては優しくヴィータを抱いて、頭を撫でた。そこへ、なのはとフェイトがやってきた。

「なのはちゃん、フェイトちゃん、純さんもゴメンな。ウチの子達がいける迷惑掛けてもうて」

「ううん」

「平気」

なのは、フェイトは笑顔で答えた。

そこへ

「すまないな。水を差してしまうんだが時空管理局執務官クロノ・ハラオウンだ。時間が無いので簡潔に説明する。」

クロノは視線を黒い球体に向け

「あそこの黒い淀み。闇の書の防衛プログラムが後数分で暴走を開始する。僕らはそれを何らかの方法で止めないといけない。停止のプランは現在二つある」

皆が上にいるクロノに注目する。

だからこそ気づかなかった。全員が立っている魔法陣の真下にお面とバリアジャケットを纏った鈴が漂流中のことを

そして自然にも波は鈴を黒い淀みへと運んでいく



クロノは待機状態のデュランダルを取り出した。
。

「まず一つは、極めて強力な氷結魔法で停止させる。二つ、軌道上に待機してあるアースラの魔導砲『アルカンシエル』で消滅させる」

クロノやアースラの皆では他に案が浮かばなかった。

「これ以外に他にいい手はないか？」

クロノが他に意見を求めた。シャルが手を挙げた。

「えーと：最初のは多分難しいと思います。主のない防衛プログラムは、魔力の塊みたいなものですから」

「凍結させてもコアがある限り、再生機能は止まらない」

シグナムもシャルの意見に付け足しつつ渋い顔で言った。

「アルカンシエルも絶対ダメ！こんな所でアルカンシエル撃ったら、はやての家までぶっ飛んじゃうじゃんか！！」

ヴィータはアルカンシエルに反対する。

「そ…そんなに凄いの？」

なのはがユーノに尋ねた。

「発動地点を中心に、百数十キロ範囲の空間を歪曲させながら、反応消滅を起こさせる魔導砲。っていうと大体わかる？」

ユーノが説明した。

「あの、私もそれ反対！」

「同じく！絶対反対！！」

アルカンシエルの説明を聞いた、なのはとフェイトも反対した。確かにそんなものを撃ったら、はやての家どころか街まで消滅してしまう。

鈴がこの説明を聞いていたら何がなんでも反対すること間違いなしだ。もっとも本人は真下で気絶中だが……

「僕も艦長も使いたくないよ。でもあれの暴走が本格的に始まったら被害はそれより、遥に大きくなる」

「はい、みんな！あと十五分しかないよ」

エイミィが通信で伝えた。

「何かないか？」

守護騎士達に尋ねた。

「すまないが、無い。あまり役に立てそうも無い」

悔しそうにシグナムが言った。

「暴走に立ち会った経験が、我等には殆どないのだ」

と、ザフィーラが言った。

「でも、何とか止めないと……。はやてちゃん家が無くなっちゃうの嫌ですし……」

シヤマルもそう訴える

「いや……。そういうレベルの話じゃないんだがな……。戦闘地点をもっと沖合いに出来れば」

若干ズレた考えにクロノが苦笑する

「海でも空間歪曲の被害は出る」

ため息を付きたくなる。だが、シグナムの言い分ももつともだ

「こんな時にRINが居ればな……」

そう呟いたのはフェイト。そしてその呟きはこの場に居る全員に聞こえてしまった

そして言って上げたい。お前に真下に居るから!!と

「R I N って・・・あの？」

「う、うん／＼／＼／＼」

フェイトは恥ずかしそうになのはの疑問に頷いて答える。

「ふふふっ、フェイトちゃんとアリシアちゃんの初恋の人だもんね
ー・・・ってこんな話ししてる場合じゃないよ!!・・・でも本
当にR I N って子がいたら何とかしてくれそうな気がする・・・」

「あー・・・確かに」

「・・・くっ、否定・・・出来ない!!」

なのはの言葉にユーノは同感。クロノは正体不明の奴がこの状況を何とか出来るかもしれない事にショックを受ける

「だが・・・、確かに彼が居ればこの状況を変えてくれるかもしれない・・・」

もう一度言おう。お前らの真下に居るから！！

クロノもこればかりは認めるしかなかった。アースラに居る人物達も皆首を縦に振った

「なあなあ、なのはちゃん。そのR I N って誰なん？」

はやてと守護騎士一同にクロノやはのはから簡単にだがR I N について説明をする

「で、そいつは服装は遭う度に変わるんだが、いつも絶対に付けてる物がある」

「付けてるもの？」

クロノから外見を聞いていたヴィータが聞き返す

「狐のお面だ」

「「「・・・・・・・・・・」」」

騎士たちが黙ってしまった。全員顔を合わせては何故か納得した表情をしていた

「あいつか・・・」

「あいつだな・・・」

「あの子ね・・・」

「あ奴か・・・」

守護騎士一同みな同じ反応

「え、みんなは知っとるん？」

「いや、何で知っているのかが疑問何だが？」

主の自分は知らへんってどういうことや・・・と、はやては呟き。
クロノは何故知ってるのかが疑問だった

「いや、だってあいつ自分から進んでリンカーコア差し出して来たからな」

ヴィータがあったことを完結に話す。シグナム、シャマル、ザフィーラも頷く

『はあ!?!』

はやて以外の全員がそんな子を上げた。んなアホな・・・と誰もが思った。クロノはその時の状況は今度詳しく聞こうと思い

「ちよつとみんな!!後6分しかないよ!!」

エイミイの声にハツとなりまた口論し全員で出す

そこで今までの成り行きを見ていたアルフが――

「ああ!なんかゴチャゴチャ鬱陶しいなあ!みんなでズバツとぶっ飛ばしちゃうわけにはいかないの?」

焦れた感じにそんな事を言った。

「ア::アルフ。これはそんな単純な話じゃ::」

ユーノが言った。みんなは考えた。そして、なのはの口が開いた。

なのは「ずばっと・・・ぶっ飛ばす・・・」

はやて「此処で撃ったら被害が大きいから撃てへん」

フェイト「でも、此処じゃなければ・・・」

「「・・・あ」」

「クロノ。アルカンシエルってどこでも撃てるの？」

フェイトが尋ねた。

「どこでもって：例えば？」

「今、アースラがいる場所。宇宙空間」

なのはがそれに付け足す

空を見上げながら、なのはが答えた。話を聞いていたエイミィは、得意げな笑みを浮かべた。

「管理局のテクノロジー、ナメてもらっちゃ困りますなあ」

そして右手の親指を立て

「撃てますよ。宇宙だろうが、どこだろうが！」

自信満々に答えた。

「オイ！ちょっと待て君ら！ま…まさか…！」

三人の意見にクロノは驚いた。なのは、フェイト、はてやは笑みを浮かべて頷いた。

「なんとも、まあ…すごい発想ね」

リンディは驚き半分呆れ半分の、複雑な笑みを浮かべた。

「計算上では実現可能というのが、また恐いですね。クロノ君。こ
っちのスタンバイはオーケー。暴走臨界点まであと数分！」

エイミーはキーボードを操作しながら言った。

「個人の能力頼りで、ギャンブル性の高いプランだが…やってみる価値はある」

クロノが皆に言った。僅かでも可能性があるなら、それに賭けるしかない。

「防衛プログラムのバリアは、魔力と物理の複合四層式。まずはソレを破る」

と、はやてが言い

「バリアを抜いたら本体がむけて、私達の一斉攻撃でコアを露出」
と、フェイト。

「そしたらユーノ君達の強制転移魔法で、アースラの前に転送！」
空を見上げながら、なのはが言った

「あとはアルカンシエルで蒸発・・・と」

リンディが言った。

グレアムは、アリアとロッテと共に現地の様子をモニターで見ている。

「提督、見えますか？」

「ああ、よく見えるよ」

「闇の書は呪われた魔導書でした。その呪いはいくつもの人生を喰らい、それに関わった多くの人に人生を狂わせてきました。あれの御陰で僕も母さんも・・・他の多くの被害者遺族もこんな筈じゃない人生を進まなくなりました。それはきつと貴方もリーゼ達も無くしてしまった過去は変えることが出来ない。・・・・・・
・だから、今を戦って未来を変えます」

グレアムはクロノの言葉を聴きながら現場の映像を見ていた。

「「ん？」」

通信が終了し、現場の映像を見ているアリアとロッテが疑問も感じた

「どうかしたのかい？アリア、リーゼ」

「・・・・・・ロッテも気づいた？というか気づいちゃった？」

「あははは・・・・・・あー・・・アリアも？・・・・父様。ここ見て」

「ん？・・・・っ・・・・・・」

ロッテが画面に指を差し、グレアムに見せる

画面に映る海にプカプカと浮いている物・・・・・・いや、人物。そ

れは白い髪の子供。そしてその人物は波に揺られ黒い淀みに向かって逝く

「私たちの知ってる中で白髪っていったら……ねえ？」

「「鈴^{つち}（くん）！！??」」

………

三人は取り敢えず黙祷した。

そして、アリアは今度会ったらどうなるんだろ……と身体を震わせた

「アルカンシエル、チャージ開始！」

局員「はい！」

リンディの指示に局員が応える。アルカンシエルの発射準備をする。

黒い淀みの周りにうねっている触手状の生物？が動き回る

そこにエイミィからの通信が

「暴走開始まで後二分」

シャルがなのはとフェイトの治療をしていると

黒い淀みの周りの触手の間をぬって何本も黒い柱が上がる

「始まる」

クロノの言葉で皆、戦闘体勢をとった

23話 主人公かなり空気が！！そして作者もこんな話しになるとは思わなかった

文才が欲しいよー！ー！！

作者の魂の叫びが聞こえた

24話 俺は思う。本当の的は原作キャラ達じゃないかと……。そして何故

すいません。更新遅れました

相変わらずの無茶苦茶&支離滅裂な小説ですがよろしくお願いします

24話 俺は思う。本当の的は原作キャラ達じゃないかと……。そして何故

皆が戦闘準備を進めていた頃、鈴は黒い淀みのすぐ傍まで流されていた

「……………ん…ゴポッ」

やっと気がついた鈴は顔を海面に浸けたまま起き上がろうとしない

「……………ああ……………そういや悪魔砲が直撃したんだっけ……………何か喰わねえと身体中の傷と空腹で……………かなりヤバイ感じだな」

477

そこまで自分の状態を確認して……………

「(やっばいいや……………今は先に寝て体力を回復させよう。)」

そう思い、海面に浮かんだまま再び眠りについた



暴走のカウントダウンも迫って来た時、黒い淀みの周辺には様々な形の魔法生物の触手が活発に動き、淀みの周りには同色の柱が立ち上る……

「夜天の魔導書を呪われた闇の書と呼ばせたプログラム……闇の書の闇……」

黒い淀みをみて眩くはやて

直後、闇色のドームが弾ける……その中から出てきたのは、見るも醜悪な巨大な怪獣が姿を現す、頭頂部にあたる部分に上半身だけの女性がくっ付いている生物だった……

——アアアアアアアアアアアアアアアアッ!!

防衛プログラムが悲鳴?を上げる

「チェーンバインド!!」

「ストラグルバインド!!」

まずはアルフ、ユーノのバインドが防衛プログラムの周囲にある触手を締め上げ、動きを止める。だが、触手の数は多く全然減らない

「縛れ、鋼の軛! でええええや!!」

ザフィーラは白のベルカ式魔法陣を目の前に展開し、そこから現れた魔力の鞭が前方の触手を薙ぎ払う

そして、その薙ぎ払われた大きな触手の残骸である肉の塊は重力に従い海へと落ちていく

その大きな肉の塊はボトボトと辺りの海に落ちていく。海面に浮かんでいる鈴を上から押え付け、どんどん沈ませていく……

——アアアアアアアアアアアアアアアアッ!!

防衛プログラムは再び声を上げている。

おそらくちゃん効いてはいる様子だ

「ちゃんと合わせろよ、高町なのは!」

「ヴィータちゃんもね!!」

物理と魔法の複合バリアを破壊する担当は・・・

鉄槌の騎士であり永遠の少女の称号を持つ事になるヴィータ

と

未来のエース・オブ・エースであり現在の悪魔高町なのは。近い内に魔王の称号が付くのは時間の問題だろう

「鉄槌の騎士ヴィータと鉄の伯爵グラーフアイゼン!!」

「ギガントフォーム」

アイゼンにカートリッジをロードさせ大槌のギガントフォームに変形させ

「轟天・・・爆碎!!」

アイゼンを頭上に振り上げると、同時に防衛プログラムと変わらない大きさまで巨大化した

「ギガントシュラアアアアアアアアアアアク!!!」

振り下ろされたアイゼンは防衛プログラムの最初のバリアをガラスの様に叩き割った。防衛プログラムはアイゼンに叩き衝けられ少し海に沈んだ

もちろん、鈴も沈んだ

「高町なのはとレイジングハートエクセリオン…行きます!!!」

「ロードカートリッジ」

足元にピンク色の魔法陣を展開しレイジングハートを掲げ、カートリッジを4発ロードする

羽を広げたレイジングハートを頭上で何度か回して構える

「エクセリオン…バスターアアアアアアアアアアアアアア!!!」
「!」

なのはがエクセリオンバスターを撃つ時、防衛プログラムが鉤爪状

の触手を伸ばし攻撃してきた

だが、それは目標を逃がさないために不可視型のバインドであるバレルショットにより弾かれた

「ブレイク——」

レイジングハートの穂先から4つの砲撃が発射され、バリアに命中する

更に中央からも砲撃が放たれる。

「シュウウウウウト！！」

合計で5つの砲撃が一つになり二層目のバリアを打ち破る

——アアアアアアアアアアッ！！！！

後に鈴は語る。一時海の中がピンクに染まった・・・と。あの時は人生の終わりを垣間見たと

「次、シグナムとテストロッサちゃん！」

シャマルの指示が暴走プログラムの上空背後にいるシグナム達に伝えられた

「シグナムの騎士シグナムが魂、炎の魔剣レヴァンティン」

シグナムがレヴァンティンを鞘から抜き

「刃と連結刃に続くもう一つの姿」

鞘を柄頭に併せ、カートリッジをロードする

「ボーゲンフォーム」

弓となったレヴァンティンの弦を引き、矢を形成。目標を補足。そして更にカートリッジを1つロードする。

足元に展開した赤い魔法陣からはシグナムの変換資質である炎が燃え上がる

「翔けよ、隼はやぶさ!!」

「シュツルムファルケン」

木曜を補足しつつ限界まで魔力を込めた矢を放つ

バリアに当たると同時に大爆発を起こし三層目のバリアを砕けた

「フェイト・テストロッサ、バルディッシュザンバー……行きま
す!!」

足元に金色の魔法陣を展開させ、カートリッジを2発ロードさせる
すると身の丈を超える大剣となったバルディッシュが現れる。その
バレディッシュを身体を回転させながら振り抜く

「ハアッ!!!」

振り抜いたバルディッシュの刃から真空波が出現し触手を切り裂い
て、闇の書の闇を竜巻の様に包み込む

更にフェイトがバルディッシュを天高く掲げるとそのバルディッ
シュの刃に雷が落ちる

「**撃ち抜け、雷神！！**」

「ジェットザンバー」

フェイトが振り下ろすと魔力刃は防衛プログラムに向かって伸びていく。一瞬でバリアを粉碎し、そのままの勢いで本体を切り裂いた

[illegible]

ギヤアアアアアアアアアアアアアアアツ!!!!!!

……皆、何かが聞こえた気がした。だが、時間も無いので無視して攻撃が続行される

さあ、読者諸君はわかってると思うが・・・今は鈴の叫び声だ。
ん、どうしたのかって?・・・後半で語るさ

防衛プログラムは悲鳴らしき物を上げながらも新たな触手を生やし、その先に魔力を溜め砲撃を撃とうと魔力を集束しているが

「盾の守護獣ザフィーラ、砲撃なんぞ・・・撃たせん!!」

いち早く気付いたザフィーラは魔法陣を展開、今度は海中から何本もの白い柱? が突き出てきて触手を突き刺し、切り裂き、本体を串刺しにした

——
■■■■■■■■■■
ツ!!

鈴はまた叫んでいた

「はやてちゃん!」

シヤマルが上空で待機しているはやてに指示を飛ばす。

「彼方より来たれ、やどりぎの枝。銀月の槍となりて、撃ち貫け!」

はやては夜天の書を広げ詠唱する

足元に白いベルカ式の魔法陣を展開し、杖を上に掲げる。それと同時に防衛プログラムの上空にも同じ魔法陣が展開してその周囲に白い魔力球が6つ、中央に1つの合計7つ現れた。

「石化の槍、ミストルティン！」

杖を振り下ろすと同時に上空にある魔法陣から最初は周囲にあった6つの魔力球がその後中央から1つ：計7つの光の槍が防衛プログラムに突き刺さった。

——アアアアアアアアアアアア……

防衛プログラムの着弾地点から徐々に石化していき、頭頂部全てが石に変わった……。だが、完全に石化が出来ていない部分がまた再生した。再生後の姿はもはや原形を留めていなかった

「うわっ……。なあ！？」

「何だか……凄い事に……」

そのおぞましい変貌に嫌悪感を露わにするアルフとシャマル

「やっぱり、並の攻撃じゃ通じない！ダメージを入れた傍から再生されちゃう！」

「だが、ダメージは通ってる……。プランの変更は無しだ！！」

エイミィの言葉にクロノは力強く言った

クロノは自分の手に握ってあるデュランダルを見る

「行くぞ、デュランダル」

「OK Boss」

「悠久なる凍土・・・凍てつく棺の内にて、永遠の眠りを与えよ」

足元にミッド式水色の魔法陣を展開、クロノから冷気が発せられる。
その冷気は防衛プログラムを中心に海も凍らせた

「凍てつけ!!」

「エターナルコフィン」

防衛プログラムにデュランダルを突きつけると、防衛プログラムは凍りついた。だが、まだ諦め悪く抵抗しようとする防衛プログラム。
氷を砕き再び再生を始めようとするが

「いくよ、フェイトちゃん！はやてちゃん！」

「うん！」 「うん！」

「スターライトブレイカー」

「全力全開！！・・・スターライトオオオオオオ」

なのはが魔法陣を展開し、環状魔法陣が辺りを取り巻き、レイジン
グハートの先端にピンク色の魔力が溜まっていく

「雷光一閃！！・・・プラズマザンバアアアアア」

フェイトがバルディッシュと構えると魔力刃の部分に再び金色の雷
が込められる

「ごめんな・・・お休みな・・・」

はやては涙ぐみながらも防衛プログラムに別れを告げ、決意を固め
た顔で魔導書を広げた

「響け終焉の笛！！ラグナロク！！」

杖の先端部に白色の魔力が集まっていき、目の前には白色のベルカ
式魔法陣が現れる

3人の魔法に大量の魔力が込められる。そして・・・

ザッバーーーーーーッン!!

「いい加減にしろやあああああああ!!!!!!」

海から超不幸な人物が表れた。だが、なのは達の方ではなく防衛プログラムの方を向いていた

つまり、背を向けているのだ

な「ええ!?!」

フ「R、RIN!?!」

は「ちよっどないするんや!?!これ止められへんで!?!」

ク「取り敢えず避ける!!」

「なあんだあ・・・そっちかあ・・・あああああ!?!」

「「「ブレイカアアアアアアアアアアアアアア!?!?!?!?!」」」

「シュウウウウウウウト！！！」

その声が聞こえた時思わず海面上を見た……。海の中がピンクに染まった……

次に来たのは黄色い刃だった

隣の何かデカイ物体を切り裂き、その刃が俺の後方にも来た

「ギヤアアアアアアアアアアアアアアアッ！！！！！」

あ、あつぶねえー！！！！顔面目掛けて一直線だったぞ！！

グサッ

「■■■■■■■■■■ ツ！！！」

気づいたときには叫んでいた

白い柱のようなものに腹を貫かれた

だが、痛みは一瞬で去ったので腹に穴は開いているが問題ない
それから次々に襲いかかる不幸の連続

上から石が降ってきたり、いきなり海が凍ったり……いい加減にしろや。

お面で隠れているコメカミを手で押さえそう思った

もう我慢できねえ………テメエラ全員血祭じゃあああああああ
あ!!!!

海の中にあったやたらとデカイ岩を思いっきり蹴り、海面を猛スピードで飛び出す

ザッバーーーーーーッン!!

「いい加減にしろやあああああああ!!!!!!」

俺が飛び出してそう言う目と目の前にいるのは訳のわからん物体

な「ええ!?!」

フ「R、R I N!?!」

は「ちよつどないするんや!?!これ止められへんで!?!」
ク「取り敢えず避ける!?!」

一斉に放った……その砲撃は、防衛プログラム（とRIN）を同時に捉え大爆発を起こした……

その大爆発の中、皆RINが現れたのちに驚いたりして混乱しているけど、防衛プログラムのコアが露出したのをシャルは見逃さなかった

「……捕まえ……った!？」

シャルが旅の扉でコアを補足した……のだが……

「嘘!？……あのRINって子がコアに……泣きながらしがみついてる!？」

『ええー！！?』

これには全員が驚くしかなかった。鈴は光に飲み込まれ、大爆発の被害を受けた後、そのまま後方へとぶっ飛ばされてしまった。飛ばされている途中で何かにしがみついたのだが……あまりの恐怖にそれがコア何てこと知らずに掴まって固まっていたが

「みんな!早く転送を!!」

エイミイの言葉に転送組はどうしようか迷ったが

「長距離転送、目標……軌道上!」

「「転送おおおおお!!!」」

ユーノ、シャル、アルフが手を振り上げると、コアは宇宙へと飛ばされた……

結局転送しやがった



「「転送おおおおお!!!」」

そんな声が聞こえた時には既に手遅れだった……

何か転送するんだろうか? と思っていたのが間違えだった

気がつくと宇宙にいた。

転送するのは俺かよ！！

全身が焼ける様に痛かった。転送中に訳わからんところを通ってる間に摩擦熱で何回位死んだことか……

「…………グスッ……全身が痛い。こんなに痛いのはあの、ヒック……人体実験以来……」

そして俺がしがみついている物体が異様に気持ち悪い。でもかなりの魔力を感じる……ごちになりまーす。

「あむっ、んーっ、ベキッ、バリッバリ」

全喰者^{オールイーター}を使って触手状の物や目玉なども適当に全てを喰らっていく。でも不思議なことに喰らっても喰らっても再生していく……何だこりゃ？何で再生すんだよ……ま、まあ、その分俺の傷もどんどん直るから良いんだけどよ

鈴が喰らって傍からまた再生していく。最早身体の傷も完治し終わっているのだが、鈴は喰うことを止めない。再生が止まらない相手にムカついたのか意地で喰らいつく鈴

『その貴方!! えーと、R I Nくん!! 早く其処から離れて!!』
と声が聞こえた。その方向を見るとアースラが何かをチャージし終
わったところだった

「はあ？」

思わず喰うのを止めて其方を見る。



時間は少しばかり戻り、アースラ内

「コアの転送・・・来ます!! 転送されながら生体部品を修復中! 凄
い早さです」

局員の一人がアースラ全体に向けて報告する

「アルカンシエル、バレル展開!」

報告を聞いたエイミイがコンソールを叩きアースラのバレルを展開
させる

先端部分から3つのリングの輪のが出現し真ん中に白い魔力が溜ま
っていく

「ファイアリングロックシステムオープン。命中確認後、反応前に安全距離まで退避します。準備を！」

「了解!!」

こうしている内にも転送された防衛プログラム（と鈴）は宇宙に転送される

リンディの前に丸い鍵穴が出現する。そして、真剣は表情で指令を出す。闇の書のコアが視認出来る距離まで来ると、アース内に緊張感が出てくる

「・・・ん？」

そこでエイミーが気づいた。生命反応が2つある・・・と

「か、艦長!!せ、生命反応が2つあります!!」

『!?!』

「ど、どういうこと!?!」

「わかりません! たった今気づいて」

「モニターに映して! 早く!!」

「今やってます・・・出ました!!」

エイミィがコンソールを高速で叩き、出した画面に映ったのは

お面を着けた人物が必死に闇の書のコアを喰ってる光景だった

アースラの中で「は?」という声がシンクロした気がするがいち早く戻ったエイミィがその人物に向かって叫ぶ

「その貴方!! えーと、R I Nくん!! 早く其処から離れて!!」

エイミィの大声にみんなが正気に戻った。だが、正直、鈴がその場を離れるまで待ってる時間は無い。早く消滅させないとまた再生してしまう

リンディは数秒考え、一度深呼吸し

「アルカンシェル発射!!」

鍵穴に鍵を差し、回すとアースラの先端にある魔力球はリンディの言葉と共に一直線にコアに向かって行った



おそらく攻撃だと思うが、凄い早さで一直線に撃ってきた

鈴は迷いなくその砲撃の目の前に立つ。

目を大きく見開く。するとその瞳の中央には誰が見ても奇妙だと思
う様な文様が浮かび上がる。アースラの局員達もそのモニターから
見えるその瞳に注目する。朱の十字。

そして、アルカンシエルが鈴もまとめて撃ち貫くところで・・・
局員達は見た。R I Nの口元が吊り上がっているのを

黒い瞳を割るようにして、朱の十字の文様が浮かび上がり

「喰らえ」

その一言でアルカンシエルの砲撃が次々に朱の十字の中に吸収され
ていく。やがて砲撃が終わると身体は勿論。服にも傷一つ無いR I
Nとその後ろのコアが現れる

「・・・ふふふ・・・美味しかったぜ、管理局。お礼にこの生物は
俺が殺してやるよ。つか殺す!!」

まるでこちらの声が届いている用にアースラに向けて言い放つ



『・・・・・・・・・・』

局員達は今のことが理解出来なかった

R I Nの瞳が開いた刹那、アルカンシエルが消えたのだ。驚愕、唾然、恐怖、畏怖・・・・様々な感情が艦内を支配した

『・・・・・・・・ふふふ・・・・美味しかったぜ、管理局。お礼にこの生物は俺が殺してやるよ。つか殺す！！』

実際、R I Nの言葉はアースラに届いていた

「艦長・・・・どうしますか？」

リンディは顎に手を当て考えていたが、

「・・・・正直、彼の言葉を信じるしかないわね。アルカンシエルの

チャージには時間が掛かるし、連発は出来ない」

最早R I Nに頼るしかなかった

ピピッ

「エイミー！作戦はどうなったんだ！？」

地球で待機しているクロノからの通信だった

「え、えーと・・・ごめん、クロノくん。上手く説明出来ないから今あったことを映像で送るね！！」

今日の前で起こったことをどう説明すればいいのかと・・・。今のエイミーには上手く説明することが出来なかった。そのため映像という素晴らしい機能に役目を丸投げした

R I Nを見ると見たことない魔法陣を展開していた

「クロノくん！映像繋げるよ！！」



あのキモイ生物の真上から魔法をぶっ放そうと決めた

移動し、オリジナルの丸の中に五方星が描かれている紅の巨大な魔法陣を展開し、詠唱を始める

――数多の属性

（終わらせよう）

――数多の感情

（全てを）

――数多の叫び

（望むままに）

――数多の種族

（開放しろ）

――全てを一つに

（さあ、終焉だ）

――我が眼前の敵を撃ち貫き、消滅させよ

（終わりだ。全てを無に）

詠唱が終わり、巨大な魔法陣は小さくなり鈴の口の中へと入っていく。

鈴はそのまま口を思いっきり膨らませ、吐き出す!!

「エンド・オブ・ティアーズ終焉の涙!!」

鈴の口から吐き出されたのは琥珀色の咆哮^{ほうごう}。その大きさは先程鈴が喰らったアルカンシエルより二周り程大きい。

この魔法は簡単な物だ。

鈴は自分の中にあるこの大量の魔力をそのまま攻撃に使えないか？と考えた

自分の魔力が他の魔導師達より数倍多いのは自分が一番理解出来ていた。なので自分のこの魔力をそのまま攻撃に使うことが出来る魔法を創ろう!という結論になり、出来たのがこれだった。

今のところ2つ創ってある攻撃魔法の内一番威力のデカイ魔法である

——終焉の涙——は闇の書の防衛プログラムに直撃した・・・が、その威力は鈴が思っていた以上に強大だった。

砲撃は闇の書の防衛プログラムを貫通し、さらにその真下にある丸い物へと撃ち放たれていった。・・・うん。地球だよ？

自分の魔法を撃ち終わり、闇の書の防衛プログラムを消滅させた鈴の顔は冷や汗ダラダラだった。アースラ内の局員も冷や汗ダラダラだった

「(やっべ・・・しかも真下だから海鳴じゃね?)」

鈴が真っ先に考えたのは自分家の被害。そしてなのはやフェイト達の無事。

真っ先に自分家の心配をする次点で可笑しいのだが、・・・コイツがなのは達を心配するとか・・・人間らしい良心が芽生えたんだなあ・・・と思ったようなキレイな心を奴。ドンマイ

「(アイツ等が死んだら復讐(八つ当たり)出来ねえ・・・)」

心配など欠片もしていなかった。悪魔で(※誤字にあらず)自分の為に相手の都合をつける。それが夜風鈴。

アースラ内でたった今モニターを見ていた局員

地上から見えていたクロノ達

この二組は鈴の使った術式と魔法、威力、鈴から発生するバカ魔力に驚愕、恐怖、尊敬の表情をしていた

驚愕は全員に見受けられる

恐怖を感じたのはアースラ内の局員、リンディ、エイミィ、クロノ、シグナム、シャマル、ザフィーラ、なのは、はやて、ユーノ

尊敬の表情をしたのはフェイト、ヴィータ、アルフ

そしてその光景をモニターで見ていたグレアム、アリア、ロツテは・
・・・

507

「・・・・・・・・（ガクガク）」

「・・・・・・・・」

自分の震える身体を必死に抱いてるアリアと同情の目でアリアを見るグレアム、目尻に涙を溜めてるロツテだ

「・・・・・・・・ぐすっ、アリアア助けられなくてゴメンね」

「すまん、アリア。父親として最低だとは思いますが・・・・すまん」

今の砲撃を見てエリアは鈴の復讐宣告を思い出し、涙目だ

だが、グレアム達を含めた三組がそんなことを思っているなど知る筈もない、つか、どうでも良いと思っている鈴は「次はお前等じゃあああああああああつ!!」と叫びながら再び空間転移魔法【異次元の扉】を使用し、金色の扉をくぐり抜け地上へと戻る

地上にいたなのは達の上空に金色の扉が出現すると中からは全身に傷一つないRIN（鈴）が現れる

「・・・・・・・・」

お互いにお互いを凝視する。だが鈴は無言で下にいるなのは達をジッと見渡す

なのは達はどう対処すればいいのかこちらの様子を見ながら念話で話している所だ

そして誰も鈴の魔法で死んでないことを確認すると

[illegible]

頭が逝っちまったのか？と思う程笑い出し、笑い終わると顔を俯かせる

そんな鈴に警戒しながらもクロノが近付いて来た

「時空管理局執務官クロノ・ハラOWNだ。君に聞きたいことがある。先程の魔法のこと、P・S事件でのジュエルシードのこと……詳細を詳しく聞きたい。管理局に来てもらおう」

クロノの意見は最もだ。この正体不明のRINという存在のせいで事件の資料が上手く纏まらないし、この人物が危険人物ならば捕まえてはいけない。・・・鈴の返答を待つクロノ。だが・・・

「
・
・
・
・
・
や
あ
」

「え？」

鈴の小さい呟きが聞き取れなかったクロノは首を傾げる中、鈴は血走った瞳をギラつかせていた。

そして、

「戦争じゃあああああああ！！」

右手を振り上げ、（クロノ達には）意味不明なことを空高く叫んだ。

「ことごとく俺の平穏な生活を邪魔しやがって・・・ざっけんな！！特にそのホワイトデビル！あと隣の露出度MAX金髪痴女！！お前等だよ！！」

ビシッと指を差した方向に居るのはなのはとフェイト

「デビル！？」

「ち、痴女！？」

お互い指差された者どうし、お互いに顔を見合わせ

「「それって私達のこと！？」」

「ったりめえだろ！あんなふざけた規模の砲撃・・・否！核兵器を人

にぶっ放すとか魔王以外の何者でもねえよ!! お前の後ろに居る幼女も納得した表情で頷いてんじゃねえか!! そんなで「何で私が痴女!?!」って顔すんな! お前、バリアジャケットがスク水とか馬鹿なの? 変態なの? つか露出狂だろ!! 以上のことから魔王と変態って言えばお前等以外誰も居ねえだろうが!!」

「ランクアップしてないかな!?!」

「へ、変態・・・」

「そしてアタシは幼女じゃねえ!!」

「って、フェイトちゃんの落ち込みがハンパやないで!?!」

はやてがメツチャ落ち込んでるフェイトの状態に気づいた

んまあ、んなこたあどうでもいい!

「時に魔王。あの建物に見覚えは?」

指を差す方向には先程鈴が寝ていたビルがぶっ壊れた後が

「魔王じゃないってば!・・・・私が砲撃で壊しちゃった建物なの」

うんうんと素晴らしい笑顔で頷いている鈴。

だが、なのは達からはお面のせいで表情が見えないので口元がつり上がっている不気味な姿しか見えない

そんな場の全員が見守る中、鈴は口を開いた

「俺はな、とある猫に適当な場所に転送されたと思ったら目の前に居たのは銀髪赤目。いきなり吸収されたからムカついて俺の魔法で脱出成功。脱出場所はビルの屋上。一週間徹夜で眠さがパネェからデバイスに見張りさせて仮眠室で即寝。・・・数分後、俺はピンの砲撃で建物事海に水没した」

そこまで話して全員がなのはに視線を送った

「だから思った。戦争だ!」

全員がその言葉に唖然とする中鈴は高らかに宣言した

『な、なんで!?!』

いち早く復活した魔法少女達が一斉にツッコんだ。

「うるせえ！復讐だ！八つ当たりだあああ！全員まとめて死に曝せええええええ！！」

こうして鈴V S魔法少女&少年&淫獣&使い魔&騎士の戦いが始まった

24話 俺は思う。本当の的は原作キャラ達じゃないかと……。そして何故

次回の更新は

9月7日AM3時にアンケート

次に

9月7日AM4時に25話の投稿です!!

アンケート ※出来るだけ答えて欲しいです(汗) (前書き)

なるべく答えて下さい

マジで切実に・・・

アンケート ※出来るだけ答えて欲しいです(汗)

こんばんは／＼(^ ▽ ^)／！

魔法少女リリカルなのは

＼平穏を望む化物。怪物とも言う＼の作者の夜風 彪です★

出来れば今回のアンケートにはマジで答えて欲しいのです

この小説を書き始める前からずっと中学校時代の話しが書きたいと思っていたので、A・Sが終わって一時たったら中学時代の話しを
と思っていますが・・・・

516

アンケート1

『リーンフォースは生存させるか否か。』

アンケート2

『ヒロインどうしよう・・・・ハーレムでいいかな？』

アンケート3

『マテリアルズを出すべきか否か。……生存の場合は3人にどんな性格にして欲しいかを書いて頂けたら嬉しいです』

アンケート4

『中学時代の話を書くか否か』

blue oceanさんの小説を読んだとマテリアルズが可愛く見えて仕方ない!!

・ だから書きたくなった!! でもキャラの性格で困難。これ如何に・

なるべく頑張って書こうと思いますのでアンケートの方よろしくお願ひ致します

メッセージの方お待ちしてまゝす。

アンケート ※出来るだけ答えて欲しいです(汗) (後書き)

メッセージお待ちしております

25話 悪魔達のレベルが上がった!! 悪魔↓魔王。痴女↓変態。ヴィーター↓仲

お待たせしました!!

・・・え? あ、はい。そうですね・・・。

誰も待ってませんよね・・・グスン

戦闘シーンが味噌っカスのサッパリング。文才カモン!!

25話 悪魔達のレベルが上がった!! 悪魔↓魔王。痴女↓変態。ヴィーター↓仲

手始めにR I Nは目の前に居るクロノを殴り飛ばした。

だが、R I Nの拳が当たる直前にクロノもデバイスを盾にし、直撃は避けていた

だが、R I Nの力は凄まじく、防御していたのにも関わらずなのは達が居る場所へと飛ばされた

「くっ・・・!」

「クロノ、無事!？」

全員がR I Nから距離を取り、クロノの側に近づく

「あ、ああ、大丈夫だ・・・だが・・・」

「早い」

クロノの言葉にシグナムが続け、クロノが頷く

「早かった……。とっさに反応出来て良かった」

クロノが安堵の息を吐くが

『っ！？』

高密度の魔力を感じた。全員が一斉に上を見るとR I Nが魔法陣を構築し、詠唱を始めていた

――怒り

――標的

――追尾

――反射

――D・V.

詠唱を始めていた

「やらせるかよ！！アイゼン！」

「了解」

ウィータは前に8発の鉄球を設置し、

「シュヴァルベフリーゲン！！」

4発ずつ往復で叩いて発射した

そして鉄球がR I Nに当たる寸前で

「全員纏めて塵ちりになれーッ！！」

R I Nが叫び、構築した魔法陣が両手に構えた銃の銃口に入って行き

「怒りの暴行アングラー・バイオレンス！！」

ガガガガガガガガガガガガッ！！

R I Nの銃口から出るのは無数の弾

弾と言っても実弾ではない。

鈴の魔力から出来ている魔力弾だ。

R I Nのほぼ無限に等しい魔力を自身のデバイスのソーナに送り続ける。

実際、怒りの暴行とはR I Nの怒りの感情と理不尽な暴力が原因で創られたのだ。
アンガー・バイオレンス

いつかなのは達に復讐してやろう・・・という思いと、シャマルを張っ倒す！という理由だけで創られた。

巻き込まれた者にとってはとても迷惑極まりないものだ

この銃撃で何より凄いののは鈴がソーナに組み込んだ機能だ。

ホーミング
追尾

相手に攻撃が当たるまで永遠と追い続ける。

この機能に鈴のほぼ無尽蔵の魔力から発生する魔力弾を加えると・・・
・・・当然こうなる

R I Nの撃った魔力弾はヴィータの攻撃を打ち消し、そのままヴィータと後ろにいるなのは達に迫っていく

「全員退避だ！」

クロノの声で全員が散り散りに動き出すが、魔力弾は各方面に追尾ホーミングなれていく

そんな中、シグナムがR I N目掛けて一直線に武器を構え飛んできた

「はあああああああ!!」

R I Nに目の前まで近づくとシグナムがレヴァンティンでR I Nに斬りかかる

R I Nはそれを斬られる部分強化で強化した目でギリギリで投げ続ける。

シグナムは投げられても連続の剣撃を辞めない。

R I Nはそれを投げる。

だが、次第にいつまでも終わらない剣撃にイライラしてしまうことになり

後ろに回り込んだヴィータに気がつかなかった

「ぶつとべえええええええ!!」

「っ!?!・・・ぐっ、このやろ!?!」

ヴィータの存在に気がつき、シグナムに一発ローキックを食らわせるが、運良く甲冑に当り対したダメージは無いと考え

すぐに後ろを向き、右拳を握りヴィータに向けて放つ!

だが、R I Nの拳はアイゼンとぶつかり合うと、やはり振りかぶったヴィータの方が力を込めれたのだろうR I Nの拳を弾き飛ばした

アイゼンに飛ばされたR I Nの右拳は骨がボロボロになり、その影響は腕にまで来ていた

ヴィータにより弾かれたR I Nは後方へ飛ばされると突然魔力の鎖で捕らえた

「ディレイドバインド。特定空間に進入した対象を捕縛する設置型捕獲魔法だ。君が丁度良く来てくれて助かった。アルフ! フェレットもどき!」

「フェレットもどき言うな!! チェーンバインド!」

「リングバインド!」

ユーノが魔力の鎖を生成し、既にクロノのバインドで拘束されているR I Nにもう一度縛り付けることで拘束すると、更にアルフが発生させたリングでその場に固定させ、両手両足の合計4箇所を拘束

していた。

流石のR I Nも三重のバインドをかけられた状態では脱出不可能だった

「（このやろ！力が入ればこの程度何ともないってのに！！）」

「今だ！！フェイト！」

「ん？」

拘束されている状態でR I Nが見たのはフェイトが天候操作と遠隔攻撃魔法を使う瞬間だった

「サンダーフォール！！」

※説明 魔法ではなく、自然現象として雷を発生させ、目標に落とす魔法。儀式魔法として長時間の詠唱が必要だった。

フェイトの声と共に空がゴロゴロと鳴り響く

「・・・・・・・・ん？」

ふと魔力を感じ首だけ動かしそっちを見ると

「悠久なる凍土・・・凍てつく棺の内にて、永遠の眠りを与えよ」

足元にミッド式の魔法陣を展開させたクロノがいた

そこで予想外の出来事が起こった

先程フェイトが使用したサンダーフォールで発生した雷がまるで吸い寄せられる用にRINに落ちていった

その大きさは自分が使った『終焉の涙』エンド・ティアーズよりデカイ。

だが、RINに効く筈もなく

「・・・喰らうか」

再び殲滅眼イーノ・ドゥーエによって吸収しようとしたが止めた

代わりに口を大きく開け広げ、雷を吸収していった

そう。殲滅眼で喰らうのではなく、オール・イーター全喰者で喰らったのだ。

鈴はつい最近やっと気づいたことがあった。

イノ・ドゥーエ
殲滅眼で魔法や人などを喰らうと身体能力が上がる。そして傷も治せる。だが、使用していてわかったのは殲滅眼ではいくら喰らっても傷が治るだけなのだ。

オール・イーター
そして全喰者。・・・これはやはり自分で考えた能力だからなのか凄
いチート能力だと思う。例えば、殲滅眼では傷が治る程度だが、こ
の全喰者は違う。

再生するのだ。

喰えば喰う程に身体の再生スピードは上がり、相手の放った魔法を喰らう（吸収）することで相手の喰らった技・属性？を使用出来てしまった。

だが、試したことはないが心臓と脳は再生しないと思う。流石に一発で死ぬ可能性の方が高い

スターライトブレイカー・・・これを喰えば自分でもこれを撃つことは可能だろう。だが、鈴は使わない。なのはから撃たれた時のトラウマがあるから・・・

サンダーフォールを吸収し終えたRINは自分の身体の違和感にすぐに気づいた。

身体の中を巡る様に動く雷・静電気。やはり、フェイトの魔法を吸収した結果、常盤台のレールガンよろしく、鈴は同等の力を手にした

もちろん、こんなもの（雷が消えたの）を見せられた周りは溜まったもんじゃない

故にクロノ達は困惑していた。

クロノ達が先程エイミーから渡された映像で見たのはR I Nの瞳がアルカンシエルを消したものだ

周りからは吸収したのではなく、消した様に見えていたようだ

だが、今のR I Nは瞳を見開く訳ではなく、口を開いたのだ

そんな疑問など気にもせずに鈴は動き出す。大規模の雷を喰ったお陰で粉々に成っていた右腕は再生した

「……ふん！」

バキバキバキバキッパリンツ……

R I Nを拘束していたバインドが悲鳴を上げ、やがて壊れる

壊れると同時にその場を離れると

「凍てつけ!!」

「エターナルコフィン」

「お?・・・」

クロノから冷気が発せられる。その冷気はR I Nの身体を凍らせた

「・・・やったか?」

「油断しない方がいい。何をしてくるか分かるまい」

「で、でもやり過ぎなんじゃ・・・」

「いや、テストロッサのあの雷を消した・・・。こいつの力は未知数だ。警戒するにこしたことはない」

「アタシもシグナムと一緒にだ。つか、シグナムの甲冑に亀裂が入ってるんだが・・・よく無事だったな・・・。」

クロノ、ザフィーラ、フェイト、シグナム、ヴィータの順に言葉を交わす

「・・・なのは、フェイト、はやて。最後に防衛プログラムに撃った全力の砲撃後一度だけ撃つことは出来るか?」

「え、う、うん。私は出来るけど・・・」

「私も大丈夫だよ」

「私は・・・あと一回が限界やな」

クロノの問いになのは、フェイト、はやてが答える

「直ぐにチャージしてくれ！嫌な予感がする」

そしてなのは達3人がチャージに入るのを確認すると、クロノが視線で捉えてるのは氷漬けになっているRIN。

ガキガヤ、ゴリゴリ

そしてその嫌な予感は当たってしまう

その場に居る全員の視線が集まる。

その人物は氷漬けにされたRIN。彼は内側からクロノのエターナル・コフィンで出来た氷を喰っていた。

全員が驚愕の表情で固まっている中、一人黙々と氷を喰い続ける。

やがて頭から腹辺りまでの氷を喰い終わり、クロノ達を見たRINは

「・・・これで終わりか？」

そう言った。

『!?!?』

その言葉で全員が意識を取り戻し、思った。コイツは何者なんだ・・・と

クロノは急ぎなのは達を見るとチャージはすでに完了していた

「3人共! 撃て」

「全力全開!!!・・・スターライトオオオオオオ」

「雷光一閃!!!・・・プラズマザンバアアアアア」

「響け終焉の笛！！ラグナロク！！」

「「ブレイカアアアアアアアッ！！！！」」

クロノの指示通り砲撃を撃つ3人

その頃、R I Nが感じてるのは・・・そう。恐怖だった

「（え、えー・・・コイツ等ただ鬼だよ！？下半身氷漬けにされて動けない奴にあの恐怖の権化とも言える悪魔達の、否！！魔王達の砲撃だ！？しかもぜってー全力全開って文字が違うだろ！全力全壊だろうが！！）」

まあ、・・・全部纏めて喰らうんだからいいけどよ

口を開け、向かって来た3色の砲撃を全て喰らう

クロノ達はその姿を驚愕と呆然の表情で見ていた

「バカな……」

彼、クロノ・ハラOWNは冷や汗をかきながらどうすればいいのか
必死に考えていた

今居るメンバーの中で一番威力の高い攻撃力を持った3人の攻撃で
すら傷一つ与えることは出来なかった

おそらく、他のメンバーが攻撃しても勝算は無いだろう

そう考えていると、ついにRTINが動き出した

「（息吹^{ブレス}を使えば……ふっふっふ。まとめて塵と化せ！）」

RINは全員の顔を一人一人眺め……

「……やっべ、かなり眠い」

『……はぁ!? (。D。≡。D。) ?』

なのはやフェイト、それにシグナムやザフィーラまでもが、というか全員が目点を点にしていた

いやいやいやいやッ！何でだよ！？ここまで来ていきなり睡魔が復活だと・・・？いや、まあ寝たいんだがな？コイツ等倒すまで待ってくれてもいいじゃん・・・しゃーねえ、さっさと終わらせよう

「よし、テメエ等ありがたく思え。用事が出来た。だから速攻で八つ当たりして帰って爆睡すっから全員まとめて塵になれ！！・・・な？」

RINの言葉を聞いて全員が思ったことを叫んだ

『巫山戯んな！！』

もともと全く関係ないのに巻き込まれたクロノやアルフは特に声を張り上げていた

この映像を見ていたエイミーやリンディ、ロツテやアリアは腹を抱えて爆笑

そして今だに文句を言い続けている奴等に前世でちょびっただけみ

た「妖精の尻尾」というアニメの技を元に即興で作った技を使う

口一杯に空気を吸い込む

なのは達が警戒仕出すが、遅い

くらえ!!

「氷王の吐息!!」

RINが空気を吐き出す。すると口から氷が物凄い速度でなのは達に迫る

だが、なのは達は詠唱も魔法陣の出現も無しに、予想外の攻撃がきた為に反応は愚か動くことも忘れてしまった。

全員の下半身が氷漬けになったが、ただ一人八神はやてだけは逃れていた。

今日始めて魔法に出会った少女は魔法の発動条件などは全く知らなかった。その為、いち早く危険に気づいたはやてのデバイスのリーンフォースの助言で助かったのだ

「みんな!!」

はやてがみんなを助けようと動くが

「!?! はやてちゃん! 前見て!」

そして全員が前を向くとRINの口が膨れていた

これで終わりだ!!

「雷帝の暴言!!」

RINが放ったのはフェイトの魔法を喰らって手に入れた力で作った雷の咆哮だ

「きゃああああああ!!」

はやてが叫ぶ。

「はやて!!」

「はやてちゃん!!」

「主!!」

守護騎士達がはやてを助けに行こうとするが足元は凍って動けない。

それにRINが使った雷帝の暴言は守護騎士やなのは達にも襲いかかる

「このッ!!」

「くっ、防御魔法を・・・」

全員が防御魔法でシールドを貼る

だが、咄嗟に貼ったシールドではR I Nのブレスを凌ぐのは無理だった

皆のシールドにヒビが入り、次第にR I Nの咆哮がシールドを破った

『きゃあああああああ!!』

「「うわあああああ!!」」

「くっ・・・まだ、だ!!」

みんなそれぞれの反応を示す

なのは達全員は満身創痍の状態だった。全員がデバイスを杖にしやうと立っている状態だ

「えー・・・まだやるのかよ・・・もうメンドイから終わりでもいいよね? さっきから眉が重たくて重たくて、つう訳でバイバイ」。

だが、シャルさん。あんたは一度張っ倒す。これ絶対」

R I Nは心底呆れとめんどくささと眠さを含んだ表情でそう言い

背中に生やした深紅の六翼を使い遠周りをして去った。

去る途中で魔力にリミッターを掛けたのは言うまでもない

一方、R I Nの去った後の人達は

『えーと、・・・取り敢えず、現場のみんな。お疲れ様?』

『あのR I Nという人物なら本当に撤退したようだから安心なさい。
シャルさん以外は』

エイミィの劳いの言葉とリンディからの言葉を聞いてやっとシャル
以外の緊張が解けた

「・・・・・・・・（泣）」

「や、やっと終わったの・・・」

誰もシャルを慰めない。だって事の原因はシャルにもあるのだから

「確かに、防衛プログラムとR I Nとの二連戦だったからね。それに・・・」

「何か問題でもあったのか？」

ユーノの歯切れの悪い言葉にクロノが返した

「いや、何というか・・・自分の常識が壊れていくのを感じてしまつてね・・・・・・・・・・はあ」

「それには全力で同意する」

クロノがため息混じりに同意すると、アルフや守護騎士達も首を縦

に振った。リンディは笑ター越しに苦笑いを浮かべていた

「・・・なのは」

「ん、どうしたのフェイトちゃん？」

「私、R I Nに今も変態と思われてるのかな!？」

そこでクロノとユーノの視線はフェイトの身体に向く。だが、他の女性陣からの視線が痛かったのか一瞬で視線をずらした。

そんな2人に向ける女性陣の視線はまるでゴミを見る様な目だった

「あ、あゝ・・・そう言えば私も呼び方訂正してもらってない」

フェイトの言葉でそのことを今頃思い出した。

「いやいや、でもダメージ的にはフェイトちゃんの方が大きいやろ。
好きな人に変態って呼ばれるのはかなり辛いで？」

「は、はやてもそんなに大声で言わないでよ!!／／／」

「そーいやアタシも呼び方訂正してもらった覚えがねえ・・・」

「ヴィータちゃんは幼女って言われてたよね・・・・・・・・うん、別に良いんじゃない？」

「よくねえよっ！！何でアタシだけ訂正無しで良いんだよ！？」

「だってその見た目で軽く100歳とか超えてんやろ？」

「うっ・・・そ、それは・・・」

なのはからバトンを受け取ったはやてがヴィータを畳み掛ける。

ヴィータもはやてから攻撃がくるとは思わなかったのだろう。言い返そうにも言葉あ見つからない

その様子をシグナムとザフィーラは微かに笑いながら見守る

「はやて！！」「はやてちゃん！！」

戦いが終わった後、はやては気を失う様に倒れた

25話 悪魔達のレベルが上がった!! 悪魔↓魔王。痴女↓変態。ヴィーター↓仲

次回の更新が未定過ぎて困ってる

26話 うわー・・・何書いてるかわかんねえ。この作品が適当になってきたき

更新遅れてごめんなさい

アンケートですが

？リーンフォースは頑張って復活させます

？ヒロインは何故かハーレムが一番多かったです。

ハーレム

マテリアルズハーレム

メインを一人

ナンバーズハーレム

こんな感じの順位でした

？マテリアル

やっぱり生存の意見が多かった。どうしよう。書きたいけどおそろく文才の無さの御陰で批判が凄い事になりそう

？中学校編

ダイジェストとかの意見が多かったです。

書くとしたら中二からのスタートにする予定です

早くStrikersを書きたいとです

26話 うわー・・・何書いてるかわかんねえ。この作品が適当になってきたき

R I Nが居なくなった後、戦闘の疲れかそれとも病気が原因なのか八神はやてが倒れた

一同は急ぎ宇宙で待機しているアースラに帰還し、はやてをベットへと寝かした。

アースラ内にはずっとモニターから見守っていたアリシアとプレシアが駆け寄って来たが、その日は全員防衛プログラムとR I Nとの連戦で疲れていたため、皆2人の相手などする暇もなく、死んだように眠った

だが、ヴォルケンリッターとリインフォースははやてのベットの側から離れずにその場で夜を明かした

翌日？

はやての病室で目が覚めた守護騎士とリインフォースははやてが眠るベットを囲み話し合いを始めていた

「やはり、破損は致命的な部分にまで起こっている」

リインフォースが冷たく言い、それに続けるように言葉を繋げた

「防御プログラムは停止したが、歪められた基礎構造はそのままだ。私は・・・夜天の魔導書本体は遠からず新たな防御プログラムを生成し、また暴走を始めるだろう」

「やはり・・・か」

リインフォースの説明を聞き、一番最初に口を開いたのはシグナムだった

だが、その口から出た言葉は分かっていたような口振りだった

「修復は・・・出来ないの？」

少し希望を持ちながらシャルが聞くが

「無理だ。完成プログラムの私の身体も夜天の書本来の姿は消されてしまっている」

リインフォースは首を横に振りそれを否定した

「元の姿がわからない以上、戻しようがないということか」

それをザフィーラが悟ったように言うとしリインフォースは首を盾に振り、肯定した

「主はやては大丈夫なのか？」

「何も問題は無い。私からの侵食も完全に止まっているし、リンクーコアも正常稼働している不自由な足も時を置けば自然に治癒するだろう」

その言葉を聞き、シャマルとシグナムは微笑み、心残りは無いという表情をした

「防御プログラムがない今、夜天の書の完全破壊は簡単だ。破壊しちゃえば暴走することも二度とない。変わりにアタシ等も消滅するけど……」

ヴィータが顔を俯かせつつ言葉を言う

「すまないな、ヴィータ」

「何で謝んだよ。いんだよ別にこうなる可能性があったことぐらい皆知ってたじゃないか」

シグナムがヴィータに謝るがヴィータは気にしてないと言った表所でそれを否定した

だがそれをリインフォースが否定した

「いいや、違う」

その言葉にヴォルケンリッター全員の視線がリインフォースに集まる
そんな中リインフォースは口を開いた

「確かに今までならそうだった。だが、今回は今までと状況が違う」

リインフォースは一度口を閉じ、再び口を開いた

「あのRINと名乗っていた少年の御陰だ」

そう言うのと全員が思い出す。あの規格外の非常識という非常識を非常識で塗り変える男を

「あの少年の放った魔法で私を構成していたシステムのほとんどは闇の書の闇とともに消し飛んだ。防衛プログラムが再構築される心配はないが、その分、私も活動システムの再生を行えん。つまり・・・お前たちは残る。おそらく半年後に逝くのは・・・私だけだ」

その言葉に反応したのはヴィータ

「そんなことしたらはやてが悲しむじゃねえか！」

「やめろ、ヴィータ！一番辛いのは彼女だ！」

「っ・・・わかってるよ。でも！！！」

「すまない。それを思うと胸が痛いが・・・。主は聡く、強いお方だ。私の消滅も、御身の糧としてくださるさ・・・この事（消滅すること）は誰にも言わないでくれると助かる。主には・・・もう泣いて欲しくないのだ」

その言葉に主を思う気持ちが誰よりも強く竦っていた。

守護騎士達は首を強く盾に振った

それを見たりーンフォースは

「ありがとう」

そう心からの笑顔で答えた



時は1日戻り、我等が支離滅裂（作者のせいで）主人公の夜風 鈴
に戻る

あの後、鈴は一週間の徹夜と微妙な睡眠による更なる眠気、空腹、
疲れそして恐怖。

これら全てのせいなのかお陰なのか、鈴はあの場合から遠回りで自宅
に帰り着いた途端に冷蔵庫の中にある食料を食いまくった

生だろうが洗ってなかろうが関係無しに取り敢えず食いまくった。

何度もソーナが止めたのだが、鈴の耳にその言葉は届かなかった

そして食い終わった途端に寝室に直行

ぬいぐるみで溢れかえったベッドにダイブし――そう。それは本当に死んだように・・・死ぬように眠った

鈴が次に起きたのは24日の日から既に一週間経ってる31日

「・・・F A C K!!」

起床の一発目の言葉がそれかと言ってやりたい

「起床して、速攻で何言ってるんですか、マスター・・・」

「おお、ソーナ。おはよー」

ソーナの呆れた声でやっともともになった。

そこで鈴は寝ぼけた頭で今の状況を整理した

えーと、今日は31日の23時39分?・・・。はあ!? 31日!
?一週間も寝てたのかよ!?・・・まあ、そこは置いてこう。ええ
と、確かあの悪魔兼魔王達とバトってみつくみくにしてたら急激な
眠気が襲ってきて・・・適当に咆哮ぶっ放して家帰って飯食って爆
睡・・・よし、合ってるな

そこまで思い出すとベッドから降り・・・

あれ・・・、もう直ぐ新年じゃね?つか・・・初詣でないしょ

重大な事を思い出した

「どうしようか?無神論者で神様大嫌いでもし機会があってもし会える
なら張った押すと俺の心と魂に誓った神にお祈りをするべきなのか
?これ以上原作キャラ達と遭遇させないでくれと頼むべきか?」

と、一人ブツブツと呟く鈴の姿はかなり不気味だったと後にソーナ
は語る

「行くか」

結局、行くことを決意した鈴はソーナを首から下げ家を出た



一方その頃、喫茶店翠屋には今から初詣に行くメンバーが集まっていた

そのメンバーを言っていくと

魔王・高町なのは
変態・フェイト・T・ハラオウン
常人・アリシア・T・ハラオウン
年を考えろ・プレシア・テストロッサ
アルフ（子犬フォーム）

豆狸・八神はやて一家
シグ☆たん

エターナルロリータ

シヤマル

ザフィーラ（子犬フォーム）

銀赤・リインフォース

暴君・アリサ・バーニング

葉姫・月村すずか

「何か失礼なことを言われた気がするの」

なのはの言葉には全員が首を縦に振った

闇の書事件が終わり、はやてが目覚めた後、八神家一同は管理局の保護下に入った。

闇の書の主である八神はやては事件の首謀者として重い罪を負わされた

もちろん、ヴォルケンリッター達は反論した。

自分たちが勝手にしたことだと、主に罪は無いと。それでも、ほとんどの管理局員はそれを信じずに一方的にはやてのせいにした・・・

だが、クロノ執務官とグレアム総督の計らいと頑張りによりはやて

の罪は少しだが軽くなり、将来は管理局に入局し罪を償っていくことを意思表示した。そのお陰で今もシグナム、ヴィータ、シャマル、ザフィーラ・・・そして新たな家族リインフォースと共に幸せに暮らしている

※ヴォルケンリッター達はリインフォースとも約束を守り続けている

高町家ではリンディが高町夫妻、兄姉になのはの魔法や現在状況を説明し、なのはとフェイトはアリサとすずかに魔法のことを説明し終えたのが事件の翌日のこと。

魔法のことを知っても二人は今までと変わらずに接していた

魔王「みんな忘れ物とか無いよね？」

狸「ヴォルズ・リインフォース私等は大丈夫や」

魔王「私とアリサちゃん、すずかちゃんも大丈夫」

年魔「ブレシア・フェイト・アリシア私達も大丈夫」

「「ワン」」

恭弥と忍、士郎と桃子の2組は二人で年を越すとのことで、今回は参加しなかった

そして皆揃って出かけた



鈴が今向かってるのは過去になのはのりりカル映像を撮った場所だ

「あゝ・・・タクシー呼ぶか」

「クルマで行くんですか？」

「いや、動物タクシーでだ」

「・・・は？」

「猫オオオオオ!!」

鈴が叫び、3分程経ったころ

[illegible]

夜中だというのに凄い地響きがする

そちらを鈴が見るとめっちゃ集まる猫の群。

それを笑いながら相手にする鈴と呆れ気味のソーナの点滅

「さて、諸君！俺を神社まで運んでくれ！」

『ニヤー！！！！』

そして約80匹の猫は縦横に整列し、その猫の上に鈴が寝転ぶ。

忍法・足輕で自分の重力を無視している為、猫が潰れることはない

「んじゃ、しゅっぱーつ」

猫の上で寝転び、
ノンキな声で言う

そして、猫達は進み出す。

何故だか居心地がいい男を乗せて

「にしても・・・さみいな、おい」

「当たり前です。こんな寒空の中に何故あなたは巫女服なのですか？馬鹿なんですか？」

「デバイスの馬鹿にされる人物はおそらく俺一人。そして答えは一つ服が無いから」

「死ねばいいと思います」

「〇」

一応、もうすぐ明けましておめでとうございます開始時間。

現在鈴を乗せた猫軍が進行しているのはThe 街中。

寒空の下そんな奇怪な行動をして巫女服を纏った鈴と猫軍を見て驚愕や唾然などの表情をしている人々

寝転がったまま周りを見渡す

右を見ると若いカップル

上を見ると鳥の群

左を見ると親子や学生服の集団

前を見るとまたカップル

下を見ると縦横に広がる40×40の猫軍

後ろを見ると高町、八神、テストロッサ御一行

・
・
・
・
・
・

・
・
・
・

・
・
・

ん！？

バツ↑立ち上がり、後ろを向く

鈴「・・・・・・・・」

御一行「・・・・・・・・」

その他の一般人

『・・・・・・・・』

全員が棒立ちだった。

そして、ゆっくりと、ゆっくりと正面を見ると

「全員、全力全開で走れ！！休むな！足を止めるな！己の限界を越え走り続けろ！体力が無くなろうが足の骨が折れようが関係ねえ！死力を尽くせ！！進めええええええ！！」

『ニャー!!』『ニャー!!』

総員ガチの全力で走ってくれた。

つか、予定変更。リリカル神社（爆笑）に行くつもりだったが、もう一つの神社に行くことに。猫に伝え、一安心

ん？なんでかって？何となくだ

「（あそこはあまり人気がないし、知ってる人なんかいないだろうしな・・・）」

その神社は昔孤児院を抜け出したときに見つけた場所だったりする。帰ったらアッキーに怒られたのは良い思い出

「到着！」

着いたのは地元の人しか知らないであろう場所にある神社

無駄に長い階段を手すりを掴みながら駆け上がり本当の到着地

猫一同には今度報酬にキャットフードを買ってあげてことを伝え解散させた。

今更ながら急に呼び出してすまん。つか首輪やら服やら着てる奴は飼われてるんじゃないのか？よく抜け出して来れたな……

時刻を確認

うむ。既に新年だな。

でわ……

奮発して500円を入れ、鐘を鳴らし、二回手を叩く

「今年は平和な生活が出来ますように。一秒でも長く平穏な日々が送れますように。悪魔達とは二度と関わりが有りませんように」

かなり真剣な表情で願い事を口にし、顔の前で拝む

数秒拝むと顔を上げる

「よし、帰るか！」

振り返り帰ろうと後ろを向く

ガラの悪い不良集団が居た



その頃、魔法少女（※一名 魔砲 or 魔王少女）達御一行は目的の地へと進みながら鈴のことを主にして話していた

「ええ！？はやてってあいつと知り合いだったの！？？」

「うん。たまたま図書館で知り合ってたな」

アリサの驚愕の声にはやては事情を話す

「まあ、その後はアタシやザフィーラと偶然合ったり、はやてが家に招いて一緒に飯食ったり・・・シグナムが木刀持って追いかけ回したりとか。最近は全然合ってなかったけど」

何気に全員がシグナムをジト目で見るが本人は明後日の方向を向いている

「それより・・・鈴くんって何者？」

そう疑問に思ったのはずか

「何者って・・・巫女服似合ってたね」

「ほんまになあ・・・自身無くすわ」

「「負けた・・・」」

苦しくなのはたちが答えた。

プレシアは明後日の方向を向いていた

そんなプレシアをリインフォースが見ていた

全員『否定出来ない』

全員が子犬フォームのアルフとザフィーラすらもそう答えた

「にしてもよお、多分あいつ相当強いぞ？アタシでも勝てるか分かんねーし」

「ヴィータちゃんが！？」

「勝てるか！？」

「わからないやてえ！？」

ヴィータの言葉になのは、フェイト、はやては驚愕した

アリサとすずかはあまり詳しい内容が解らないため頭に？が浮かんでいる

アリシアはだいたいはクロノ達からヴォルケنزの事情を軽く聞いたので理解に時間はかからなかった

長い戦いを経験してきた夜天の書の守護騎士の一角、その中でもア
タッカーのポジションにいる鉄槌の騎士が勝てるか分からないと言
ったのだ

シグナムやザフィーラもヴィータの意見には同意のようで頷いている

シャマルはヴォルケンリッターの中でも参謀のような役割で戦闘向
きではない為、そんなこと今の今まで知らなかったようで「え、え
え？嘘・・・よね」とか言ってる

そんな中プレシアは困っていた

自分は鈴の正体を知ってる。

鈴「R I Nということを知っているのだ

そして一番の問題は・・・

金髪のツインテールを揺らし前を歩く二人の娘を見る

——二人がR I N（鈴）に好意を持っていることだ

そのことをずっと悩んでいた。二人にR I Nの正体を言えば間違い

なく・・・我が娘は控えめにだがアプローチをかけるだろう。

それは良い。というかアリシアやフェイトが鈴と付き合う、恋人になる。もしそうなった場合プレシアはもちろん喜んで祝福する

だが・・・、

「（問題は鈴なのよね・・・）」

二人にR I Nが鈴のことを教えることは簡単だ。

けど鈴の過去や生活を少しでも聞いていたらとても教える気にならない。罪悪感でいっぱいになりそうだ

そんなことを考えていると隣にリインフォースが寄ってきた

「あの、すいません。少々聞きたいことがあるのですが」

「？何かしら？」

「あなたはR I Nの正体を知っていますよね？」

プレシアの耳元でリインフォースが小声で尋ねた

一番幸せな夢を見せ続ける事が出来るんです。

その魔法は普通なら抜け出せる訳ない。でも彼は自分であの魔法から脱出しました。

・・・彼の記憶には幸せなんてなかった

有ったのは黒（闇）と赤（血）。朱くて、黒くて、赤くて、暗くて光なんて無い暗い空間

・・・何というか今は幸せを求めているようで、頑張ってますが、全部裏目ってますけどね」

あの時はホントに驚いたと呟くりインフォースを横目にプレシアは

「はぁ・・・（・・・貴方、鈴のことどこまで知ってるの？私は彼が小学生になってから不幸の連続であることは鈴から聞いたし・・・私が同情するくらいには知ってるけど）」

その質問にリインフォースは笑いながら答えた

「（産まれてから吸収した時までの全ての記憶です。・・・何というか・・・その・・・同情する部分もあるんですが、自業自得じゃないかと思う所が何ヶ所ありましたね）」

「（それには同意するわ。・・・鈴の正体のこと黙っててくれない

「？」

「（もちろんそのつもりです。このことは主や騎士達にも話してません。でも近い内にお礼を言いたいですね）」

「（その時は私に言って。何とか会ってくれるように试试看から）」

「（本当ですか！？ありがとうございます！）」

二人で話してる内に自然と笑っていたそうではやとアリシアに指摘されてしまった

「よっしゃ、着いたで！」

「ここはあまり人が来ないからね。多分私達が一番乗りだと思うよ」

すずかがみんなにそう言うがシグナムがそれを否定した

「いえ、一番ではないようです。上の方に人の気配があります」

前にある階段の上を見上げる

「じゃ、はやてちゃん♪抱っこしましうね〜♪」

「ほな頼むな、シャル」

シャルがはやてを車椅子から抱き上げる

「みんな早く登ろうぜ」

「あっ、アルフ！喋る時は念話でって言ったのに・・・」

「見つかったらどうするんだろね？」

フェイトの呆れの声にアリシアがちよつとした疑問を抱いたがまあ、いいかという感じで皆が階段を登ろうとした時、それは表れた

「うわあああああああ！！」

長階段の上から人が落ちてきた。訂正。転がって落ちてきた

男。それも明らかに遊び人。不良と判断出来る見ための男が上から転がり落ちてきた

「「よく死ななかったな・・・」」

「何でシグナムさんとヴィータちゃんはそんなに冷静なの!？」

「ちよっ、大丈夫ですか!？」

「なのは!?!近づいたら危ないでしょ!?!」

「アリサちゃんも人のこと言えないよ・・・」

妙に冷静なシグナムとヴィータになのはがツツコミ、駆け寄って行くのはをアリサが追いかけて、すずかは二人の行動に呆れてる・・・
取り敢えず男は無事。

「あ、ひ人?・・・た、助けてくれ!上に・・・上に化物がいるんだ
ッ!!!」

いい大人がみつともない。

シグナムはそう思ったが口にはしない

「・・・・ハハハハハハッ！！」

上から笑い声が聞こえた

その笑い声を聞いた男は青い顔を更に蒼くし身体を震わせ始めた

「（フェイト！あたしは上の様子を見て来るよ！何かヤバそうだ）」

「（主、私も行きます。）」

「（・・・・うん、危険だと思ったら直ぐに逃げてね）」

「（了解や。気いつけてな）」

子犬の姿のアルフとザフィーラが階段を駆け上がって行くのを見送った

男は自分が助けを求めているのが小学生と分かっているのだろうか？

・・・わかってないだろう

「取り敢えず、貴方は帰りなさい。ここに居ては危険なんですよ？」

プレシアがなのはの横に立ち男に言うと言は脱兎のように走って行った

「じゃあ、私たちも上がりましょうか。全員警戒を怠らないように」

プレシアの言葉に全員が頷き、上へと向かって行った



時間は少しさかのぼり鈴の視点に

・・・で、話をまとめてみると

ここの（神社）はあまり人気がない。

←

不良のたまり場に持って来い！

←

そこに唯お参りに来ただけの俺。突然に「ガキが邪魔すんじゃない！」「ここって巫女とか居たのか？」との罵声。

←

どんどん増えていく罵声の嵐。子供相手に言葉の暴力・・・しかも人数差27人。

←

「お前等大人げねえにも程があんだろ！？」「と言い返すと

←

「うるせえ！！」と殴り掛かってきた。短気過ぎる・・・とか思いつつも投げ際に下に潜り込んで鳩尾に下駄の先で（死なない様に加減して）蹴り上げてやった

で、そいつ白目でパタリ

→今ここ

「新田ッ!？」

お前新田って名前なんだな。何でモブのくせに名前が出てんだよ

「あのガキを潰せ!!子供だと思って手加減するな!!」

リーダー格らしき不良男の言葉で28人全員が何処から出したのか武器を片手に一斉にツツコンで来た

「(・・・・・・・・ただの正当防衛で何で潰されないけんのだ?)」

不良達を目で捉えながら鈴は何故こうなったのか考える。そして直ぐに考えは終わる

「(・・・・・・・・ああ・・・・。そういうことか・・・・。結局神様は俺のことが大嫌い何だな)・・・・・・・・フフ、フフフ、フフフフフッ
!!」

突然の鈴の笑い声に不良達の足が止まり、不良達の表情に恐怖が表れていた

「・・・・・・・・死んで後悔すんじゃねえぞクズ共!!」

「ッ！上等だ！全員あのガキを殺せ！！」

リーダーが言うのと再び武器を手に走り寄ってくる不良達

「来いやー！ッ！！俺の八つ当たりとストレス解消の為に塵になれ！！！」

立っていた位置から消えたと思わせる様な速さ（伝勇伝のアニメ18話でティーンアがライナとフェリスに攻撃を仕掛けた時の動き）で金属バットを持った男の前に移動すると直ぐ様攻撃に移る

「虚刀流『雛罌粟』」

男の右腕を肩から切断し、叫ばれると五月蠅いので首に手刀を落とす意識を経つ

手に付着した男の血を舐めると周りの不良達の顔色が真っ青になる。

だが、リーダーの男は無能なのか一斉攻撃を辞めようとしなない。あくまで数で勝負するつもりだろう。まあ、それに付き合っている奴等もバカなのだろうが

鈴が目を付けたのは自分を化物を見る様な目で見て怯えている10人くらいの固まっている集団だった

再び消えた様に動く

「虚刀流『百合蹴撃混成接続』」

一瞬で10人あまりの不良が血を流しながら倒れた

『百合蹴撃混成接続』

鈴が独自に生み出したオリジナルの虚刀流

『百合』 胴回し蹴り

『黒百合』 切上前蹴り

『鬼百合』 膝蹴り

『姥百合』 後ろ蹴り

『姫百合』 踵落とし

『笹百合』 薙ぎ蹴り

『車百合』 縦回転蹴り

『姫早百合』 旋風脚

百合の蹴り技を47蹴撃で相手に叩き込むこと。

鈴は他にもオリジナルの虚刀流の技や奥義も開発しているがそれはまた今度

自分が倒した不良達を見ながら、鈴は自分の身体の中で燃える何らかの感情を持て余していた。

「（なんだこの気持ちは？興奮しているのか？楽しい・・・？それとも俺の身体のせいかな？）」

生き物の本能とも言える闘争心。・・・それは自分の中の別細胞が感じている高揚感

相手や敵よりもっと強くという向上心。・・・それは自分の中の別細胞が感じている弱肉強食という世界観

敵を力で吹き飛ばした愉悦。・・・それは自分の細胞が感じている本能

闘争を喜び、歓喜する・・・強くなることを喜び、楽しむという自分の中の荒々しい物を見つけた鈴は

「前から感じてたのはこう言うことだったのか。・・・俺って自分のこと平和主義者だと思ったんだけどなあ・・・」

自分の中でかなり申告な悩みになりそうな答えにたどり着いた瞬間だった

鈴の敵で八つ当たりの相手の不良達は鈴に喧嘩を売ったことを後悔していた

10人あまり居た仲間が一瞬で血まみれになったのだ。もう全員が逃げ出したいと言う表情をしている

鈴はそんなことお構いなしに攻撃を仕掛けてくる

「虚刀流『薔薇』『野苺』『桜桃』!!」

体重を乗せた飛び蹴り、両肘使ったの連続打突、上方からの浴びせ蹴り。

再び虚刀流の蹴り技が繰り出される。それを放つ鈴は不良達の恐怖の表情とは反対に凄く楽しそうだ

「ふう……あと一人!」

自分の真横にある屍の山を見てそう呟く

不良達の中で残ってるのは最早命令していたリーダーだけだ

他の不良は一名を除いて全員重傷や軽傷を負い気絶中

鈴の身体で赤くなってない箇所は無い。

白かった髪も。白いのも。赤い袴も。

何もかもが返り血で赤くなっていた

別に殺さなくてもいいと思っていたが、先程倒した腕にタトゥーを彫ってあった残り一人の不良が懷から拳銃を取り出したのを見た

諦めが悪い不良とそれを見てイラつとした鈴は自分の左人差し指を銃口に変え両手を発泡した

それでも歯向かってくるので残ってるリーダー不良に見せつける様に惨殺して上げた

指を一本一本と丁寧折っていく。

先ずは第二関節。次は根元。

もちろん相手は神経の通った普通の人間だ。

・・・不良だけど。

当然痛みに耐えられる筈もなく叫び声を上げる

だが鈴にとってはそれは唯五月蠅いだけだ

だから次に喉を潰した

横目でリーダーの不良をチラリと見ると顔を青から蒼に変え、尻餅を付いて動こうとしない

あまりの恐怖に動けないようでその場から一向に動かない

それを確認した鈴は更に不良を苦しませて行く

腕を折る。反対の指は砕く。腕は潰す。

『虚刀流・石楠花^{しゃくなげ}』を使い両足の指は踏み砕いた

※石楠花^{しゃくなげ}・・・一言で言えば大震脚

凍空一族の怪力と既に身体に溶け込んだ動物達の細胞で無双になっ

ている力を駆使した『虚刀流・蒲公英』で腹を貫き、臓器握り潰した

その結果、鈴の身体は不良の返り血でビチャビチャになった

そこでふと気がついた。死体が此処に有るのはマズイ。

殲滅眼でその死体を喰らった

「不味ッ……んで、最後はお前だけだな」

顔を一人残ったリーダーに向け歩き出す。

リーダーは相変わらず蒼く、涙と鼻水でグチャグチャになった顔で鈴を見て情けない声を上げる

鈴はそんな男に近づき目の前でヤンキーの様に腰を落ちし

「お前等……よくも俺の願いをソッコーで否定しやがって！無神論者で神様何て大っつつっ嫌いな俺がめんどくさいの我慢して平和な生活が出来ますようにって祈ったのに……祈った側から失敗じゃねえか！！」

自分の怒りを爆発させた

「俺は平穩に暮らしたいんだよ!! 惡魔達に関わりたくないんだよ!! 日常が欲しいんだよ!!」

「あ、ああ惡魔はお前だろッ・・・」

震える声で頑張って言うが

「ああ!?! なんだって!?!」

瞬時に近づきブレーションクローを仕掛ける

「がッ痛い痛い!!!!!!」

「ん?・・・氣絶とかどんだけ!?!」

その後、鈴はリーダーの男を掴んだまま半殺しにした不良達を一部に集めその上で寛いだ

「ああ・・・最高ッ!!!!」

鈴は戦いの楽しさを知ったのだった

「アハハハハハハハハハハッ!!」

夜。巫女服と着用していた鈴が狂喜していた



その頃、階段を登りきり、神社に着いたアルフとザフィーラは

「アハハハハハハハハハハッ!!」

「.....」

「.....」

啞然としていた

「なあ、こういう時ってどうすればいいんだ?」

「・・・俺に聞くな。それよりも・・・気を付けろ」

ザフィーラが警戒しているのは人で出来た山の上に立って、夜空を見上げながら狂ったように笑う者・・・つか巫女

だが、その人物は月の光によって出来ているシルエットのせいでは何者なのかわからない

階段を上がってさあ、何がいるのかと警戒して上がって来ると真っ先に視界に入ったのは人間の山

死屍累々。この言葉が今はしっくりくる。

なんせやたらと図体がデカかったり武器を持った男達が積み上げられているのだ

そして警戒すべきはその死屍の上に居る人物。

アルフは思った

取り敢えず笑うの止めてくれ。怖いから・・・

アルフもザフィーラも自分の主達が来るまでは自然体で警戒しておくつもりでいる為、警戒心バリバリという訳じゃない

ただ死屍の山の前に2匹揃って（子犬型で）座り、上に居る人物を見上げる

「アハハハハハハ、・・・・ん？」

ずっと笑っていた者は自分たちの存在に気付いた様で山から飛び降り、目の前に着地する

「子犬？・・何でこんなとこにいるんだ？」

そこで今までは影で出来たシルエットで見えなかった人物の顔が明らかに、ザフィーラは頭を抱えなくなった

というか実際に頭を抱えた。

「（・・・・何故ここにいるのだ・・鈴。そもそもお前は男の筈ではないのか？）」

死屍の山から降りてきたのはかつて自分とヴィータを公園でアイスを食わせてくれた少年。夜風　鈴だった。

だが、何故巫女服を着ているのか疑問だったが

「（取り敢えずその手に掴んでる人間を離せ。何のホラーだ。・・・ん、髪や服が所々赤い？）」

「（・・・？何で手が真っ赤なんだ・・・っ！これって血じゃないか！？）」

アルフ、ザフィーラも共に赤の正体に気付いた。

もともと今は子犬フォーム。鼻が良く利く。一瞬でわかったのはそのお陰だろう

そして鈴は自分たちの目の前でヤンキーの様に座り込みじっと二匹を観察し出した

「・・・・ああ・・・何か癒されるなあ・・・」

「「（？）」」

鈴の言葉の意味を理解してない二匹は何のことが解らない

「やっぱりあれだな・・・動物たちは俺の心のオアシスだな！」

「鳥類も魚類も哺乳類も・・・人間は除く。みんな俺の見方してくれるからな」

さっきまでの恐怖の権化の様な雰囲気はなく、現在超ご機嫌な鈴

アルフとザフィーラはほっとした

「やっぱり同族の匂いをするのか？あのキチガイ・・・俺が実験に耐える度に狂笑するし、保管されてある細胞やら血液を量も考えずに投入してきたからなあ・・・。もしかしてさっきの高揚感もそのせいかな？獣の本能的な何かだったり？・・・それが有り得そうだから怖いわww

はあ、化物で怪物だが俺だって一応人間なんだよな・・・」

一人ぶつぶつ言ってる鈴に困惑している二匹の子犬

声が小さ過ぎて全く聞こえないのだ

「てか5歳の時既に白髪&瀕死の子供って現実離れし過ぎじゃね？」

そこんところどう思うよ？と二匹に聞いてくる。

アルフとしては「知るか！」と全力で叫びたいがそれではフェイトに迷惑がかかるので我慢した

「あつ、お前等面白い物見せてやるよ!!」

突然鈴がそう言い出し、アルフとザフィーラは黙って鈴の行動を見
ていた

「名付けて……人間テトリス」

「?」

その単語に二匹は揃って首を傾げた

「先ずは……コイツは凸だな。フッ」

ボギッ。適当に引きずり出した不良の関節を外す

「(ッ!?!?おいおいおい、コイツは何やってんだよ!?!?)」

「(止めたい……だが、此処で姿を変えれば主達に迷惑が掛かる)
」

「んで、コイツは凹っと♪ ふっふふ〜ん？ コレは・・・縦棒で良っか♪」

二匹が止めることを考えている間に鈴はどんどん関節を外していきテトリスを完成させていく

こうして不良たちは縦に積み上がった

「完成だ!!」

そう宣言するとくるっと後ろを向いて

「どうだ？ 結構な自信作何だが」

「（そんな血まみれの笑顔で言われても・・・っていうかホラー）」

アルフはそう思うが此处で喋れないので我慢する

「ふふっだが、これだけでは終わらないのが俺!!」

「「?」」

足に力を入れ構えを取り思いっきり・・・

「ザファイーラ！状況は！？」

振り切った（蹴り飛ばした）ところで御一行登場。

「・・・・・・・・え？」

『！？』

状況確認。

俺、返り血で真っ赤。

周り、腕やら足やら武器やらが転がってる

上。空飛ぶ不良達・・・否星になった不良達

それを特等席で見守る二匹の子犬

いきなり表れた高町・テストロッサ・八神家御一行

「……どうしよう状況……。」



「じゃ、この状況の説明お願い」

御一行さん達到着。

それと同時に即座に走り出そうとした俺の襟首をプレシアさんが掴んだ

ついでに言うときりを魔王様、変態、暴君、シグ☆たんに囲まれた。

残りメンバーは逃げられないように階段付近で待機

そして……何故だろうか？魔王様と変態を見た瞬間俺の膝が大爆

笑し出した

という訳で結局新年早々に完全エンカウントしてしまった

うん。・・・今回で完全に懲りたわ・・・俺の中の何処かにある神様に頼りたいと言う願い・・・Good Bay!!

「・・・だから・・・深夜に・・・どうして・・・? ちょっと聞いているの?」

「いや、聞いてない」

「ムキーーーーッ!!」

暴君がセツトしてある髪の毛をガシガシとして奇声を上げていた・・・無視だな

いつの間にか俺に話しかけていた暴君にキツパリと言い切り再びこの状況をどうしようかと考えた結果・・・ポンッ

「よし、逃げよう」

「逃がさないぞ?」

「orz・・・」

シグ☆たん・・・怖いッス

「それで鈴くん」

「!?!? なななな何だ!?!」

「え、いや、ちょっとお話しを」「いやあああああ!?!」な、何
!?!?」

なのはの言葉を聞き、鈴が叫び声を上げ、なのは驚き

「お、おおおおO☆H A☆N A☆S H Iだと!?!?あの神すら滅殺
&消却出来ると言われる（鈴のみ）伝説の必殺肉体言語を俺に使う
のか!?!?」

「・・・話しが超展開の急展開でついていけないの・・・」

「あのっ」

「今度はお前か変も．．．（．◇．）？」

プレシアさんが何か言ってる。

聞こえないけど．．．

取り敢えず．．．この状況どうする！？どうすんの俺！？

26話 うわー・・・何書いてるかわかんねえ。この作品が適当になってきたき

ほんと、更新しなくてすいません。

一応今年が受験なので更新が遅れると思いますがこれからもお願いします

でも、何故かまじこいの執筆だけはどんどん進む。これ不思議

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2506t/>

魔法少女リリカルなのは～平穏を望む化物。怪物とも言う～

2011年11月27日19時57分発行